

赤軍

No. 1

- I 我々の立脚すべき地点
- II プロレタリア世界 = 日本革命の道と
我々の緊急な任務
- III 現代攻撃型世界革命と我々
- IV 現代革命 (III)

共産主義者同盟赤軍派

我々の立脚すべき地点

目次

序章 スローガン・党の型

第一章 世界（世界階級闘争）

一節 過渡期世界と世界階級闘争

(一) 経済過程に於ける帝国主義の主軸性

(二) 世界はブル・プロの二大階級の非和的闘争の場である。

それ以外の第三世界と第三世界観はない。

(三) 攻撃型世界階級闘争、攻撃型世界革命

(1) 過渡期世界と受動から攻撃型への変化問題の設定

(2) プロレタリアートの世界命革の根拠地の登場、ブルの自己矛盾した主

観的帝国主義政治の追求とその必然的破産

(3) 労働者国家と現代修正主義

(4) 危機の引き延しと人類史未曾有の破局Ⅱ全世界永続戦争と現代プロ

レタリア世界革命

二節 ロシア革命以降の帝国主義（現代帝国主義）

(1) 結論 帝国主義

(2) レーニン帝国主義の根本的全面的正しさとその強調点及び付加すべ

きこと。

(1)

(2)

(3)

(4) 基本「新」現象と現代資本主義論争

(1) 基本「新」現象

(2) 現代資本主義論争

第二章 ブルジョア社会と帝国主義国家

一節 生産過程、市民社会・国家

二節 諸階級の政治への参加—支配の論理—具体的政治過程

三節 帝国主義国家とプロレタリア世界革命

四節 国家死滅の経済的基礎Ⅱプロ独暴力革命の修正主義と現代無政府主義

第三章 我々の世界革命戦略、及び世界党建設

一節 世界階級闘争の有機的全体性とその鎖の一環としての独自性

二節 序章の(1)~(4)のスローガンの説明

(a)

(b)

(c)

(d)

三節 世界プロレタリア党

四節 レーニン死後の国際共産主義運動

(一) 第一の世界革命の波とそれ以降、レーニン、ローザ・トッキキー・スタ

ーリン

(二) 第二の世界革命の波とその挫折

(三) 第二の波、その全体性・世界革命戦略

(四) 独仏革命の挫折とスターリン主義の現代修正主義への転落

(五) ファシズム・人民戦線・現代修正主義の帝国主義との和解

(六) 毛沢東主義とその岐路

(七) 米革命の挫折とニユーディール

(八) 日本革命の挫折、国際主義と世界革命戦略の存在

(九) 第三の革命の波の挫折とその結果と展望

第四章 党の型と実践論

一節 共産主義者及びその組織の登場

- (一) 実践の目的性と「人間」認識（唯物弁証法）
- (二) ブルジョア社会の内外と対象化、目的意識性の獲得
- (三) 共産主義者の戦略—戦術的結集とその組織の獲得—武装された前衛への転化

二節 労働者階級の自然発生性と共産主義者の目的意識性の分離、結合について

- (一) 自然発生性—目的意識性の萌芽
 - (I) レーニンとメンシェヴィキ・トロ・ローザ、山川—福本論争
 - (II) 自然発生性、市民社会と国家、権力—上部構造の階級性とブルイ
- ダイオコヤ—
- (一) 党の階級闘争に果す役割、その戦略—戦術的実践と労働者人民からの分離と結合
 - (I)
 - (II)

三節 党の具体的実践活動

- (一) 権力闘争、理論闘争、党組織闘争、党純化闘争
 - (I) 権力闘争
 - (II) 革命的敗北主義
 - (III) 全人民的政治闘争、個別闘争、最大限綱領と全人民的政治パクロ
 - (IV) 政党間統一戦線と党派解体戦術
 - (V) 直接の政党活動の必要性—政党運動、大衆組織の中での前衛となるべき態度
- 四節 現代革命と組織論
- (I) 現代革命と組織論の諸前提
 - (II) 現代帝国主義市民社会と我々の組織論

序章 スローガン・党の型

我が同盟のプロレタリア世界革命実現の階級闘争—党形成に於ける諸戦術駆使の実践的基盤は次の「戦略—戦術」と「党の型」の二つである。

その一は

- ① 帝国主義と排外主義と現代修正主義に抗し、一切の階級闘争を攻撃的階級闘争として組織し、民族解放—社会主義—労働者国家への一切の反革命反対、世界革命をめざす革命的プロレタリア独裁実現—帝国主義政府の侵略、抑圧、反革命粉砕—に集納せよ
 - ② 国際的侵略、反革命反対闘争に一切の階級闘争（特に反合闘争）を国際的に結びつけ内乱へ—プロレタリア世界革命を同時に実現せよ
 - ③ 農民、小ブルをプロレタリアートの反帝同盟軍として結集せよ—④ 全人民の武装—あらゆる闘争を武装闘争を主要な戦術形態として展開せよ—日本革命戦術戦術も以上の③であるが④の「侵略、反革命」は日本革命に至るまで、反戦闘争として闘われ、特殊に重要である。その二つは、(一)の戦術の確認の上で、世界日本支部として、職業革命家による、上からの中央集権的型をもつ、ボルシェヴィキ—レーニン党の「党の型」の実現にある。
- かかる二つの結論はM・L主義に従った以下
- (I) 世界階級闘争（過渡期世界と歪められた労働者国家群と帝国主義世界）
 - (II) ブルジョア社会と帝国主義国家
 - (III) 戦略—戦術による階級形成と党形成
 - (IV) 世界革命戦術と世界単一党
 - (V) プロレタリア党の党の型の五つの認識と意識に支えられて提出されるものである。

第一章 世界（世界階級闘争）

第一節 過渡期世界と世界階級闘争

(一) 帝国主義の延命とその超巨大金融独占資本主義への発展及びその一層の腐

- (I) 合法的大衆的前衛党とその影
- (II) 現代帝国主義市民社会と階級闘争の型、自然発生性
- (III) 目的意識的階級闘争の推進と我々の組織の型、世界単一党の実現

朽、寄生性の増大

(一) 植民地半植民地国家の植民地経済の疲弊と永続的危機

(二) 労働者国家の社会主義生産の限界と帝国主義からの制約、これは根本的には社会主義原始蓄積の脆弱性と主体的には非資本主義圏の総合的分業の立ち遅れ、各国的分断に根拠をおくかつ経済の限界はプロレタリア世界革命政治においてのみ解決される。

(三) この点は労働者国家—社会主義—共産主義と経済の発展が階級闘争の発展を消滅させるといってテーゼ—階級闘争をぬきに支配関係を労働者国家に適用することに對する批判—の三つから成立している。

だがこの三つの経済的ブロックは個々バラバラに存在するのではなく、(一)は(二)に直接に規定され(二)はそれ自体の独自性を持ちながら、帝国主義に制約され、世界階級闘争を通じて帝国主義に根本的に規定されている。

帝国主義は、それ自体の運動法則を、発展させるが、労働者国家の原始蓄積の脆弱性は一国経済とあいまって発展の限界をもち、その矛盾は政治的に経済は政治に優先され、解決されねばならない。

従って世界の下部構造は帝国主義の運動法則に直接、間接に規定され機軸に運動している。

二

- ① 三つのブロックの階級闘争は帝国主義の運動を通じ、ブルジョアジーとプロレタリアートの非和解的対立を機軸に相互に関連し合い、互いに結びつきあい単一の全体の一環である。
- ② (I) 帝国主義内部の階級闘争は具体的現実的なブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争である。
- (II) 植民地半植民地の階級闘争は民族ブル反動化と帝国主義との癒着、プロレタリアートが権力を掌握しながらも、社会主義経済の限界からの内部の階級対立はプロレタリア人民のその目的を世界革命の政治的根拠地に転化せしめるプロ独の意識性によってのみ階級対立は止揚の方向を見出す。強硬の工業化、工業と農業のバランスはかかる方向で推進されねばならない。

労働者国家内部の階級対立は、資本主義生産諸関係の残存とブルジョア制度の母胎とブルイデオロギー故に、社会主義生産の限界の露呈過程で他方での外部からの反革命攻撃と結合し全面化する。

この顕在化は外的な根本的に当該国の「世界革命戦略」が破壊する過程に照応する。

内部での資本主義生産諸関係制度イデオロギーの残存、社会主義生産の限界、外部からの反革命攻撃の結合を通じての階級闘争は非プロレタリア階級のブルジョア思想と要求は自らの政党不在故、当該国「共産党」の内部に浸透し、それを修正主義の不均等発展—市場再分割成への不可避的経済過程に照応した。侵略、抑圧、反革命の全世界戦争へ①発展政治過程に於て、三者の内在性を諸国家の特殊な第一のもののへと、そしてその全体の鎖の一環へと転化する経済的政治的基礎を与える。三者内部相互の力関係の規定し合いはその基礎に帝國主義のブルジョア階級プロレタリアートの力関係に発展転化し、逆に前二者の力関係と先進階級闘争への影響は根本的なものとなる。

三

ロシア革命以降、とりわけ中国革命、東欧革命を経たかか世界が三つのブロックに分裂している。厳密には二つ、世界は世界史にとって如何なる時代であるのか。このことは現代革命の基本点を獲得する前提である。我々はかかる世界史の特殊な時代を人類の、①自然史の最終ベージであり、②世界プロレタリア革命最終の前後夜、③世界階級闘争に於けるプロレタリアートの攻撃的段階と結論づける。

俗物にはかかる時代は奇妙で人類史の破局、来世とみえるかも知れない。だが歴史は根本的に発展し、鉄の法則を貫徹し、ブルジョアジーの資本主義社会を追いつめ、歴史の主人公をプロレタリアートと世界社会主義に席を明け渡さざるを得ない最終段階に至っている。

④ 産業資本主義から帝國主義への発展転化はその対立物—帝國主義の墓場人プロレタリアートを大量に生み出し、その世界觀「マルクス・レーニン主義」と指導部ボルシェヴィキ・レーニン党を完成させた。そして、帝國主義の鎖の弱い環を、プロレタリアートは、ボルシェヴィキ・レーニン党を先駆に打ち砕き、ソ連

とプロレタリアートの建設が焦眉の課題であった。かかる受動的革命とは違って、現代の革命は革命に向けて攻撃的である。

プロレタリアートの根拠地が出来上ることによってその根拠地を通じ、政治的にも、組織的にも、各国の分断された階級闘争は、統合単一化され、同時に各国に、経済的発展に規定されながらも相対的強自に陣地を築くことが可能である。

誤解されないようにブッチャや構軍派の如き、経済過程の構造改革でなく、先進国に於ては、労働組合、他大衆組織の強化拡大及び合法的政治活動の獲得である。

又、後進国では解放区とゲリラ軍である。これらの陣地戦は、何も根拠地からの要因によってのみではなく、前述した金融独占の巨大化を通じて、労働者の大量な輩出とその團結にその内均的経済的基礎をおく。又後進国は、五十年代の水平

分業の発展とアム帝の支配取奪の極限的危機がそれである。これらの根拠地の存在と根拠地と結びついた世界階級闘争の攻撃的質への転化は、國際帝國主義政治に如何なる影響を及ぼすのか。ロシア革命以前、古典的帝國主義政治に於ける帝國主義者の敵—プロレタリアートは、各国國民国家毎に分断され、内にあった、だが根拠地の存在を通じて、各国帝國主義は外と内（それも結合された）の敵と対峙せざるを得なくなった。金融独占ブルジョアジーは延命し、その

巨大な資本力によって國家を占有し、最も自己の特殊利益を全社会的に國民利害の幻想によって貫徹するかの如くみえたが、他方同時に、プロレタリア人民が根拠と明白に陣地をもつことによって支配の効率を半減させ、自己の利害と対立し

ない限りに於て労働者國家に対し政治的には同盟を余儀なくされた。彼等は内のプロレタリアートを支配せんとすれば、攻撃的反革命と同盟攻撃を展開せざるを得ないのである。アメリカ帝國主義の圧倒的経済的優位を基礎に各國帝國主義は、自己の経済的利益を犯さない限りで同盟し、ソ連修正主義指導部に核反革命

体制でどうかつし、同盟をテコに國家間帝國主義政治に巻きこんだ。だが、西欧日本帝國主義にとって、経済的に自立しながらも、政治的には、相対的に劣位な同盟を結ぶことは、自らの支配の論理そのものを歪め、不純なものにするが故に、ナショナリズムとプロレタリア人民から反撃されざるを得なくなるのである。

このような帝國主義者のジレンマはどこからくるのか。正に古典的帝國主義の支配の論理を飛び越えたものとして、プロレタリアートの根拠地が生みおとされ、存在し、活動していることこそ根源をおく。これは彼等にとって絶対的

邦を築きあげた。まさに、帝國主義の対立物—プロレタリアートは、労働者國家を作り出したのだ。革命から延命した帝國主義は、再生産を集積し、超巨大金融独占資本に発展し、経済的には、農工の不均衡、基幹産業とその他との不均衡、基幹産業とその他との不均衡、資本主義固有の混沌、恐慌帝國主義相互の不均等、全世界市場の飽くことのない再分割、不朽と寄生性の増大を一層深くさせた。政治的にはどうか。金融独占資本の超巨大化を通じて金融ブルジョアジーへの官服の屈服と人的結合をへ、一國の「國民」経済と政治的國家は、金融ブルジョアジーに占有された。金融ブルジョアジーは、自己の利害を貫徹する為に、計画的に侵略と抑圧、反革命攻撃を展開した。他方、帝國主義のプロレタリアートも金融独占の巨大化に應じ、より大量に組織され閉結し、後進国プロレタリア人民は、飢餓と政治的無権利状態に陥し込められた。だが、かかる帝國主義の延命をへての先進階級闘争、後進階級闘争は、プロレタリアートが、世界革命の根拠地をもつことによって、最早ロシア革命以前とは根本的に異なる質—受動的から攻撃へと転化した。又、同時にあたかも超帝國主義なるかの如き、國際帝國主義政治の諸現象を生みおとしたのであった。とりわけ、五十年代はそうであった。

⑤ —プロレタリアートの世界革命の根拠地創出の歴史の意味とブルジョアジーの帝國主義政治に於ける主觀的追求。とその必然的破産—

ロシア革命以前の帝國主義階級の政治、支配の論理は、單純で帝國主義世界の即目的自然形態であった。

即ち、帝國主義者の支配の物的基礎は、國民経済であり、政治的基礎は、帝國主義國家であった。ブルジョアジーは、他の諸階級の利害を、國民利害の如く思い込ませ、自らの利害を貫徹し、他階級の利害を従属させ拒否した。生産の増大と市場の限界から起る。市場再分割戦に於ける帝國主義相互の対立、被抑圧民族の侵略と抑圧においても、ナショナリズムで帝國主義戦争に動員するのであった。プロレタリア革命は、プロレタリアの各国毎の分断下で帝國主義と日和見主義と闘いつつ、帝國主義戦争の結果の資本主義生産の破壊をもって、「國民経済」「國家」の幻想の崩壊の地点で革命を闘いとられねばならなかった。帝國主義の全世界戦争以前に労働者は、資本主義のカラクリを見破る、経済的基礎と政治的環境は与えられず、革命家達にとって、プロレタリアートの國際的、国内的團結

限界である。アメリカ帝國主義は、五十年代帝國主義世界に、自己の金融独占の網目を張りめぐらし、それ故にこそ反革命行動は自己の利益に一致していた。

だが同じく、彼等に又支配の論理を不純なものにした。かかる帝國主義のジレンマは一層拡大され、ますます自己矛盾し、労働者國家と帝國主義國家内部のプロレタリア陣地に対する國際的「反革命同盟」、國際的協調を完全に主觀的願望に転落させる。まさに、帝國主義の鉄の法則が貫徹し、六四—六五年を境に、不均等発展の第三段階への突入—市場再分割戦の再開をまっして、帝國主義の対立と抗争、そして、キューバの世界革命の根拠地化、中国世界革命路線の破産、再編と

限界と結びついた（中国の）文革と平根拠地化と結合し、後進国労働者—人民の民族解放—社会主義の前進、先進国プロレタリアートの武装闘争の開始は彼等のジレンマをより一層拡大しつつある。

主觀的に対自的ブルジョアジーたらんとしたケネディは、不均等発展の開始によって、ドゴールとアメリカ個別ブルジョアジーに殺され、ジョンソンは今、その主觀的願望の破産に迫り込められつつある。

各國帝國主義者は、自己の利益追求の鉄の法則に支配され、不均等発展—市場再分割戦を開始し、帝國主義相互の対立—抗争に巻き込まれ、他方での労働者國家内部での階級対立と修正主義の打倒の攻勢的階級闘争の発展に対する國際帝國主義の反革命協調の主觀的願望の増大、この両極の矛盾の深化に、分裂病に陥っている。

彼らの分裂と混亂の根源は根本的に世界革命の根拠地と攻撃的階級闘争の質にある。そして、かかる混亂と分裂症は必然的に帝國主義の経済法則に規定され、この古典—國民—経済と國家の支配の論理に、最終的に再び純化する。

それは金融ブルジョアジーの発生根拠が帝國主義の経済法則と帝國主義國家にあり、彼等の世界政策（帝國主義政治）は、これと遊離してはあり得ないことに根拠をおくからである。それと遊離した、ブルジョアジーの政策は主觀であり、恣意であり、経済法則の進展と支配の力量の限界に達する地点で、その性格を暴露する。

これらのことはプロレタリアートの世界史的攻勢とブルジョアジーの歴史的發展、そのものなかの絶対的後退と危機である。

⑥ —労働者國家と現代修正主義—

—

キューバはOLAS会議をもって自らが世界革命の根拠地国家たらんことを宣言した。

中国の「文化大革命」運動の根本的根拠は五十年代―六十年代前期までの世界革命戦略の反米民族解放―中間地帯化路線の後進国の危機の全面化に対応する民族解放―社会主義の一段階世界革命の進展をもって、その戦略の反動性を暴露した。ブルジョアジー、農民、小ブルとプロレタリアートの前者のプロックへの妥協の上に乗った劉、右派ラインの修正主義グループは、天災、ソ連の引き上げと援助の打ち切りによる経済の停滞と国際戦略の破綻とが結合し、混在していたブルジョアジー、富農、小ブル、上層労働者、特権官僚群と部分的プロレタリアート、農民との階級対立が顕在化した。右派修正主義が前者のプロックに依拠したのに比し、毛沢東は後者のプロックを追求している。

だが、問題の核心はどこにあるのか。
アメ帝を軸とした帝国主義と癒着した民族ブルジョアジーと、プロレタリア、農民との妥協体制の上にあつたボナパルチズム政権が、植民地経済の破綻からブルジョアジーと帝国主義に対し、プロレタリア、農民の階級対立が激化することによって、崩壊し、軍事反革命政権に転化し、プロレタリア、農民の闘い民族解放―社会主義に、後進国階級闘争が転化したことである。

このことを通してボナパルト政権を支持し、それを基礎にしての反米民族解放の中間地帯化戦略が破綻し、その展望の下に社会主義生産の限界からの階級闘争が妥協し合っていたのが一挙に顕在したのであり、その方向はプロ独の自己目的化ではなく、我々の提出する世界革命戦略の根拠地国家以外に、内部の階級対立は止揚の方向を見出さない。
従つて、中国文化大革命の裏に貫徹した真理は、実は労働者国家が社会主義生産の限界からの階級対立が、一国ではなく万国プロレタリア世界革命政治に於いてしか止揚され得ないことを物語つたのである。

だからこそ、正に、国際政治の破綻から、文革は始つたのであり、国際路線に国内政治を経て、帰りがかざるを得ないし、つきつがある。
驚いたのは、一国社会主義生産が無限に価値を創出し、階級対立が止揚され、社会主義から共産主義への移行(帝国主義の不均等性をそれが規制する)するものと信じていた中国、東欧、ソ連、各国の権革等や日共の修正主義、一国革命論

ストロ路線の確立、及び中共の経歴主義的プラグマニクな世界革命根拠地国家への半転化を基礎に展開され始めている。我々は我々の階級闘争を我々の戦略と国際主義の下に実現しつつ第三の道派と連合し、毛派を實踐過程で革命的に交革せしめ、ソ連修正主義を打倒すべく、単一世界党を勝ち取らねばならない。

(d) 危機の引き延ばしからの人類史未曾有の破局 全世界未統戦争と現代革命

金融ブルジョアジーの国家の占有とアメ帝の後退し乍らも帝国主義世界の五十年代の経済・政治的・軍事的遺産のいまだの相続・その内部からの西欧・日本の敵対勢力の伸長と相互の冷静な計画的遺産の分配競争、かかる対応は統一されなものの恣意的統合であるが故に、最終的に帝国主義の法則によって分裂する。問題は分裂するまでの過程であり、分裂した時点である。生産の過剰―市場再分割の進行は他方での帝国主義者の経済外からの恣意によって計画的に強制され、その経済的対立―抗争が政治的・軍事的対立へストレートに転化することが引き延ばされ、五十年代の経済・政治・軍事的米帝体制の枠の内部で高度に累積し、その旨を通じてのなし崩しの市場再編成として発現する。だが帝国主義の運動法則は、これをも突破し、本来的な市場再分割へと発展するのである。

五十年代の経済―政治―軍事機構制度の枠内での世界市場の再編成から、これ等の諸制度の崩壊を経ての本格的分割戦と政治的軍事的対立―帝国主義戦争、反革命戦争、民族解放―社会主義戦争への結節点は如何なる環をもって実現されるのか、この地点への過程は、国際的膨張政策とそれに応じた国内政策への労働者、人民の攻撃的階級闘争が激化する過程である。

生産の過剰を基礎にした過剰生産恐慌の諸矛盾の成熟は帝国主義の不均等な発展がドル・ポンド体制と衝突を起し、動搖から国際的信用―金融恐慌を媒介し、全面発現し、経済過程の停滞と資本主義生産諸関係の崩壊をもたらさずにはおかない。帝国主義は収縮した世界市場に対しての過剰資本を資本輸出し、排他的勢力圏の形成から政治的軍事的対立―帝国主義戦争を準備しなければならぬ。このことはプロレタリアートの世界革命の根拠地と結びついた、陣地の粉砕抜きには不可能である。

陣地の粉砕は国際戦略の下への小ブル、農民の排外主義的結果とプロレタリアートの孤立と内部の分裂を不可欠の条件としての暴力的粉砕であり、正に革命と

者である。ソ連はどうか。

一国社会主義 全人民国家が可能であり、又、実現したと考える現代修正主義者の幻想の基盤は、後進国から打ち破られつつあり、米、西欧、日本の帝国主義国家内部の階級対立の激化と相互の対立、抗争、及び東欧がこの対立に巻き込まれることによって近い将来平和共存―人民戦線路線を動搖させずにはおかない。「現在、アラブ―ユダヤ戦争を経て、彼らは国家間政治の平和共存のモデルの裏側―冷戦政策を採用―軍備拡張に大わらわである。」このことはその前兆である。遅かれ早かれ旧社会主義の幻想の裏側の根拠の破綻故、即ち国際路線の安定を通じ国内階級対立を強制する現代修正主義の支配の論理を破綻せしめるが故に、ここでも同様に激しい階級対立と世界革命根拠地国家への転化の基盤を与える。労働者国家内部の修正主義と、帝国主義国家内部の修正主義の物質的根拠は帝国主義の存在を通じた階級対立の存在であり相互の結合は相互に補充し合う。そして両者のマルクス主義的言辭をもつてのマルクス・レーニン主義の現代的修正は一国の原始蓄積の脆弱性と社会的生産の限界にもかかわらず社会主義を主観的に願望し、前者は世界革命根拠地国家に向けてのプロ独を放棄し、後者はブルジョアジーと総体として帝国主義に和解する。スターリニズムはかかる意味に於いて現代過渡期世界の修正主義以外の何者でもない。

だから我々の実践の世界観は反帝世界革命―プロ独・暴力革命以外の何物でもない。√過渡期社会とスターリン主義を帝国主義の存在や労働者国家内部の階級対立を切り離しプロレタリア革命から共産主義への処方箋を歪める特殊な神秘的な「第三範ちゅう」とその「人格」と勝手に観念し、スターリニズムからの疎外を呼ぶ反帝・反スタ主義者は正にその二元論的な観念から疎外されるのである。同時に、社青同解放派は反帝を唱え乍ら結局のところスターリニズムの現実的根拠の解明とそれと理論の関連の分析的な分析を抜きにすることによって(何んと観念的なことか)レーニン主義に根拠を求めているが実は反スタ派と同じく二元論であることに無自覚である。彼らの左翼日和見主義の観念性は過渡期世界と帝国主義の運動法則とに規定されての攻撃的階級闘争の時代の意義を見抜けず、帝国主義論を放棄しせいぜい「賃労働と資本」段階の経済学に止まり、初期マルクスの市民社会と国家の関連に於ける公人と私人の分裂―疎外の把握にとどまっているところに根拠をおく。本格的攻撃的階級闘争がOLASによるゲバラカ

反革命の階級決戦である。

これはブルジョアジーの力量が弱く、プロレタリアートなど明確な指導部を持ち得なく、にも拘らず膨大な陣地を保持しているが為にブルジョアジーの不手際小ブル、農民が焦燥し、これを主力としたファンズムによって取り組まれる場合もある。

正にかかる階級決戦こそ、国際金融恐慌から過剰生産恐慌への発展過程で展開されるのである。

だからこそ、かかる時点の世界同時革命に向け世界党を建設し、その前段階での帝国主義のナシクズシの市場再分割戦と侵略、反革命、日和見主義、排外主義、現代修正主義に抗し、各国プロレタリアートが国際反戦闘争をプロレタリア国際主義の旗の下に徹頭徹尾闘い抜き、あらゆる階級闘争を反帝闘争に昇め、プロレタリアート自らが統一し陣地を拡大し、農民・小ブルとの革命的反帝同盟を形成することが至上命令なのだ。

第二節 ロシア革命以降の帝国主義(現代帝国主義)

(1) 結 論

現代帝国主義はレーニンの分析し、資本論を継承し内的運動法則を、歴史的・論理的に叙述した帝国主義論に従って、経済法則を展開している。他の如何なる法則でもない。

今、最も必要なことはレーニン帝国主義論に従って、(a)現状分析 (b)幾つかの「新」現象を過渡期世界に攻撃的階級闘争と帝国主義との関連で科学的に説明し(c)現代資本主義論なるものの論争を整理する方法を確定し、ブルジョア御用学者と現代修正主義者の正体を暴露し、プロレタリアートを武装せしめることである。

- (2) レーニン帝国主義とその強調点及び付加すべきこと。
 - ① 生産の集積と独占体
 - ② 銀行とその新しい役割
 - ③ 金融資本と金融寡頭制
 - ④ 資本の輸出
 - ⑤ 資本家団体のあいだでの世界の分割

④ 列強のあいだでの世界の分割

⑤ 資本主義の特殊な段階としての帝国主義

⑥ 資本主義の寄生性と腐朽

⑦ 帝国主義の批判

⑧ 帝国主義の歴史的地位

かかる帝国主義の運動法則、段階規定、及びプロレタリア世界革命にとっての、修正主義批判の歴史的地位の叙述は真理である。

ロシア革命以降、とりわけ第二次帝国主義戦争以降、帝国主義論に沿った上で強調され、或いは付け加えねばならない点は以下である。

(1) 生産の集積を通じた、超巨大金融独占資本の成立は、資本の圧倒的過剰から世界の市場の限らない分割、及び金融寡頭制が国民経済、世界市場、政治的国家を独占支配するまで発展したことである。

(2) 露米合戦(露露)の段階

(3) 自由市場はますます過去のものとなりつつある

(4) 資本主義独占体は国民経済と政治で首位を占めつつある

(5) 「例外なくすべての経済機関と政治機関の上に細かい網の目を張りめぐらしている金融寡頭制」

等々の一層の発展としてある。

これ等の資本の過剰と金融寡頭制の新たな発展(決して転化ではない)は、レーニンが指摘する如く、生産の社会化と所得、生産手段の私有の矛盾をますます累積せしめる。

(6) 第二次世界大戦の位置との関連では、第二次世界大戦が米英仏帝国主義の世界分割に対する、日、伊帝国主義の再分割戦の政治的表現であり、この戦争を通じて、米帝国主義が英仏帝国主義を従えての世界市場を分割したのであった。

従って現代の再分割は再び米帝国主義の分割に対する、他帝国主義の再分割戦にならざるを得ない。決して米帝の優位と他帝国主義の従属→超世界資本主義ではない。

(7) 九章の帝国主義批判は、レーニンにあっては、「社会の種々な階級が、それぞれ一般的イデオロギーとの関連において帝国主義的政策に対してとる

の武装解除と甘い願望。

(四) 現代資本主義論争

(1) 世界革命根拠地国家の成立と、攻撃的階級闘争の歴史的時代は、ブルジョアジーの旧来の帝国主義国民経済→国家の支配の論理を越え、逆に支配の論理の限界に対する、個々のブルジョアジーの危機感からの主観的対自化と最終的破壊、この物質的的根拠は、①金融力頭制による国家の占有②五〇年代一六〇年代前半のアメリカの帝国主義に対する独裁的地位、③現代修正主義の存在、の三つである。

(2) 経済・政治のマルクス主義経済学原則をまっぴらブルジョアジーの主観的対自化の対応が現象化する現代過渡期世界の把握を踏えることによつて、正當に位置付けられることを意味する。現代過渡期世界の把握を抜きにした場合、この原則は教条化するか或いは、修正される。修正主義経済学者は、その根拠を何か別個な経済法則に求めようとする。

そこにブルジョア近経学者との和解の成立ノ事態はこれだけではない。①人経済の政治への従属、政治の経済への優位Vという観念も、又その逆で、経済が政治を完全に占有したが故に、逆にあたかも政治が経済に優先しているかのごとく現象することもあるのである。

実は、経済が政治を占有することによつて、もっとも冷静合理的に世界的視野で金融独占が利潤を稼ぎだそうとする計画的性がある。英統制経済や未来の国際的金融機関の創出「協調」反共軍事同盟、アメリカと他帝国主義、植民地半植民地の関連等も又、しかりである。

(3) だからこそ、ブルの主観的対自化に惑わされることなく、我々は彼等の主観的展開が、見事に破産し、あたかも変容したかに思える。支配の論理が、支配の論理として全面化する地点に向け、帝国主義論と、国家と革命の原則を徹頭徹尾防衛する必要があるのだ。同時に過渡期世界、帝国主義論との関連でブルジョアジーの主観的対自化とその破産を科学的に説明する必要がある。

第二章 ブルジョア社会と帝国主義国家

第一節 生産過程・市民社会・国家

態度」と決定し、諸政党的修正主義と分岐する基準を「帝国主義の基礎を改良主義的に改められるか否か」に設定している。マルクス主義の背教者カウツキーの批判を「生産の独占→金融独占の矛盾」という最も奥深い矛盾との闘いを捨象する。帝国主義を政策とする考えに「経済に於ける独占が政治に於ける独占と政策を創出している」ことを指摘し「経済に於ける独占が非独占的・非暴力的・非侵略的行動様式と両立し得るわけがない」と批判している。

この批判は今も生きています。だが現代修正主義者がこのことに関して曖昧にし、この根拠を、労働者国家内部の現代修正主義者と相互補充し合い、労働者国家の共産主義への無限の発展という虚意と世界革命へむけてのプロ独のマルクス主義の修正を行なっているところに現代修正主義の現代性がある。

だから我々は帝国主義の確證、帝国主義に包圍された労働者国家の生産の限界と革命の根拠地をめざすプロ独との関連を明らかにし、再び帝国主義批判にもどらねばならない。

(4) 十章でレーニンは「帝国主義の歴史的地位」を「自由競争の上に他ならぬ自由競争から成長する独占は、資本主義制度からもっと高度の社会制経済制度への過渡である」と規定する。この規定はますますその正しさを証明しつつある。経済制度としてロシア革命以降、生産の社会化の進行、そして私有財産制との対立、その矛盾を金融力頭制が国家の支配として擬制的社会性を実現している。

かつレーニンは帝国主義が階級闘争に於てプロ世界革命の前夜であると規定した。我々は金融力頭制の発展、資本の過剰、プロの大量化と閉結、労働者国家の世界革命根拠地国家への転化の歴史的位置を考慮すれば、ロシア革命以降の時代は「プロレタリア革命の最終的前夜」と規定し得る。

(3) 新現象と現代資本主義論争

- ① E E C 「国民経済」利益に背反しない限りでの経・政治的(反米反共)連合、省略
- ② 国際独占体 国籍をもち、他の金融独占資本輸出の現代的形態と対立、タタキ出される。
- ③ 開発・援助 資本輸出形態、政治的役割を兼ねる或いはセット
- ④ I M F 体制 米帝の独占支配、他帝国主義の反乱は不可避
- ⑤ 「社会主義」貿易 貿易は属性として対象は問題でない。現代修正主義

(1) 産業資本主義の確立、及び、その帝国主義への発展、転化を基礎に帝国主義市民社会は、市民社会が階級社会であることを最も顕在化させた。A産業資本主義の前期、あるいは、その発展転化過程に於いて分析された「生産過程→市民社会→国家」の諸規定と、その総体が、何故、哲学的に神秘的なヘーゲルの残滓を有していたかは明らかに、対象→産業資本主義とプロレタリアートの未確立そのものにあつたV

或いは「市民社会から生れ、社会の上になち、社会に対して、外的なものとなつていく権力」「交通形態」等々の曖昧性は対象そのものの曖昧性であつた。A確立された帝国主義段階Vには対象が確立されているが故に、Aレーニンの示した如く、我々は市民社会が階級社会であると規定するV

(2) そして、国家は市民社会が階級社会の、階級対立の非和解性の産物であると適確に規定できる。更にその具体的な④武装した人間の特殊な部隊、⑤被抑圧階級を搾取する道具Vと規定し得る。むしろ、我々に今から、未来にかけて、必要なことは日本帝國主義国家の④⑤の具体的分析こそ必要である。

第二節 諸階級の政治への参加→支配の論理→具体的政治過程

① 生産過程(勿論流通過程も含む)に基礎をおく市民社会の階級対立、必然的に、資本主義生産関係、資本主義制度を統括する帝国主義国家と対立する。

② この政治過程は、帝国主義社会に於いては根本的に実現されない要求を国家に向ける根拠は、根本的には資本制生産と私有財産制度、帝国主義国家の存在そのものにあるが、直接的には、諸階級が資本制生産過程に於いて、生活資料を与えられる(又、ブルジョアジーも利潤追求の限りで与えざるを得ない)こと、及び私有財産制度にある。

③ Aマルクスの提出したブルジョア(国家の幻想共同性)とはこの事に物質的根拠をおいた諸階級自身のブルジョアイデオロギーであるV。又そのような、ブルジョアの、即自的人間の属性である。これは論理的には、人間労働が資本性生産過程では剰余価値を生み出すことに対する無理解であり、客観的には、生きる為、換言すれば、人間が労働し生産手段を作り、種子を作る存在の為に、ブルジョアの労働を余儀なくされ、資本制生産関係が、国家に統轄されているから

である。

このことを直接的根拠としてブルジョア生産様式があたかも「対立と統一」
「敵対と相互依存」の自己矛盾の統一関係としてあるかの如く考えることの結合
にある。両者の相互規定しあいとしての現実そのものである。人間存在とその意
識において、階級は政治的である。ブルジョア社会の階級性を幻想共同性と規定
することはとりわけ、政治過程において重要である。

それ故に現実のブルジョアの労働に対する根本的批判、私有財産制度、帝国主
義国家の暴力的打倒でありながら階級の自己意識をブルジョアイデオロギ
ー国家の幻想共同性に外化し、他方で、ブルジョア階級も幻想共同性と暴力でも
って運動を抑制し、妥協が成立する。

同時に、運動そのものをブルジョア階級は、諸階級に資本制制度を容認させ、
自己の特権性に諸階級の利益を従属させ、或いは否定し、あたかも諸階級の利害
を満たしたかの如く振舞うのである。又、諸階級もそのように思いこまされる。
ここで留意しなければならないことは次の二点である。

その一つは、かかる階級闘争の推進は、諸階級に自然発生的に過渡期世界、帝
国主義生産過程、市民社会と帝国主義国家の階級の本質を即自的、自然発生的に
意識する契機を与える。

かつ帝国主義打倒の戦略―戦術をそして自らの団結とソヴィエト建設のそれを
与える。

だが決して、自らでもってそれを意識化し、把え直すことはできない。かかる
二つの事柄は一つのことである。即ち資本主義生産関係と帝国主義国家と通じた
ブルジョア階級とプロレタリアートの対立が資本主義の危機が成熟せず、表面的
な資本と賃労働の相互の対立ともたれ合いの如き現象を写すからであり、△それ
は前掲によって外から、日常的意識の外から把えなおさせられねばならない。
その二つは、かかる具体的政治過程は諸階級の意識と力関係を反映してブルジョ
ア政変、改良主義政変、革命党の具体的行動と党派闘争に於いて展開されること
である。

△だから市民社会と国家の分析は常に結論的に党派の主張と動向、及び党派闘
争の戦術に物質化させねばならない。

現代過渡期世界は正に新たな装いをもって再びマルクス主義の根本問題を実践
的に暴力革命―革命的プロレタリア独裁について、△現代修正主義（スターリン
主義、トリアッチ主義、構成、宮頭派）及び△反帝反スタ派の無政府主義を登
場させている。

過去に於て、修正主義者は暴力革命を否定し、無政府主義は、暴力革命の準備
に於けるプロレタリア党を否定し、暴力革命を承認し、共産主義への過渡として
の革命的プロレタリア独裁を否定した。

現代過渡期世界に於ける、左右の日和見主義とマルクス主義への背教が、暴力
革命とプロレタリア独裁をめぐって登場している。

現代修正主義者達は、一国に於いて社会主義から共産主義に経済的に出来ると
願望し、実はその裏側で国内のブルジョア階級とブルジョア制度、イデオロギ
ー及び、帝国主義世界のブルジョア階級との闘いを放棄し、和解決している。

他方、現代無政府主義は反帝反スタ派は現実の経済の発展段階に規制され、制
約されているところから起る現実の階級対立と政治に目を向けることなく、プロ
レタリアートの反動的階級と国内的、国際的闘いを、現代労働者国家に於いて
人間の人間に対する支配が今、否定されるかの如く思い込み、そこから現実
の世界を觀念から推定する。何故なら、彼らは一国社会主義、二段階戦略を批判
しながらも、△現実の過渡期世界に階級闘争を止揚する実践的な世界革命戦略と
単一世界党を肯定することに於て明らかだ。

両者とも、過渡期世界の現実の階級矛盾とその経済的、政治的実践的解決を
離れ、甘ったるい主観的願望にたよるのである。

△問題はこうである。労働者国家と帝国主義世界は、帝国主義の運動を基礎
に、世界階級闘争として取り結ばれ単一の有機的全体であり、部分はその一環で
ある。

正に、それを如何に総体としてプロレタリア世界革命を通じ、世界社会主義か
ら共産主義へ一歩一歩具体的に発展させるかである。

レーニンが国家死滅の経済的基礎の章で、労働者国家から共産主義への具体的
な科学的解明をマルクスエンゲルスを手引にしながら、論じている。マルクスは
「資本主義社会と共産主義社会との間には、前者から後者への革命的転化の時期
がある。この時期に照応した政治上の過渡期がある。△この過渡期の国家はプロ

第三節 帝国主義国家とプロレタリア世界革命

1.

イ、帝国主義は帝国主義国家の支配の論理を自ら打ち壊さざるを得ない。
帝国主義の生産の集積↓資本の過剰↓資本輸出↓世界の資本家団体の分割の必
然的、鉄の経済的法則は政治的軍事的諸列強の世界の分割の論理を照応させる。

このことは、労働者人民に国家の批判と、国際的団結を与える。この経済政治法
則の深化は、必然的にも恐慌、産業の不均衡、混乱をよび起し、他方で政治的
に帝国主義戦争に向けて資本主義生産関係を破壊することによって、「幻想共同性」
の現在の根拠を消滅させ、階級社会と国家の暴力、階級性を全面化する。正にブ
ルジョア階級は帝国主義「国民」経済から生れ、その経済法則が自己の支配の根
拠、「国民」国家を越え、逆にそのことが資本制生産過程を動揺させるが故に、
革命の根本的可能性を与えるのである。

ロ、過渡期世界は、かかる可能性に加えプロレタリアートに、世界革命根拠地
国家と結びつくことにおいて主体的な即自的能動性―攻撃的階級闘争の質を与え
る。

ハ、帝国主義生産過程はブルジョア階級とプロレタリアートの非和解的対立を
形成し、正にそれ故に帝国主義国家は帝国主義生産過程を維持するためにブルジ
ョア階級の暴力装置と収奪の道具としての役割りを果たす。

従って階級対立の止揚はまず帝国主義国家を暴力的に打倒し、それと、資本主
義生産、私有財産制度を廃絶すべきプロレタリア世界革命の根拠地国家化と世界
社会主義をめざすプロレタリア独裁に置き換えられねばならない。

第四節 △国家死滅の経済的基礎―プロ独暴力革命の修正―現代修 正主義と現代無政府主義

レーニン△国家と革命の第五章△この問題を取り上げている。かかる主要に帝
国主義と超帝国主義、暴力革命と非暴力革命、革命的プロレタリア独裁と、その
否定等々のマルクス主義の根本問題が実践的に問われた時代、レーニンは最後の
問題につきカウツキーとパンネツクを修正主義と無政府主義を引き合いに出し
ながら、その両者を批判している。

レタリアートの革命的独裁である△と述べている。「ゴータ綱領批判」一八七
五。

共産主義へと発展しつつある資本主義社会から共産主義への移行は、政治上の
過渡期なしには不可能である。そしてこの時期の国家はプロレタリアートの革命
的独裁でしかありえない。

従って、経済的發展段階からくる、階級対立を止揚する政治的基準は労働者国
家の指導部が、かかる階級対立が内部の経済的制約に規定されかつ、帝国主義世
界から反革命攻撃に規定されていることに対し、プロレタリア世界革命から世界
社会主義をめざす、世界革命戦略の追求とそれを追求する形態―独裁を獲得し、
この基準の下に、△労働に於て分配△や、工業、農業の不均衡の現実的解決の
方向が直されねばならないし、それと敵対する反動的階級と現代修正主義者を
世界労働者人民と結合する過程で粉砕しなければならぬ。

かかる認識と基準の破綻からのみ現代修正主義者は批判されねばならないし、
決して、何か特殊な世界革命戦略とプロ独から切り離された、「第三世界」から
の批判はあり得ない。ところどころかかる基準からみた場合、ソ連修正主義指導部を
先頭とする現代修正主義者の「全人民国家の現在に於ける形成―平和共存の勝利
―人民戦線―スターリン流民族自決」等は全くの暴力革命の原則を修正し、全く
反労働的、反革命である。彼らは帝国主義世界のブルジョア階級と国内の反動
的階級と手を結び、和解決しているのだ。

第三章 我々の世界革命戦略、 及び世界党建設

我々の世界―日本革命戦略は序章で結論を述べた。一章で過渡期（過渡期社
会、帝国主義論世界）の内的構造と有機的全体関連は述べた。従ってここでは本
題の確定と説明をする必要がある。

第一節 △世界階級闘争の有機的全体性（世界性）と部分の独自性 及びその全体の一環としての位置

第一章で述べたことを再度まとめて確認しよう。先進国帝国主義内部の階級闘

争は、ブルジョアとプロレタリアとの対立を基軸に展開している。

後進国階級闘争は、帝国主義の侵略、反革命を媒介に、かつそれを反動—反革命化した民族ブルジョアとの癒着を通じて、帝国主義と民族ブルジョアとのプロレタリアは、農民プロレタリアート、その他のプロレタリアと非和解的に対立している。かつ労働者国家内部は一国経済の限界を基礎にした階級闘争が、外部の帝国主義の反革命攻撃と階級闘争と結合し、各国帝国主義の打倒を通じてのプロレタリアートの革命的独裁を媒介にした国内階級闘争のプロレタリア的發展以外に抜け道はない。

これ等の三つのプロレタリアの階級闘争は帝国主義の市場再分割戦と反革命干渉—戦争を通じて、しつかりと単一の有機的な全体性をもっている。

それ等の等質性はまごうことなく、各プロレタリア毎に、各国ブルジョアとプロレタリアートの対立を基軸として展開している。これ等の等質性をもった階級闘争の発展は、若干のづれを持ちながらも基本的に同時的テンポで発展し、各三者の力関係は、各他二者を規定し、かつ他者から規定される。

④ このテンポは帝国主義の同時的危機をまわって完全に準備する。そして、かかることの単一の総体としての力関係は最終的に、先進国の力関係に規定されるものへと発展し、他方先進国の力関係は他二者に規定されつつある。③かかる④の事柄は正に世界階級闘争の基本動向力が直接間接に帝国主義の運動法則に規定されていることに根拠をおいているからに他ならない。

第二節 へ序章の(1)④のスローガンの説明

(a) ③のスローガンについて

① 帝国主義の経済法則を通じ、かつブルジョアジーのほんの労働者の搾取、及び諸階級の富裕層のブルジョアジーの国際、国内戦略の利益追求のその参画を物的、政治的基礎にする諸階級の排外主義への傾斜が、ブルジョアジーと排外主義、現代修正主義の党派によって促進される客観的基礎を与える。だから、とりわけその全体の基本的比重を占める先進帝国主義のプロレタリアートの闘いは、帝国主義の侵略、反革命に対する闘いの過程で同時に排外主義、現代修正主義に対し、プロレタリア国際主義の旗が守り抜かれねばならない。

② かつ一章で述べたが如く、先進国、後進国階級闘争を攻撃的階級闘争と

イ、その実現の経済的基礎
ロ、主体的な最終的帝国主義同時打倒の追求
についてである。

帝国主義の運動法則はそれ自体根本的に展開される。にも拘らず過渡期世界に於ける歴史的な世界革命根拠地国家の登場、及びそれと結びついた世界の攻撃的階級闘争の、帝国主義者の主観的対自性により、帝国主義の運動は歪められ、変形され、矛盾発展を引き延ばされる。だが、それは同時に根本的な帝国主義の矛盾の高度な累積であり、次の段階のその法則の最も純化された発現の過渡である。

これらの総体の破局にむけての、動力は正に、生産の集積—資本の過剰に他ならない。そして、その経済的矛盾は、金融独占産業と他産業の不均衡、物価騰貴、恐慌、人民の収奪等々のブルジョア生産の混頓であり、各帝國主義の不均衡発展を基礎とした、なし崩しの市場再分割戦の進行である。これらの戦後アメリカ経済、政治、軍事体制の枠を通じた不均等な発展は、同時にそれ自身の「破局」を引き延ばし、発現の形態故に、帝国主義に圧倒的な過剰生産を累積せしめ、過剰生産恐慌を成熟させる。これは、その契機を不均等な発展による帝国主義の対立—抗争が、アメリカによって条件付けられた世界貿易の信用関係を動揺—崩壊させることを契機として、世界金融恐慌に媒介されて発現する。

資本主義固有のかかる自律的価値破壊運動は、全世界の全産業に貫徹し、帝国主義経済は一時的に停滞させずにはおかない。

この一時的停滞は古典的帝国主義の帝国主義戦争という政治に媒介された、経済的停滞と同意であり、否それ以上の規模の広がり深さを有する。

全世界階級決戦はかくして形成される。それに至る全世界の各プロレタリアの、各階級の階級闘争は、帝国主義の不均等発展と先進国、中進国を含んだ、或いは労働者国家も対象にした直接的現在のなし崩しの再分割—勢力圏形成と後進国危機との結合を通じて帝国主義と後進国労働者人民の民族解放社会主義の第三世界の戦争の発現を機軸に展開される。だから①の国際主義のスローガンの下に単一に結合され、あらゆる階級闘争は帝国主義の侵略と—抑圧—反革命闘争に統合され、又統合されねばならない。それは、最終的に帝国主義の過剰生産恐慌の発現の時点にむけ、帝国主義者の政治的動揺とプロレタリアートの攻勢的階級決戦と

して、目的意識的に闘い、とらねばならない。

③ プロレタリア国際主義の現代的旗は、民族解放—社会主義—労働者国家への一切の反革命反対—世界革命をめざす革命的プロレタリア独裁実現—帝国主義政府の一切の侵略、抑圧、反革命粉砕—の三つの政治内容である。

これ等の三つの旗は、どのプロレタリアの、どの一国のプロレタリア人民にとっても同じである。

この三つのスローガンは後進国の一国のプロレタリア人民にとつては、民族解放闘争から出発しながらも、それが帝国主義と民族ブルの癒着を通じ最早民族解放に終らないことが闘争そのものに最初から普遍に貫徹し、かかる帝国主義世界全体との対立へ発展することが頭初から普遍に貫徹するが故に、かかる闘争は先進国プロレタリア人民と労働者国家の人民のプロレタリアの闘いと結合すること条件とし、又、他の二者の内性がそうさせずにはおかない。

若干の注意点は民族解放社会主義のスローガンは、一段階世界革命戦略である。が民族解放を飛び越えた社会主義が先行される二段階戦略の裏返しとして理解されてはならない。

民族解放闘争は社会主義をめざすことによるのみ可能であり、かつ社会主義は民族解放闘争に内包され永続的に発展転化するものである。

又民族自決—社会主義でも正しいが、レーニンの民族自決の原則は、現代修正主義者に歪曲され、流布され、ブルジョアジーはそれを利用しては故に、かかる言葉は使用しない。

先進国プロレタリア人民にとつての、この国際主義のスローガンは、自国帝国主義の侵略、抑圧、反革命に闘い、技巧とも後進国人民、労働者国家人民と結合してのみ、帝国主義、排外主義、現代修正主義の党派から労働者人民を切り離し得るのである。

労働者国家のプロレタリア人民も、自国の反動的諸階級と闘い、現代修正主義を打倒し、共産主義の実現に向かう為には、先進国、後進国労働者人民と結合し、帝国主義の世界的体系を打ち破る以外には道はない。

(b) ②のスローガンについて

このスローガンについては、次の二つのことに於て説明されなければならない。

①の同時的蜂起に発展するし、又発展させられねばならない。かくて同時にプロレタリア世界革命は成熟し、又実現されねばならない。

この際どこか強い国ではプロレタリア革命が敗退するかも知れないことを予見して、世界革命戦略はたてられない。正しく、かかる意識と理論こそが一国革命の総和としての段階的、世界革命戦略への転落即ち結果現象を合理化する日和見主義、客観主義の革命戦略を結果せしめるのである。

単一の世界戦略の下での同時打倒こそがプロレタリア革命の敗退をさける唯一の道なのだ。

(c) ③のスローガンについて

かかる国際主義のスローガンと単一、同時世界革命戦略の下に、動揺し、狂乱化する、農民、小ブルの現状打破—反資本主義の運動を、八革命的貧農小ブルを同盟軍として組織することVが、彼らをブルジョアジーの排外主義—国家主義の下へ結果させ得ないことであり、現代革命の寄生形態—ファシズムを消滅させる唯一の道である。

それにはプロレタリアートの正規軍の形成と全階級闘争へのそのヘグモニーの拡大を基礎にしなければならない。

相互浸透—補充関係はなくなるものであり、自律的な小ブル—農民の反資本主義の組織—プロレタリアートの組織の毛イズムや第四インターのトロッキーストの小ブル同盟論とは全く異なる。

(d) ④のスローガン

帝国主義国家はますます武装された特殊な人間の部隊、収奪の道具としての階級の本質を露呈させつつある。

人民は民主主義を真に形式でなく、一国的でなく、実態に於て実現する為には文字通り、全人民が武装をすることによってプロレタリアート人民のコミュニンツヴェイト国家の基礎を作るし、作らねばならない。全世界のあらゆる階級闘争は帝国主義国家との武装闘争へ発展しつつあるし、それは必然である。

八我々は攻撃的階級闘争の歴史的位置を国家の階級的役割り、暴力革命の不可避性を自覚し、あらゆる階級闘争の主要な戦術形態を武装闘争として闘い、多様な闘争形態を統合し、かつそれに発展せしめる必要がある。

第三節 〈世界プロレタリア党〉

以上の(四)の事柄とその実現は、不可避免的に単一な、各国労働者共産党の八一枚岩の世界指令部即ち世界プロレタリア党の獲得として結論付けられる。ブルジョアジーの歴史的後退とプロレタリアートの攻撃的階級闘争は最も有利なものとして各国の分断されない同質性、全体的単一性即ち世界性を世界党をもって必然的に物質化せしめる。

この党の実現は全世界の共産主義者の死活の問題になりつつあるし、又、ならさせねばならない。

現在、国際共産主義運動は大きく三つのブロックに、(一)即ちO.L.A.S.第三の道派と、毛沢東派、ソ連現代修正主義派Vに分裂し、かつ統合の動きを開始しつつある。それは世界階級闘争の必然的法則であり、現代修正主義者のみが、分裂を固定化し、一枚岩世界単一党に反対する。何故なら、修正主義そのものが全世界の共産主義者から受け入れられないからである。

第三インター、コミンテルンの一枚岩は世界戦略の誤認故に崩壊し、コミンフォルムから連合党へと墮落せしめられた。これ等の事態は党の形態に欠陥があるのではなく、主要に世界革命戦略の誤りに帰因する。

我々は、我々のプロレタリア国際主義と世界革命戦略を提示し、O.L.A.S.派と一致せしめ、ソ連現代修正主義指導部の世界党会議に於けるその戦略の反革命性をあばき、打倒し、毛沢東派を分派闘争を通して、結集しなければならぬ。戦略の一致の緊密性故、O.L.A.S.派、中共派の実践と理論闘争に於ける一致、当面行動綱領に於ける統一行動の保証が出发点である。

第四節 〈レーニン死後の国際共産主義運動〉

(1) 第一の世界革命の波と以降

レーニン・ローザ・スターリン・トロツキーV

① 世界革命の挫折及びロシア革命一國に於ける帝国主義の包圍はローザを中心とした革命派の欠陥に起因する。かつ二一年に於けるレーニン戦略の、独共産党の放棄以上の二つである。

② ローザの革命性とその左翼日和見主義は、資本蓄積論にみられる、帝国

立の激化、そして二七—三〇年代初頭に於ける帝国主義相互の対立と抗争、先進帝国主義の階級決戦の成熟、世界階級闘争の構造配置、単一性はかく形成された。

これらを根本的に直接間接に規定したものは帝国主義の不均等発展と市場再分割であった。この土台の上に世界階級闘争のつかかり、闘われていた。

正にスターリンやそれに従属した各国共産党が考えた如く世界階級闘争を各ブロック、各国毎に分断しソ連邦社会主義の建設とその防衛を戦略目標にし、各国ブルジョアジーとの和解、即ちその上に築かれた、先進帝国主義でのプロ革運動の支柱即ち全般的危機論と諸戦術(社会ファシズム、反ファシズム統一戦線、人民戦線等)後進階級闘争のスターリン主義的「民族自決」路線は必然的に破産せざるを得なかった。かかる「一國社会主義建設、祖国防衛」に従属した先進國、後進國のバラバラに切り離され、分断された、総和革命戦略は、現実の階級闘争の同質性と帝国主義の起動因に對立する觀念戦略であるが故に、それ自身と對立し破産する。

毛沢東のみが適切なブラダマチズムによってコミンテルンの路線から離れ、中國革命の成功に導いた。

我々は、かく実現すべきだと考える。現代修正主義者達と「社会主義」の建設とし各階級闘争の従属とは反對に、世界階級闘争が直接、間接に、根本的に帝國主義に規定され、全世界階級闘争がこれを機軸に展開され、逆に社会主義も帝國主義打倒を通じた、世界革命と世界社会主義としてのみ過渡を形成する必然故に先進帝國主義内部の階級闘争を機軸に後進階級闘争、労働者国家内部の階級闘争を一体化し統合する単一の世界戦略こそが要求されたと考える。正に、それこそ、序章で提起したプロレタリア国際主義のスローガンと、戦略同盟軍一戦術である。

③ 獨、米、日の革命運動をかかると基本点から見た場合、二七—、三〇—、三三—三五年にかけては、

獨は二七年前後過剰生産が生じ、不均等発展から信用恐慌が、アメリカの金融恐慌から世界の金融恐慌を通じ、全世界の過剰生産恐慌に突入した。この恐慌は二九年以降数年間、資本主義的、一時的停滞を招いた。二七年前後、獨は世界市

主義の自動崩壊論を基礎とした国際主義と世界の輕視、組織論に於けるメンシェウイキの自然成長性論にある。

③ レーニンの「弱環」「飛火輪」等は結果として、或いは主体的位置を語ったものであり、レーニンは世界同時革命論者であり、決して段階発展一總和世界革命論者ではない。

④ ロシア革命以降、世界史は地上に過渡期社会を創出した。換言すれば、M.L.主義は過渡期世界の革命理論として発展されなければならなかった。

それは我々は今獲得しつつある過渡期世界の階級闘争の攻撃的単一性を基礎にした世界戦略、労働者国家の階級對立の政治的止揚の原則と政策、市民社会と帝國主義国家、組織論である。そのことに切り込み切れない場合、必然的に帝國主義と修正主義が生まれる。偉大な革命家トロツキーも又それにもれず、スターリン主義を、現代修正主義を見抜けず、自己の教条と諸欠陥を露呈させずにはおかなかった。そして、現代修正主義者へのブラダマチックな経済主義的対応はその見本である。

⑤ 我々は今迄トロツキーから学び吸収してきたが、今はつきりと決別しなければならぬ。

⑥ 第二の世界革命の波とその挫折V

① 二七—三〇年代中期の階級決戦は、後進國、ソ連の階級對立を、西欧(特に獨)米、日に集中し、それと結合し、解放されねばならなかった。

② それは、ソ連共産党現代修正主義の下での、各国の共産党の結合關係を通しての、一般的全般的合法戦略、及び帝國主義戦争を内乱への教条的採用にあり、他方での現代修正主義指導部の一國社会主義建設「社会主義防衛」二段階戦略路線にあった。

兩者の關係は後者への前者の従属と前者の日和見主義への転化である。

これは前述した過渡期世界に於ける労働者國家の階級對立と世界革命根拠地國家への転化の否定の誤謬であり、富農、ブルジョアジーへの妥協と、帝國主義世界のブルジョアジーとの和解であった。

③ では如何に追求されたなら実現されたのか、總括は常に実践的主体的にかく提出されねばならない。再び誤謬を積み重ねない為。

④ アジアの階級對立の激化(中國、インド、朝鮮等)東欧諸國、ソ連邦の階級對

場への資本輸出、東欧へのなし崩しの分割(三角貿易)と將來仏との國際競争戦を迎えていた。この獨の世界市場の國際再分割戦に對抗した仏、英米のヴェルサイユプロットは、ヴェルサイユ体制を基礎に對立、抗争し、獨階級闘争はワイマール体制を動揺させ、諸階級はヴェルサイユ体制をブルジョア的にかプロレタリア的にか再編せざるを得なかった。

獨ブルジョアジーはその能力を持たず(正に根拠地と結びついたプロの陣地がある)階級闘争の指導部は、ブル・社民から共産党・ナチスに移行した。ナチスは農民、小ブル、ルンプロを反米英仏・反共汎ゲルマン、ヴェルサイユ体制打倒、欧州の再編と第三帝國の樹立の展望の下に集約しようとした。ところで獨共産党はどうか彼らの全般的危機とコミンテルンへの従属は、革命の成熟、その形成の仕方、プロレタリア国際主義の政治内容、世界革命戦略一戦術、國際的共産主義者の単一の指導と、仏英(米)、ソ連の労働者の連携等を全く無自覚にさせ、現実のプロレタリアートの後退日和見主義意識に拜跪した。台頭しつつある排外主義に對して、とりわけ仏労働者階級との独仏同時の同盟の下に、獨帝國主義の軍事力強化、ヴェルサイユ条約破棄の軍事外交政策に對し闘い抜き、それを通して、労働者階級に對してかけられていた合理化攻撃と政治的權利破壞に對する闘いを軍事外交闘争に結びつけ、その質を変えることを必要であった。

このことを通じた獨革命の成功は、逆にソ連内部の革命的プロレタリアートと諸トロツキストたちを勇気づけスターリン主義との闘いと、政治革命が用意されるべきであった。これを通じ、本格的にソ連が世界革命の根拠地國家へと転化するることによって、全世界の攻勢的階級闘争として対目化するのであった。

⑤ 労働者階級は、獨帝國主義に對するヴェルサイユ条約を通じて賠償要求等の強圧政策を通じて自國労働者の不満を反獨で集約することに對して、ヴェルサイユの粉砕、世界同時革命の展望の下に軍事外交政策と闘い、当時成熟しつつある山猫スト等の階級闘争の質を転換せしめる必要があった。西欧階級闘争は二七—八年(三四—五年)に同時的に階級決戦を迎え、他方この時点におけるソ連内部の階級對立は、ネップ政策の結果、ブルジョアジー、富農が台頭し、獨帝の報復政策、軍事力強化政策と結びつき、工業化政策が推進され、それは農民とプロレタリアートの對立(即ち政黨政治ではスターリンに對するブハリンとの党内闘争)

を顕在化させつつあった。正しく独仏同時革命に結びつきソ連におけるプロレタリアートの革命的民主的独裁を準備させねばならなかった。

世界革命に向けてのソ連内部の経済矛盾はこれ以外に解決の道はなく、工業化の推進、ブル、富農の抑圧、農地国有化に対する中農の反抗、貧農の混乱はかくしてのみ集約されねばならなかった。

かかる階級闘争は独階級闘争に集中され、その敗北は現代革命の寄生形態「フランスを生み出し、他方、仏階級闘争と共産主義者を混乱させ、及びソ連スターリン主義」現代修正主義への転落を完成させた。

⑤ フランス、人民戦線、現代修正主義の帝国主義との和解、独革命の敗北とフランスの勝利として終った二〇年代後半から三〇年初頭の西歐階級闘争は、プロレタリアートの攻撃革命の最期の機会を失なわせしめることによつて、それと不可分一体の各階級、ソ連のその後の階級闘争を歪め、屈折させ、後退させずにはおかなかつた。それこそが人民戦線であり、初期スターリン主義に萌芽していた現代修正主義を全面開花したのである。

事態は極度に歪められ、屈折し、あらゆる階級闘争と共産主義者は現代革命の挫折の過大な負担を背負おせられずにはおかなかつた。

まさしく独階級闘争で他帝国主義、及びソ連との諸階級闘争である。
「信用関係の動搖—崩壊を経ての世界貿易—世界市場の収縮、他方での過剰な生産力、過剰生産恐慌の発現と、世界市場の分断の進行、過剰資本を起動力とした帝国主義相互の対立—抗争—市場再分割戦—世界帝国主義戦争、反革命干渉戦争への突入として三〇年代の経済過程、政治過程はあった。」

政治的権力に到達し、プロレタリアートの攻撃と陣地を暴力的に粉碎し、同時に資本主義生産諸関係、私有財産制に彼ら自身の反資本主義の粉碎の核心があるにも拘らず感情とデマゴギー、神秘的狂神の意識は下部構造を社会主義的生産に置き換えることなく、国家の経済政策と政治政策だけを置き換えれば矛盾が解決するかの如く観念するが故に、結局のところ根本的矛盾に対する根本的革命に間われないが故に、資本主義の土台の上ではブルジョアジーと和解せざるを得ないし、帝国主義の経済法則に拜倒せざるを得ない。

彼らの欧州の再編、ソ連の打倒は、帝国主義の膨張—市場再分割の帝国主義の政治的表現しかない。

次の諸点である。

(1) フランスは民主主義国家に対する反動—歴史の逆もどりだ。ブルジョア民主主義国家とは「民主主義」を犯すフランスの侵略戦争に対して、「民主主義国家」を防衛するのは、革命的民族戦争だ。だからフランスの侵略に仏ブルジョアジーと和解し、民族防衛戦争は全面参画すべきだ。

(2) これらの反フランス統一戦線の一環であり労働者の祖国も防衛できる。かくして現代修正主義の主張は用意された。

かかる主張の二点が仏英産業をして人民戦線、その後の帝国主義戦争、仏帝国主義の敗北とレジスタンス、そして独帝国主義の敗北とドイツによる戦争路線過程に全くプロレタリアートを武装解除させた。

これらの根本的誤謬の総体は次の三点において解明され、解決されねばならぬ。

その第一は、八帝国主義世界と労働者国家が有する過渡期世界の把握である。√それを基礎とする、現代世界革命戦略、特に「一國社会主義、労働者の祖国防衛」と自己の階級闘争との関連である。

その第二は、フランスを単に上部構造のみであれこれ考えるのではなく、正に土台との関連で捉えることである。八フランスは帝国主義の危機に対する反革命の特殊な政治形態以外の何物でもない。√下部構造は簡單明瞭に帝国主義なのだ。この上に立って、今現実に対応し、侵略せんとし、かつ仏帝国主義戦争に対して、如何なる態度を取るのかが問われるのだ。

更に現代民主主義に対してである。フランスは現代民主主義を破壊した。マルクス主義は民主主義を国家形態(或いは政治形態)と規定する。フランスが帝国主義の特殊な国家形態であるように、民主主義も、国家形態である。だから、その土台が如何なるものであるかということと切り離されてはならない。民主主義は、マルクスが述べている如く「支配階級のどの成員が議会で人民を抑圧し、ふみにじるかを数年に一度決めることこそ、ブル民主主義の階級の本質である」。

「国家は一階級が他の一階級を抑圧する為の機関である」(エンゲルス)「でも或る無政府主義者達の「教える」ように、抑圧の形態がプロレタリアートにどうでもよいという事ではない。「階級闘争と階級の抑圧のより広い、より

プロレタリアートの陣地と攻撃的階級闘争の鎖の一環を粉碎した。ブル、農民と同盟したブルジョアジーの展望と、未だ仏帝国主義者の対応、及び彼らのソ連への対応は微妙かつ複雑である。

各国ブルジョアジーの主観的展望は高まらなかったかにみえた。国内のプロレタリアートを粉碎したブルジョアジーの「激進的」登場、即ち彼らの内部の敵—プロレタリアートを歴史的に意識で対峙せしめさせている共通の敵—階級闘争者国家に対し「唯一挑戦し得る」ブルジョアジーの登場である。

三〇年代中期の帝国主義者の政治は非善に複雑である。他帝国主義者は、独帝国主義と経済的対立を行いつつも、同時に正面対立を避け、共通の敵—反革命突撃国家に転化せしめることであつた。

三〇年代中期、ロシア革命以降はじめて、「国際ブルジョアジーの要求」を満すべき世界革命の混濁地帯国家に対して解決する「反革命混濁地帯国家」が誕生したかにみえた。

だがそれは不可能である。何故なら人民をデマゴギーで動員した侵略戦争と現代修正主義指導部であれ私有財産制度が社会的には廃絶され、プロレタリアート、人民の世界的閉結が獲得されている人民の革命防衛戦争とは本質的に質が違ひ、ソ連の撃退は明らかである。

独—ソ間の攻撃的階級闘争につれ、帝国主義の鉄の法則は全面的帝国主義戦争へと駆りたても、独の東家の所有、仏英ブロックの対決、米の参戦へと発展する。

かかる独と国際帝国主義政治の推移の中で、仏共産主義運動は如何なる問題に到着したのか。彼らにとって独プロレタリアートの敗北は決定的であつた。最も彼らこそ二重三重の歪みを受けねばならなかった。

独プロレタリアートの連帯による独仏打倒の原因については述べた。ソ連の「社会主義—祖国—防衛戦略に從属した反フランス統一戦線が彼らの主体的倒錯の要因であり、現実的客観的根拠は独の侵略に対する「民主主義国家」の防衛の必要性ということである。

確かに仏共産党左派は、これが「帝国主義戦争であると考え、内乱の準備」を主張したことは正当である。だが錯綜した現代の帝国主義政治とソ連の諸階級闘争の総体を明らかにせずしては真理も色あせる。八人民戦線主義者√が主張した点は

自由なより公然たる形態は階級一般を廃絶する闘いをプロレタリアートが行うことを常に助ける—(レーニン)のも真理である。

まさに民主主義は土台国家形態の性格、プロレタリアートの階級闘争への利用等の関連で明確にされねばならない。

ロシア革命以降、帝国主義の延命労働者階級の登場は、ブルジョアジーをより広い、公然たる自明な抑圧、公然たる抑圧形態—君主制から、代議制民主主義制度の民主普遍性を与えた。だがやはり形式である。だが過渡期世界に於けるプロレタリアートは攻勢的階級闘争故民主主義を君主制度とは、はるかにその実態において、変革に利用できる。この最後の問題こそが、土台と切り離して、民主主義を願望せしめ、無党派的形式民主主義に転落せしめ、反フランス、民主主義防衛に走らせ、帝国主義戦争の合唱隊に転落せしめたのだ。

このことは台頭し、全面化する人民の根本的な侵略反対の意識へ全面的に拜倒する理論的所産でもある。

以上これらの当時の論争の主要点を整理することによつて、帝国主義戦争を暴露し、軍事外交政策と反合闘争を結合し、内乱を準備することこそが必要であつたのだ。

これらのこととはある意味では絶対的制約をもつていたとも言える。何故ならドイツ革命の敗北をもつての諸混乱とその物化は、決定的であつたからである。だが仏共産主義者の進む道はそれ以外にない。

この内乱の成功は逆に独プロレタリアートに革命を条件をせしめ、同じくソ連現代修正主義を打倒する力関係をソ連内部にもたらさざるを得ない。

人民戦線は共産主義者の革命的敗北主義の原則の放棄であり、その後の戦後共産党の現代修正主義、否全世界の現代修正主義者の見本を与えたのだ。

スペイン階級闘争も又歪められざるをえなかつた。革命的プロレタリアート人民はソビエト建設の初めの段階にまで到達した。このことを正に現代半殖民地の革命の見本とならねばならないが、だが、独革命の敗北を経てスペイン階級闘争はナチスにフラレコが結び労働者人民はソ連と手を結ぶことによつて、世界的力関係に発展しながらもスペインプロレタリアートは自覚された現代世界革命戦略をもつた前衛党を持ちえないが故に、スペイン共産党によつて抑圧され、その闘争を反フランス民主主義闘争に押し下げられ、フランスの帝国主義諸國は

それを促進せしめたことよって、正に反革命に敗退せざるを得なかった。この人民戦線の過渡的戦術は、現在先進国各国の現代修正主義者の出発点とされている。ことに日共―宮本一派はその典型である。

現在の国際帝国主義政治を従属帝国主義論を基礎にアメ帝を独帝に、そして日本を仏にぞらえてア、帝の反革命侵略に対する日帝の強制的従属的侵略加担からの大衆の反米帝民主主義要求を国際的に「中ソの統一」を基礎とした国際的的反米反帝統一戦線、国内的反米反独占、反帝国主義の統一戦線を基礎に、その上に民主連合政府（人民戦線政府）を集約しようとしている。

中ソの間を右往左往した日共はソ連平和共存路線をみせかけだけ批判した。だが中共、前夜を武装反米人民戦線は彼等にとつて小ブル意識にそまらあげた日共にはただただ恐怖と驚かすのみで、それを左から真に革命的に止揚するのではなく右から修正主義的批判的批判を行なうにとどまった。

そして今、彼等はソ連修正主義と妥協を開始した。彼等の現代革命の歴史的論証は、上面耕一郎（全くのペテンの御用理論家、近代主義の俗物）は人民戦線の総括と革命的発展として、人民戦線の欠陥が下からのプロレタリアートを基礎にして上から強硬的に社会主義政策を大胆に実行すればよかったと。

確かに部分的にファシズム勢力と十字火団にはナショナリズムが勝利した。それは帝國主義戦争の出発点における仏ブルジョアジーの勝利にすぎない。だがレオニブルム内閣はなんとプロレタリアートの政治的、経済的要求と非和解的に対立したのか。

社会党中期路線の理論的支柱清水慎三も又この同類である。諸葛草派も大なり小なり同じ現代修正主義の同床異夢に過ぎない。他方ソ連現代修正主義の日本国内に於けるアンチ諸中国派は肉体的左翼性を保持していても同様に破局的民族主義に彼等の世界革命戦略が変らない限り転落し、同じ社会排外主義の左からの推進に結実する。

今日日共現代修正主義と古典的教条主義は、仏の労働者階級と共産党の敗北の道を確実に歩んでいる。

地獄への道は得意でしきつめられている。正に「一度目は悲劇でも二度目は茶番だ」彼等との非和解的な闘争は過渡期世界、現代革命、世界革命戦略、従属帝國主義の左からの推進に結実する。

これを基本問題だと捉える態度こそ小ブル的である。

① 次の中共大会とその政治内容こそが問題である。ここでは、このことを論議するのが主要でない。この問題は後述する。ここでは、特に①のaを問題にする。二七年上海蜂起、二八年広東蜂起、二度のコミンテルンの指導の左右の日和見主義としての誤りと毛沢東の革命路線に於けるそれとの執拗以降の抗日統一戦線、解放区を保持した上での中共和作、反動化しつつある民族ブルジョアジーへの周到な警戒心とその利用、革命的民族主義者の結集、日本共上との連帯活動、これらの行動は卓抜した最適な対応である。攻撃と利用に於けるアラグマチズムだが一九三〇年代から四〇年代にかけて最も考えられる現代植民地に於ける攻撃的階級闘争の統一戦線戦術である。我々があの時々のあの諸条件で考えた場合、トロッキーの単純永続革命の道をのり切らなければならぬ。

同時にかかる対応は、コミンテルンのファシズム、民族ブルジョアジーとの同類とは全く異なることを確認出来る。武装蜂起した日、米、英諸帝國主義の侵略と相互の抵抗、暫次の民族ブルジョアジーと地主ブルジョアジーの米、英帝國主義との癒着、この条件では都市が帝國主義の圧倒的軍事力によって絶対的に制圧されている場合より連をつつプロレタリアートの主力を長征を連して、農民の土地革命のエネルギーと結合し、プロレタリアート赤軍によって解放し周辺から都市へ進撃することは全く中国一國の範囲では適切である。

帝國主義戦争の日帝の敗北の間隙を通じて英米帝國主義と蒋介石軍ブルジョアジーに主要打撃対象を永続的に移行せしめ、都市のプロレタリアートを潜在的に解放区を根拠地にして組織し、最終的時点での農村からの進撃と都市のプロレタリアートを浮上し蜂起との結合、全く卓抜である。その後の政治的過渡期に於ける基本点に於ける新民主主義体制―朝鮮動乱、反右派闘争―人民公社運動の正しき、モスクワへの参向―ブルジョアとの妥協、ハンガリー動乱に対する修正主義への加担、その後の中、ソ論争の発展、六〇年代に中期以降の対外戦略の誤謬と破産を以て中国文革、正にこれらの過程は矛盾に満ちているかの如くみえる。だが、其底の現実の矛盾を通じた発展である。

彼等はスターリン主義の如く閉じられた体系をもつてはいない。そしてその

主義批判、世界単一党建設等をめぐって死活をかけて闘いとられねばならぬ。

② 毛沢東主義とその破産

毛沢東主義は現代の革命的経験主義、ブルジョアチズム、そしてその地方的共産主義が現代革命の主体への発展か世界革命戦略の誤謬、第二次帝國主義戦争を通して自國の人民を主体的に労働者國家に導いたのは唯一毛沢東とその中国共産党であった。

毛沢東主義はいいして幾つかの重大な非マルクス主義的欠陥を有しているが現代修正主義やスターリン主義ではない。

勿論、今後の過程がそうであるということとは別である。

実践的諸問題から幾つか列挙しておく。

- ① 反米―民族解放、中間地帯化（第一第二）戦略―周辺革命戦略の誤り、インドネシア革命の敗北の総括―スターリン主義からの内的決別
- ② 世界革命戦略化、プロ独との内的関連における曖昧性、自力更生は戦略理論の基本として意識化されてはいない。
- ③ スターリンの國社会主義としてではない。
- ④ 中国核実験ナンセンス
- ⑤ 核は武器であり誰がどのように使うかである。かつ共倒れの危機があることから直接に類の危機―非革命的武器と考えてはならない。
- ⑥ だから問題は戦略である。
- ⑦ 戦略が正しい場合、如何なる条件で打ち返せるのか、かつ戦術決断の誤謬の場合その原則―他のプロレタリアートのとの態度―我々自身の曖昧性
- ⑧ 戦略が誤っている場合、帝國主義の反革命核攻撃に対して、他國のプロレタリアートのとの態度、ブレフトリトフスタ条約とレーニン
- ⑨ 唯一の労働者國家に導いた正しき
- ⑩ 反右派闘争と人民公社
- ⑪ 人民内部の矛盾、階級闘争論
- ⑫ 文 革
- ⑬ 現代修正主義との闘い
- ⑭ 個人崇拜―全くの部分

欠陥の部分性

体的評価の基本点は國內政策の基本的正しさと國防政策の正しさと誤謬の入りまじりとして、ある現象に内在する基本点は中國階級闘争が一國の階級諸關係を通じて現代世界全体を内包しはじめることである。このことは、中国共産党は植民地に於ける現代攻撃的階級闘争の民族解放社会主義の路線を直観的・即目的（ブルジョアチックな経験主義）にたどりながら、世界的諸關係に立ち至ることによって、その意味を対目的なものとして、即ち経験主義を越え、現代過渡期世界現代革命の把握と我々の國際主義、世界革命戦略、戦術を採用せざるを得ないし、又それに至らない場合、地方的共産主義に留まるか、現代修正主義に転落するかを運命付けられているのである。

今彼等は我々への道をアラグマチックに摸索しつつある。中、ソ論争は労働者國家の発展の不均等に客観的に起因する面もあるが、主に主体的には、過渡期世界と世界革命戦略の問題である。

① 米革命の挫折とニューディール

世界過剰生産恐慌―米帝の欧州への帝國主義外交の破綻からの二九年―三〇年初頭にかけての階級決戦の成熟、プロレタリアートの自然発生的攻撃的闘争の開始、だが世界単一党の不在とアメリカ大陸のプロレタリアートを基礎としたアメリカ帝國主義者の動揺からのたち直り、モンロー主義―アメリカ大陸主義の確立、國內政策に於ける労働者人民の不満の州分権制に対する解消と合衆國國家の中央集権制の強化を楯とした、ブルジョア統制経済―ニューディール政策の展望へのプロレタリアートの集約と暴力的撃破である。

ルーズベルトこそ、正に民主主義者―人民の味方を装った反革命の張本人であったのだ。

プロレタリアートの分断と敗走の上に築きあげられたニューディール体制は戦時統制経済への転化の基礎であった。であるが故に、資本の過剰及びアメリカ大陸からの膨張と軸ブロックとの対立は、アメ帝をして、参戦せしめた。そうした彼等は帝國主義戦争の間隙をぬうて、次の過渡期世界の盟主たらんと野望したのであった。

② 日本革命の挫折、國際主義と世界革命戦略の不在―その一國革命二段階的傾向

③ 独革命と同様に日本革命の総括は決定的である。

やはり、日本階級闘争も二七、二九、三〇年代初頭に階級決戦を迎えた。その経過過程を簡単に概観すれば、こうである。

二七年金融恐慌、二八年田中内閣の金本位制への復帰と世界恐慌への遭遇、山東出兵、田中メモにみられる蒙古・滿州・中国への侵略計画と各固（特に米）へのソビエト・モンゴリアン・ソビエト、労働者階級への全面的合理化攻撃、二九年浜口内閣の成立と金解禁・田中内閣の諸政策の強化推進及び一層の軍事力強化、これ等を貫く慢性的農村の疲弊とその深化である。かかる経過過程に対して天皇制ブルジョアジーの攻撃は治安維持法の実施と第一次、第二次、第三次レッド・ペーシ、上層組織労働者を同盟の買収を通じてのブルジョアジーの下への再組織、そして全労働者人民への徴兵制を基礎としその排外主義の鼓吹の強調である。

共産党のレッド・ペーシによる解体を通じて意識的前衛党の不在故、プロレタリアート、農民の自然発生的運動の弱場、それ故のブルジョアジーの支配力の限界の露呈とプロレタリアートの無能力からの農民の半狂乱化と排外主義が徴兵制を媒介に軍部を通じて、上からの三〇年代初頭にかけてのブルジョア政権にとって変つての農本ファランズムの進行・大東亜共榮圏構想への結集（一五・一五、二・二六）を経て労働組合の大解散と大政翼賛会への転落をもつて最終的確定として反革命は完成する。では革命的日本共産党は如何に対応したか。

④ 日本共産主義運動は、ロシア革命の成立とアナ・ホル論争で始まり、労働者は自らを労働組合に組織し始めた。だが労働者の形成と革命運動の開始は直ちに党と労働者階級の関連と党自身の労働者階級への在り方を山川・福本論争として現実的に要請した。他方かかる組織論上の問題は、日本帝国主義の膨張・侵略の抑圧として、かつ労働者と構造的矛盾を受け数多くの農民一揆を繰返していた農民自身の限界からの政治的同盟問題を内包していた所の労働者の政治闘争無産政党内閣、前衛と改良主義党派との諸関連、在り方を背後に含んでいる実践的問題であった。この論争は必然であるし、又二五年前後の徳同盟と評議会、無産政党内閣の動きとその分裂は必然であった。

この事態の中心は、労働運動と共産主義の結合、前衛党の労働者からの分離の上での結合、日常的意識の外からの指導の必要性、或いは労働者内閣、他階級、他階級の特権階級の追求からの分裂・国益排外主義への転化に対する綱領と前衛党を基礎とした全人民的國際反戦闘争を通じた諸闘争のそれへの結合としてあるものこそ、インチャル・プラン・ドッチライン・M.S.A等の反革命援助であり、決して反革命一般に投下されたのではない。他方動揺し崩壊した、資本主義生産とその諸関係を立て直すには、アム帝の反革命を通して、経済的政治的再建に着手せざるを得なかった。あたかもアム帝はアム帝経済の利害と世界ブルジョアジーの利害を一体にした、世界反革命帝国主義として君臨したかみえた。だがその後の不均等発展の深比・今その第三段階に突入することによってかかる諸現象はもろくも崩壊し、アメリカ帝国主義者の主観的野望は崩れさらんとしている。

各国プロレタリア革命はソ連根拠地と結びつき、動揺し混乱しつつある、帝国主義に対して、世界同時のプロレタリア革命を完遂する必要がある。勿論アメリカ革命も例外ではない。だがソ連現代修正主義はアム帝と先行する連合帝国主義と相解し、かつ国内の反動的諸妥協階級とし、それを放棄し、アム帝を美化し、プロレタリアートを武装解除し、その闘争をブルジョア民主主義に押しつけた。

かかる内容こそが彼等の革命的冷戦政策の限度である。かくて世界革命は三度挫折し、プロレタリアート人民は帝国主義の奴隷の運にまぼりつけられたのだ。かかる欲則徹尾定められ屈折した世界のプロレタリアート人民を血の海におはれさせた。

世界革命の挫折は、その結果を概括することに迫られ、コミンテルン・コミンフォルムは権威を失い、世界単一党は分解した。

結果として、復讐多岐なかかる革命の糸を解きほぐし解明する作業を放棄した部分はその後現実をそのまま肯定し、合理化し、フルンチョフ・ドッチラインの現代修正主義を完成させ、現実をそのまま否定したものはマルクサ主義に背教する。

現代修正主義は観念論へと転落するのである。現代革命主体はそれをトロツキイを手導きにし、苦闘の末から解明に向かい今過渡期世界、世界革命、戦略を確立し世界単一党の創設に向かいトロツキイをも決別し、真に現代修正主義を確立しつのである地点にある。

第四章 党の型と実践論

党の型とその実践的活動形態、党内生活（実践論）

プロレタリア統一戦線、労働者人民の武装、党の合法・非合法活動の結合と駆使等の死活の問題を組織論として集約的に表現したのであった。

二五年当時の労働組合、政党の大分裂に対して一歩突き進み、かかる問題を理論的・組織的に解決し、来るべき階級決戦期に対し、國際主義、世界革命戦略の確定の上での天皇制帝国主義との対決へ向かうべきであった。

⑤ ところが日本革命運動の組織論上の問題を一体的に地方共産主義として解決に向かいつつそれは必然的に現代過渡期世界と現代世界革命戦略、現代修正主義に、世界攻撃的階級闘争の全体の鎖の一環に組み込まれることによって、世界史的水準の問題に達せざるを得なかった。

あたかも問題の所在の中心が一國の権力規定論争に（二七、二七、三二、三二、三二、三二）講座派、労働派の対立）あったかの如くみえながら、実は一國革命の限界故の過渡期世界の把握を通じた、プロ國際主義及び世界革命戦略の確立・世界単一党の世界戦略にこそ核心があり、コミンテルンの（祖国防衛）一國二段階戦略こそが批判的に止揚されねばならなかった。

日本革命運動の原流福本イズム・結合・山川イズム・方向転換・単一無産政党内閣及び協同戦線党形成論は階級闘争の中心に接近しながら、その発展の基準を国内権力規定に求めた。

それ故に世界革命戦略・世界単一党建設及び現代修正主義との対決の問題が放棄され、両者は結局、招換主義、赤色主義、解党主義・大衆運動主義へと転落し現代修正主義に屈服してしまつたのだ。

そしてその結果は自然成長的攻撃的階級闘争が國際的に結合されブルジョアジーを窮地に追い込めながら上からの農本ファランズム・軍部を権力につかせたのであった。

⑥ 第三の革命の波とその挫折、結果と展望をめぐつての現代革命主体の、現代無政府主義の萌芽、及び現代修正主義の世界的定着・帝国主義戦争の終極から攻撃階級闘争の再度の昂揚（仏、独、日、植民地圏）が巻き起された。

米帝の過剰生産力・資本はこの帝国主義の動揺と波乱過程を条件に資本輸出を展開し、全世界の市場を独占的に再分割した。かかる米帝による世界市場の再分割は昂揚する階級闘争を鎮圧し他帝国主義を自国に屈服せしめるべく、世界反革命戦略と不可分に結びついていた。かかる経済的法則と政治的要求を結びつけた

① 我々はプロレタリア世界革命の実践的基準、戦略を獲得した。実践的基準を獲得した今、現実の階級闘争に対して、はじめて労働者をプロレタリアートへ（ソヴェト）組織し、かつ党形成する具体的方法を確定する作業に立ち至つた。一革命的理論なくして革命なし（II a）だ。だがこれはプロレタリアートの柱大な事業の半分を獲得したに過ぎない。

aは「革命的組織なくして革命なし」（II b）に向けて固く結合され、完成されるし、されねばならない。階級闘争に於て巨大な世界的精力を発現せしめ、飛躍的な戰闘的、実践的M.L主義が、ブルジョア社会のあらゆる墓場人プロレタリアート人民を把え尽すには我々は組織論の確定に向かわねばならない。

組織論の確立をもってM.L主義は完成される。aは実は組織論まで含む。即ち理論が実践の組織的保証を得ることによって、はじめて階級闘争に結合されるが故に、かかる組織論をも内包したものととして実践的、戰闘的M.L主義は完成されるのであって、aの限りでは決して完成したものではない。aのみに狹めてM.L主義の世界観を理解する時、政党内の組織問題を解決する場合は実践的には、同時に理論の無責任性・理論主義（その反面で解党主義）を随所に生み落とす。他方の極に、理論と無関係な組織主義・解党主義を生み落とす。両者は相互に補い合

組織論まで含んだプロレタリアートの実践的、戰闘的、戦略戦術の世界観を基礎にしてこそ、aの意義はますます真理たらんとし、同時にbの意義をもそうさせる。それ故に組織的危機はその階級闘争における政治問題と結合され、政治問題も組織問題の序例をもつてのみ解決されねばならないし、又解決される。正に「組織問題は政治問題と切り離されてはならない」はかく理解されねばならない。

我々は（I）（II）（III）章を組織論に結実させ、発展過程だが、発展の原理と総論に於いて地上の現実性となる所は完成された全体系をもつて我々は労働者、人民のまに、不屈の姿を登場させねばならない。

② 以上の事例は、共産主義者の組織の建設からプロレタリア世界革命党への発展過程が、労働者人民の団結・大衆の戦略的組織から、ソヴェト（II）プロレタリア国家への発展と不可分体であり、換言すれば、プロレタリアートは有機的因体の如く結合された党と即自的労働者階級の階級闘争を通じた内的発展・確

立上階級の抽象性であるからだ。前者はこれと離れてはあり得ない。又後者も前者に對してそうであることを意味する。組織論は労働者階級のプロレタリアート形成の一端である。それら兩者を結合する階級闘争を導くものこそ、綱領「戦術」である。(生成、発展、確立、消滅の歴史過程)「プロレタリアートは労働者階級と党の結合の深まりの階級闘争の深化からプロレタリア特異性(世界プロレタリアートの完成)の形態の獲得へと登りつめ、政治的過渡期を経ての、死滅の(同時に党の死滅)過程の対目的抽象性であるからだ。

④ かかる歴史的、論理的全体過程に於ける階級形成と党形成の諸関係を、かつその中に在る階級闘争の位置に於ける有機的連関性は、共産主義者及びその組織の規定性を獲得することなしには定立出来得ない。何故なら、共産主義者は抽象的、本質的であると同時に現実的だが、労働者階級は現実そのものであり、そのプロレタリアートへの過程は、共産主義者及びその組織の現実的活動を媒介してのみ形成されるからである。従って、本題の叙述は、かく行なわれねばならぬ。

⑤ 共産主義者及びその組織の規定性
⑥ ①を獲得しての、党の階級闘争に果す役割り、同時に階級闘争の党を規定する客観性と党形成の関連、及び労働階級闘争の兩者の関連を洞した、戦術「戦術」の總体に於ける位置の規定。
かくしてのみ、対象化された党の現在の現実に於ける党の具体的諸政治活動は始めて、実践論として措定出来る。だから本章(二)節、(1)共産主義者及びその組織と、その戦術「戦術」、(2)戦術、戦術と階級形成と党形成の内的諸関連と発展過程、(3)節、実践論とならねばならない。

第一節 共産主義者及びその組織の登場

「自由とは必然への洞察である。」「共産主義とは永遠の理想や基準ではなく、現実の実践である」と述べた、このマルクスの深い洞察は、現代の不毛な客観主義的、機械論的唯物論者には到底理解できないことである。かかる不毛な形骸化した唯物論者は、到底卓越した観念論者の敵ではない。

我々ばかりか不毛な唯物論者を、帝國主義と、卓越した観念論の勳章を通じて、同時にこれを打倒しなければならぬ。共産主義者の哲学に於ける唯物論証

法とマルクス主義の党派性とは、今死活をかけて守り抜かねばならない。さて我々は共産主義者及びその組織を語る前に若干の前提を語ることから出発しよう。

共産主義者の形成は決して、論理的歴史的なものが整合的に展開されるものではなく、飛躍と急激な後退等の社会的な歴史的論理的な諸関係の自己史のうちには、總括されないし、諸個人は無数の過程を経て、ここに飛躍し、到達するのであり、それは個人の思想が社会政治思想に到達するのであり、それは絶対に普遍的に叙述できるものではない。だから、本題に於けるには我々は、歴史的論理的に不整合のまま、その発展の基本点に於てのみ語ればよい。

又、それ以上を望むことは、無駄な不毛な努力であり、観念論への転落でもある。本題では、対象化され、我々の目的意識性の総括体としての、世界革命戦略に基づいた諸戦術論的実践の主体が、如何に理想と実践存在と意識等の根本的問題を如何に把握し、目的意識性の総括体、世界革命戦略に基づいた戦術論的実践にたどりつくかか解明することにある。これらのことは、勿論、換言すれば(一)・(二)・(三)章の前提であり、何ら新しいことではなく、巨大なマルクス・レーニンによって語り尽された一部でしかない。だからこの叙述は逆M主義の理解と実践へのほんの糸口を提出するものに過ぎない。

一、実践の目的性と人間認識(唯物論証法)

① 人間は労働し、生産手段を作り、他の人間を産出し協業する。人間のあり方は自然成長的社會そのものに他ならない。すなわち労働の材料、道具産物に對して諸個人が相互に結び結ぶ関係にある。しかも一定現実にあるがままの姿、即ち労働し、物質的に生産する諸個人、したがって一定の物質的な、彼等の思う通りにならない諸制限、諸前提、諸条件のもとで活動している諸個人である。

② 諸観念、諸表象、意識の生産は、まず最初は直接に人間の物質的活動と物質的交通という現実生活の言語にのみこまれている。

しかも人間の表象作用、思考は精神的交通は彼等の物質的活動の直接的流出物である。かかる人間が人間自身を認識する属性は、自然の人間が自然から生産手段を創り、自然から離れ同時に社会的分業と所有を生み出し、労働が精神労働

働と肉體労働に分裂する。人間社會が自然に對立する時始めて形成される。自然的感性から他の人間との交通の要求、渴望から生れそれ故意識は社会的産物であるが、過去の感性とは異り、意識は現にある実践の意識とは何か違ったものと思ひ込むことができるし、現実的に思ひ浮べていると実際に思ひこむことが出来る。

この瞬間から意識は世界から解放され(純粹)理論、神学、哲学、道徳等の形成に移ることが可能である。だがそれらも又現実的社會關係の總体「諸個人」の実践の反映であり模写の歪んだ形態である。

③ かかる諸個人の社會諸關係にとり結ばれ、発現する行為の模写「意識」は、もともと人間の生體的肉體的な生理反応であり、現実の社會にありのままの人間が、社會そのものの存在と発展の形式に對立せんとする属性である。しかも、それは社會そのものに適合し、その査証を得んとする属性である。環境は人間がつくると同様に、環境は人間をつくる。

④ そのことは、換言すれば、人間そのものが、四つの歴史的關係の契機、四つの側面に規定される唯物論証法的存在であるからだ。これらは諸個人をとり結んでいて社會の唯物論証法の属性に他ならない。

⑤ だから諸個人は、その諸活動を、特定の環境「特定の社會」特定の生産力と生産關係の交通形態の唯物論証法の運動法則に合目的化せんとする。

唯物論証法の認識は、「諸個人」人間の社會の運動法則の模写された最も正確な表象である。

⑥ しかし、かかる実践の合目的性はつねに現実の制約とそのイデオロギーゆえに、はばまれ、觀念を生産し、同時に再度の實踐への必然は、それをも解体させる。かかる衝動、飛躍、成長、後退等の物質生産の連続過程は、偶然的に諸個人「社會」の運動法則そのものを模写し、これによって把文直された、実験主義的意識の實踐が開始される。

もはや、単に経験主義的な即目的的實踐とは異なる弁証法に従ったところの、実験主義的に對立せんとする實踐である。

即ち、實踐が結果に於て証明されんと欲するような實踐である。二、ブルジョア社會に於ける二重の疎外及び對象化と現実のあるがままの疎外の登場「目的意識性の獲得」

① 即目的的實踐から実験主義的實踐への転化は、ブルジョア社會の人間に於て最終的に完了する。このこと自身も、社會的生産力と生産關係の発展に規定されて、同時に市民社會の階級への分裂と階級對立とを以て、唯物論証法の法則が最も社会的に、論理的な姿を以て顕在化することに起因している。

② 実験主義的實踐を通じて、ブルジョア・イデオロギーと、模写された意識との對立は観念論と主要に実験主義、プラグマティズム(經驗主義)とを生み出す。さすにはおかないが、現実の諸個人の運動の必然と、再び現実からの制約、觀念の解体と再編の繰り返しの過程、現実と觀念とからの二重の疎外の発現形態の再生産過程の、無限の無数の過程は、遂に思弁から科學的態度と合目的性を飛躍させる。↓「思弁の終るところ、社會科學が登場する」(マルクス)。これらに對し、唯物論証法は人間そのものの模写として、諸觀念を設定するが故に、実験主義的合目的實踐とそのありのままの制約は、ありのままの社會とイデオロギーの分析として遂に史的唯物論、マルクス經濟學(資本論)の確立、上部構造とそのイデオロギー形態の分析と批判、及び労働者階級の発見とそれへの結合と形成へ向け

ての實踐へと飛躍・発展する。

かかる目的意識的實踐と、唯物論証法、唯物史觀、經濟學、上部構造とイデオロギー形態の把え直しと、ありのままの現実そのものの科學的分析をもつての再び實踐の繰り返しの過程は、過去の自然成長的合目的的實踐、唯物論証法に従った実験主義的實踐のこれらとは全く質に於て異なり、それらから生まれ、その発展でありながら、より高次である諸個人の世界的意義と社會そのものの必然を模写する意識である。このことは、革命の実験主義とも言える性質のものである。かかる目的意識性は、諸個人の實踐を帝國主義の世界的同時打倒の、一貫した路線に統合し整理せしめずにはおかない。

まさに人間の行為に於ける合目的性は、ブルジョア社會の歴史的論理的運動「唯物論証法」史的唯物論及び經濟學、上部構造、イデオロギー形態として模写せしめ、かつこれを把え直す人間は、その合目的的實驗主義的實踐と革命の實踐に転化せしめるのである。

三、共産主義者の戦術「戦術」の結果とその組織の獲得「武装された共産主義者」

前節 ① 目的意識性をもった革命的實踐は、全ブルジョア社會と根本的に非和解的

なものである。かつ共産主義者は論理的なものと、歴史的なものとが初めて労働者人民の未來に於て論理と歴史との整合された姿に現在では即自性そのものを現在の実践のうちに體現する。それ故共産主義者は、即自的労働者人民の革命的衝動として定まられる。かかる革命的实践をおし進める目的意識性の諸力の集中は世界革命戦略である。

実はこれこそが、対象そのものの合目的実践を呼び起す歴史的論理的な運動法則の模写即唯物弁証法、史的唯物論、上部構造とイデオロギー形態の分析等の全模写の集中であり、総体であり、最高次の位置を占めるものなのである。

世界革命戦略こそ、対象の最も正確な重じよう的模写なのだ。

共産主義者の党派的目的意識性は世界革命戦略の正否にある。それが、労働者人民の正しい戦略の下での戦術的実践は、その内的運動法則に結びつき、彼らを党のまわりにひきつけ、彼ら自身を運動の過程で階級形成をばかり、同時に共産主義者に対象を認識させ、目的意識性の基準は一般的階級的的思想や諸哲学であってはならない。意識性をマルクス主義の原理に支えられた戦略即綱領に純化させる。

論理性と歴史性との不整合は、疎外論や認識論、資本の把みとり等の主体性論ではなく、それ自体で完結するならば宗教となり、実践的には解党主義となるが「マルクス主義の原理とそれを総括する戦略の下での革命的現在の実践こそが、対象への自己の現在の制約即この不整合を克服するのだ。この実践が、あたかも社会と対立する「諸個人」の如く觀念させ、現実から二重に疎外される事柄を克服するのである。だが、かかる戦略即戦術的実践は、ブルジョア社会と絶對的に相容れぬ敵対関係を形成する。だからこそ革命的衝動は、権力から集中攻撃と弾圧を受けるのみならず、現象的には労働者人民にも敵対するのである。

だがそれは、プロレタリア人民の個々ブルジョア的人間と敵対しているのではなく、決して社会的歴史的プロレタリアと敵対しているのではない。

共産主義者の結集した組織は戦術を基準に対象変革の戦術的実践に於て固く團結しているが地方でそのことは現在の労働者人民のブルジョア性に、その実践の政治過程において、敵対することからあらゆるブルジョア性の流入を阻むためには、鉄の規律が必要であり、衝動は常にあらゆる意味で武装されていなければならない。

身、実践を通して現在の労働者階級の階級形成過程に於けるブルジョア性に自己自身が規定される過程の意識であることまで対象化するが故に、自ら党の鉄の規律と他方で党内民主主義かかる党内の存在様式を通しての革命的実践の保障と、自己自身の戦術的意識性が純化されることを対象化するのである。

共産主義者の組織はブルジョア社会の一切のブルジョア性から分離した組織である。党の社民等への加入戦術の採用やローザやその一派の社民自身の自己展開的發展を通しての前衛党の分離等は、自己自身の戦術的階級意識の不在と小ブルジョア性の表現にすぎない。

第二節 労働者階級の自然発生性と党の同時意識指導—党の大衆からの分離と戦術を通じた実践過程の外部注入による場合

このことは今深く述べ直され、理解されねばならない。

この数年ますます深く深く労働者階級の形成の新たな段階が到来し、それに応じた、世界革命戦略の確立と不可分一体に先進的諸國の指導の限界の露呈と、内部の分解、その転倒を通して必然的の必要性と、その作られるべき党の型が問題にされている点においてかつ革命戦術と結びついたボルシェヴィキ対メンシェヴィキ、或いは福本、山田論争の我々をも含んだ未整理故に決定的である。

正にボルシェヴィキの革命の実現とその敵対者の革命の敗北として鮮明化した問題に解答が与えられないことは、我々自身の革命の敗退に連なる性格のものである。

このことは次の二つの問題である、即自的労働者階級の闘争に対する党の諸政治活動のあり方へ労働者階級の運動に対する党の運動のあり方とその結びつき及びそれを媒体にした党内に於ける前衛相互の関連である。その定在の仕方（現実的には各階級、各級機関の諸機能質、配位 etc である）。

この論題に於けるには逆に指定された党から働きかける対象である労働者階級或いはプロレタリアートそのものの運動が發展形成—成熟等を通して規定性そのものを定立する必要がある。又党が指定されたが故に、労働者からソヴェート國家即プロレタリアートへの形成—發展—確立過程はプロレタリア革命党と結びついて始めて実現可能となるからだ。

他方で党内規約は実践を通じて必然的に流入生起する小ブル的傾向を党内闘争の形式を保証しそのことにより規律はより生きた実在的意義をもって確立されます。自らを純化し、労働者と深く結合しながらもその日常性との関連で全面的に彼等と分離するのである。そして自らの純化を基礎に、戦術、戦術的実践を媒介にますます深く労働者と結合しプロレタリアートを形成する。

純化

諸闘争に於ける諸戦術的戦略的推進は、その同一の事柄を、組織的には、労働者のブルジョア性からますますその分離とそのプロレタリア性とのますます深い結合を獲得することとして表現する。

共産主義者の諸戦術実践が戦略的に推進される為には労働者大衆のブルジョア性からの絶對的分離した組織を通してのみそれと固く結合し媒介されてのみ可能である。

ブルジョア社会と絶對的に相容れぬ世界革命戦略の下での革命的実践は、プロレタリア革命党の鉄の存在を通してのみ可能であり、それと切り離してはありえない。その組織的保証を抜きにした場合、その戦術的実践は革命性をもったものであれ孤立し一揆主義に結果し、他方で共産主義自身に戦術への疑問と小ブルジョア改良主義への転落を生み落すのである。

又世界革命戦略の無自覚性（誤りの場合）は組織そのものを形骸化し、官僚化させ、共産主義者の実践的意識を曇らせ、ぼやけさせ、哲学や思想に招換させ、その觀念性はブルジョアのイデオロギーへと結節され、最終的に組織の分裂と解党に結果するのだ。

これ等の戦術的実践と、労働者からの分離した組織不可分一体制事柄の本質的意味は戦術即戦術的今日の実践が、ブルジョア社会と根本的、絶對的に相容れぬ性格そのものの組織的表現である。

前衛党の鉄の規律の必要性即あらゆる意味での党の武装自身で共産主義者にとって外的なものではないブルジョア社会の模写の総括としての世界革命戦略—戦術的実践の目的意識性はそれ自体として終らず、組織的保証にまで、総括され共産主義者内在的に受け入れられることを意味する。

ブルジョア社会の模写の総括を戦術—戦術的実践と対象化した共産主義者自

即ち本題は第一節に於て展開され、最高の階級意識戦略に下づいた、実践的意識を獲得した共産主義者の組織が、第四篇に於て、その形成の歴史的論理的発展そのもの自体から、党のブルジョア社会と労働者人民に対しての在り方とそれを通じての党内に於ける共産主義者のあり方を指定した二つの事柄を、階級形成との関連でより論理的なものとして完成させる事柄のことである。

我々は四章二節によって産業資本主義、その發展転化としての帝國主義の確立過程を通して共産主義の世界史的排出及びその組織的戦術—戦術的実践を、

(1) 人間活動の合目的性とその人間による表象、正確な模写が唯物弁証法であり、

(2) 唯物弁証法の認識を通してメンゲルス・レーニンは共産資本主義帝國主義に於て、階級闘争の世界史的、多種多様な経験を通して史的唯物論、経済学的确立と上部構造、イデオロギー形態の分析とその批判、ブルジョア社会の根底的粉砕即世界革命と共産主義社会への置き換えの過渡即プロレタリア独裁の共産主義理論へと総括した。レーニンは革命運動を戦術に支えられた前衛党建設をもつて遂行する必然性、かつ実践することによってマルクスを基本的に完成せしめた。

(3) 革命的実践の目的意識性（主体性）は、革命理論とその理論的、組織的総括即世界革命戦略及び、党によって保証され、共産主義者は実践の今に於て、歴史的、論理的なものを整合し、労働者階級の前衛となることを理解した。

さて、かかる時点から、労働者階級を語ろう。

① 労働者階級の共産主義的意識の契機—萌芽

二〇世紀初頭のロシア革命運動を、労働者階級の自然発生性と共産主義者の目的意識性について述べて、かかる論争はロシア階級闘争に於ける実践的問題になつたばかりでなく、西欧のそれや、戦前一九二〇年初頭の日本階級闘争に、山川福本論争に於ても、革命運動に於て死活の問題であった。しかも、このボルシェヴィキ・レーニン主義とメンシェヴィキ（即マルトフ）トロツキー、ローザ主義との格闘はこの世に階級闘争がある限り、永遠に繰り返される性格である。

我々はこの論争を避けて通ることは出来ないし、又、今その問題の火急の決着が要請されている。決着をつけよう。

(1) 帝國主義の経済法則と帝國主義社会は階級闘争を広汎に呼び起こすし、労働者階級人民に帝國主義とブルジョア社会に対する直視的批判を通しての社会主義の発展を自然発生の經驗的に願望せしめずにおかない。帝國主義のブルジョア社会は、貧困、収奪、政治的無権利、生命の危機、没落、戦争反動と暴力等を呼び起し、労働者人民を苦しめ抜く。このことは世界史的經驗、特に産業資本主義以降の無數の戦争、ブルジョア支配思想の誤謬、労働者の抑圧、収奪國家権力の暴力性、収奪及びブルジョア階級の階級支配の道具としての役割、革命闘争の開始と挫折、に開始、かつ資本主義生産の土台と切りはなされ、ブルジョア改良主義の破産とブルジョア階級の墮落の事實、そしてロシア革命の實現等に労働者人民のありのままの現実と歴史的經驗がそうさせるのである。

そしてかかる帝國主義の粉砕と國家権力のコッパミジンの粉砕、プロ独の實現の自然発生の要求は、帝國主義の不均衡、インフレ、混亂、世界市場の再分割と政治的対立の深化すればする程、拡大される。

正に帝國主義そのものが、労働者人民に帝國主義とその社会の批判、共產主義の確立の自然発生の意識を生みつけるものである。

だが、かかる自然発生の直感的、即時的意識のみでの階級闘争や革命闘争が数多く敗北し、労働者人民の團結を弱め、分裂せしめ、ブルジョア階級と和解することとも、経済的事実である。

自然発生の認識は、決して計画的な全ゆる闘争を徹身的な自己犠牲的プロ革命争に、機械的、自然成長的に發展させはしない。そればかりか自らの闘争を既成の体制への妥協と屈服にそらせてしまふ。労働者階級は自らのブルジョア階級と権力の闘いに、突き動かされている意味を、自ら科学的に解明することは出来な

い。その闘いに突き動かす精力について、經驗的直感的にしか把握し取れない。レーニンは「何をなすべきか」に於て「自然発生の目的意識性の萌芽である」といふしくも述べている。

プロレタリアートの共產主義實現の意識と準備は革命的インテリゲンチアとによって完成され、労働者の先進的部分を通して、労働者に外部からもたらされることを結論している。

しかも、労働者の自然発生の性と革命的インテリの革命理論形成も等しく、その歴史的社会に於て発生しかつ別々の場所から独立に発生しながらも、一つのものと

「共產主義的意識はプロレタリア的階級闘争の必然的な直接の結果である」等の誤りはどこから来るのか。それは次の三つの点にある。

(1) 労働者階級が資本主義的生産にしばりつけられていること自体。

(2) 労働者階級がブルジョア社会とその上部構造、ブルジョア國家があることからのブルジョア・イデオロギーへの非武装。

(3) ブルジョア政変、小ブル改良主義政党的ブルジョア的政治活動と化し、革命政党的活動基盤が限られ、狭いこと。

以上である。ここで(1)を記述すれば自然発生の性は規定し得る。

労働者階級の自然発生の性とその意識との関連は、(1)によって規定し得るといふことは、以下次のことをはつきりさせればよいことでもある。

階級を構成する現実の諸個人(歴史的現実の特定の環境と特定の条件、制約をもった現実の諸個人、諸個人の觀念的意識ではない)が、市民社会(ブルジョア社会)の中の現実の矛盾を、彼等自身を取り結んで、諸個人間の諸個人が、その資本制分業關係に總括されつつ、階級闘争としてブルジョア階級と國家権力との対立(政治)として展開されること、現実の物質生産を行っている彼等諸個人と意識との關係を通じた事柄とを、總体として関連付けなければならないことである。だから、このことは換言すれば(1)歴史のなかに、今の市民社会の根本的諸個人(歴史性と論理性との矛盾の肯定と資本制分業生産様式を通じた階級対立への環元転化)、(2)これら二つを通じた、市民社会と國家の関連に於ける政治、(3)以上の上に立つての、市民社会、國家、共產主義の規定による、実態からの意識の肯定として終る事柄の事である。

(1) 市民社会の運動の基礎は種々な分業生産とそれを總括する社会的分業(資本制生産)によって成立している。

階級を構成する諸個人の、現実の特殊利害(主に、個人、家族)は、諸分業によって、諸個人の活動と他の人間との協業(諸交通形態)によって取り結ばれている所からの、共同利害と永続的(非)和解的(非)対立する。

このことは、人間が自然から生産手段をもつことによつて離れ、自然を加工し、同時に人間社会を作り、それを分業と所有とに於て、分裂させたところにもとの起源をおく。かつ精神労働と肉休労働との分業(意識の、何か実態と離れたところの一人歩きができる)ところの起源でもある。この意識も分業社会の成立

して固く結合するし、結合されねばならぬことを指摘している。

これは全く正しい。自然発生の性は共產主義と共產主義運動の萌芽であり、前者の前者への飛躍(発展)の契機であり、その基盤である。

萌芽(契機)基盤、それ以上でも以下でもない。決して共產主義への自然発生の、經驗的認識は、共產主義理論そのものではない。

これを同義に捉え、その發展が自然に連続して共產主義運動に發展するかの如く捉えるところから一切の經濟主義、改良主義、組合主義政治、自然成長革命論とその組織論が生れる。飛躍、發展、転化は即ち萌芽と契機、基盤を科学的に捉えた外からの実践活動に於てのみ實現されるのだ。

外からの別の要素と述べたがこれは別に別の要素ではなく、その自然発生の性のもの(一切)を模写した要素であり、換言すれば労働者階級の經驗、直感を論理化したものであり、労働者の日常意識(ブルジョアイデオロギー)からみて、全くそこからなのである。

帝國主義は、それが存在する限り、自動崩壊するわけではなく、その經濟法則は無限に続くのである。

M・I主義の經濟学は自動崩壊から自然に共產主義が形成されることを証明しようとはしなかったし、又、されるはずもなかった。その經濟学は、ありのままの資本の運動法則を科学的に分析(模写)することであつたし、一切の上部構造の矛盾が土台に於て形成されていることを、革命的にバクロし、その土台を共產主義に主体的に置き換えること、主体的共產主義活動の必要性を結論づけたのであつた。

資本主義が自動崩壊することを經濟学で觀念的に表象することは全く誤りであり、犯罪的であり、革命運動の一切の武装解除をもたらす。資本主義は、プロレタリア革命党と労働者階級が深く結合し、暴力的にその上部構造を打倒し、生産力の發展段階にみあった社会主義經濟を確立する以外には決して打倒されない。我々は今一度、労働者階級の自然発生の性について、より詳しくたいてみる必要がある。

労働者階級の運動と、その意識との関連についてである。

「經濟的發展と階級闘争とは、社会主義的生産の前提条件をつくり出すだけでなく、更にこの社会主義的生産が必然的だという認識をも直接につくり出す」

と、そこに於ける、特殊利害(現実の極めて直接的な利害)と共同利害との対立と、共同利害の國家への移譲にあり、そこから社会の特殊利害と共同利害との分裂が自らの利害とはよそよそしい國家の定立によって存在から意識の幻想性が独自の、意識において与えられる。

実はこの幻想性も分業による特殊利害と共同利害との解決されない対立の表象である。

この現実の特殊利害と諸共同利害との非和解的永続的対立は資本主義的分業とその國民經濟の定立からの、資本主義的分業諸關係に媒介され(諸個人)の特殊利害は階級利害と非和解的(非)対立を持ちつつ(諸階級の特殊利害の國民的共同利害との非和解的)基本的対立關係に還元化されている。

ところが労働者階級の諸個人(諸個人)の利害は、自らが資本制分業社会に於ては生活すること自身、自らの労働を商品化する以外に生きられない存在であり、かつ資本制社会の諸力の基礎(剰余価値を生み出しながらも、その反対に窮乏させられ、ますます社会から疎外され、政治的には根本的に抑圧されているが故に、自らの特殊利害を階級的資本制生産とブルジョア社会、ブルジョア國家と絶對的に対立し、その打倒の階級利害に(それ自身はあくまで階級利害と対立しながらも、)従属させられる客観的基礎をもっている。他の階級はそうではない。彼らの特殊利害と諸共同利害は國民的利害と対立しながらもプロレタリアートの階級利害に從属しない限り、永遠にバラバラで階級利害に統合されない。

労働者の客観的な團結の基盤は資本主義の生成(發展)没落(經濟法則)としての輪ね、だから再び生成(發展……)に一般的に於て拡大される。

ところが、資本と賃労働との關係に於ける二律背反的關係(かかる關係があるからといって剰余価値が、二律背反的に分配されるわけではなく、(その反対に労働時間の長さ)一般的に比例し、労働者はより低賃金におとしめられる)に於ける資本家と労働者は、自己矛盾した二律背反的關係に両者とも陥られ、かつ資本自身の価値法則(自己増殖運動は、両者をも物制的に支配する)。

この自己矛盾の資本制分業の自己矛盾的(二律背反)關係と資本の物制的自己増殖運動こそが、労働者の諸特殊利害をあたかも満足させ、それを總括しているブルジョア國家が、あたかも共同利害を實現するかの如き幻想を発生せしめる根拠である。

流入に対して、鉄の規律が必要である。しかも共産主義者の種々な程規、諸段階、諸性格における意見の相異はプロ民主主義の集中的様式を通じ実践の中で検証され解決される。それ故、中央集権制、鉄の規律と民主集中性は背反しないばかりかそれと不可分一体なのである。

各部署―各機関の活動は中央集権性と民主集中性の様式と鉄の規律によって下、からかかる諸問題上から解決され、その有機性を保持する事、この限りにおいてのみ戦略的展望からの「計画」としての諸戦術實現が可能なのだ。

かかる上からの中央集権的型の組織に保証された、党の戦略―戦術的実践は、深くより広く労働者人民と結合し全ゆる階級闘争は政治権力へと、労働者自身より深く、広く、意識においてより高い武装された戦術組織を作りあげ、「打倒過程」を通じてコミンコン的ソヴェト型のプロ独国家を創出するのである。

第三節 党の具体的実践活動

我々は(1)共産主義とその組織、(2)自然発生性に対する党の目的意識性からそれを通じて党のあり方と党内の共産主義者の存在を確定しこの諸前提の上に、実践を導かねばならない。

① 権力闘争、理論闘争、党組織闘争、党純化の四つの活動の諸規定その具体的形態

① 権力 闘争

(イ) 云うまでもなく一切の自然発生的闘争を世界革命戦略に向けて、計画としての戦略を實現する事である。(ロ)革命的敗北主義この場合の原則点の中心は徹頭徹尾革命的敗北主義であり、一切の中間的党、自からの妥協は原則的にありえない。(ハ)両者の関係、全人民的政治闘争こそが諸階級及び労働者内部の分裂を統一する、根本的闘争である、個人闘争は全人民的政治闘争への基盤を作るものとして位置づけられねばならない。全人民的政治闘争、個別闘争と最大限綱領、そしてかかる最大限の綱領の提出による闘争の根本的解決の主張は革命の過渡期に於て、「宣伝」の段階から急速に具体的表現の諸政策へと性質を変える。そしてその實現をソヴェトにゆだねる。

(ロ) 党派解体戦術と政党統一戦線

現実の闘争はブルジョアジーと国家権力との闘いであると、同時に大衆及び先

両者の活動の結合に於いてのみ、闘争は自然発生性を克服する。

何故なら大衆組織に於ける政党人の行動の統一からの一定の制約に対し、それに制約される直接の政党活動の保証は、その制約を後者と結合しつつ取り扱うからである。

② 理論闘争

(イ) 戦術の下に計画的諸戦術方針の追求は不可避にブルジョアジーと権力からのイデオロギー攻勢を受けるのみならず、その下での大衆の動揺とその改良主義党派とその改良主義イデオロギーとの結合の過程、正に自然発生的に闘争が提起するのに対して、(ロ)の権力闘争を擁護すべく、それと固く結びつき組織的理論闘争の必要性は痛切である。この理論闘争を通じて大衆―先進的集団は自らを教育する。

全ゆる一切の党の権力闘争、統一戦線―党派解体戦術―党派闘争に一体に、結合され理論闘争が準備されねばならない。

(ロ) かかる理論闘争は、当面の要請や意識の段階、相手との政治的思想的距離等の諸条件に全く規定されるものではなく、戦略、最大限綱領、プロ国際主義のスローガンに総括される完成された全体系を徹頭徹尾展開されるものでなければならぬ。

従って、同志は完成された全体系を深く把みとつていなければならぬ。だが、その全体系とそれを総括する主張は、現実の諸条件・環境を考慮に入れ、その環と深く結びついて闘争されなければならないことも又自明である。

(ハ) その理論闘争の基盤は、全国政治新聞を基礎に、その下に統轄され、序列づけられた、各級、各部署機関紙・パンフ・ビラ・アジテーション等である。宣伝車・レコード・テープ・政治集会・街頭演説、全ゆる近代宣伝の多種多様な諸手段が工夫されねばならない。かかる理論闘争の水準と、その現実性は全国政治新聞にかかっている。従って党の宣伝局―編集局に対する指導は決定的である。

③ 権力闘争

(1) かかる権力闘争、理論闘争による自然発生性の闘いは、必然的に先進的集団をして、現実から未来を、部分的な地方組織から世界的視野を、かつ、自らの意識に於いて闘争にかかり合う意識と転倒させ得る。党はその意識の転倒を完成された体系と、その総括―戦略、戦術、プロ国際主義を提出し、彼らを抱え直さ

進的集団をして党の提出する戦略の下での計画的戦術を、支持せしめ、かかる党の方針と主張に対する、小ブル改良主義党派との共通の当面に於ける共同闘争―統一戦線の成立を党派闘争の過程である。だから党は統一戦線と党派闘争に原則と一貫性を与えねばならない。

共同闘争は(それが長い短い本質的問題ではない。又、他政党―分派―我々に近い、あるいは遠いも同様である)は、与えられた条件と環境の中で党が確認する限りに於て一定の行動の統一―共同行動である。

だが共通の敵に、共同して闘うことは、全く党と他政党の戦略やその闘争に於けるスローガン(位置付け)が同じであることを意味しないし、反対にそれ等をめぐっての理論闘争のし烈な過程である。だから党は統一戦線に於ける諸行動の協定を守ると同時にスローガン、位置付けの相異を鮮明にし他党派の理論闘争を通じて党派解体戦術を意識的に追求しなければならぬ。このことを通じてこそ、ブルジョア意識から解放し、大衆と先進的集団を鍛え、革命的団結を与え、党のまわりに結集し、同時に統一戦術を通じてソヴェトを形成することが出来るのである。

(ロ) 権力闘争の革命的敗北主義による追求は二通りであり、両者の結合によってなされる。

即ち、政党の直接の当核の闘争の追求であり、他方で、戦術的大衆組織を通じての闘争の追求の二つである。

今こそ前者の直接の政党活動(闘争の直接の指導、政治集会、国会議員のバクロ闘争「青年同盟」「SSL」等の武装闘争等)が徹頭徹尾強化されねばならない。

後者は、労働、自治会、全学連、反戦、社研等である。ここでは(ロ)の原則と認識が最も現実に追求されない限り、小ブル改良主義に党自身が転落する。

この際大衆組織にある。政党人はあたかも無党派であるかの如く振舞うがこのことは全く犯罪である。

行動の統一の必要性和政治的意見理論闘争の必要性を前者に従属せしめ軽視し、そうしない限り、大衆組織の団結が保持出来ないと思ひ込んでいる改良主義思想である。これも又自然発生性への拜跪の一形態である。

しめ、種々な経過を経て、最終的にオルグし、党へ結集させる。

(2) このことを党が放棄することは、二重に犯罪的である。かかる共産主義者を党に結集することによって党を拡大することを放棄することに於いて、戦術的大衆組織へ彼らが遣り、党の戦略―戦術的実践の持ち込み、大衆組織を強化せしめることを放棄することに於いてである。

④ 党純化闘争

(1) 戦術の下での計画的実践は、同時にその総括と把え直しからの、新たな計画としての、種々の理論把握とその総括―戦略―綱領―プロ国際主義、実践論自体をより深く把え直ししていく。

この過程は、党が労働者、人民と深く結合すればするほど、党内総括過程での、これとの闘いは自らを純化し鍛え、より正確で深い(ロ)(ハ)の実践となつて、再び階級形成と党形成に向かう。

(2) この把え直しを計画的に全国新聞を基礎に学習会、党学校、各級各部署会議を行なわれねばならず通達、諸党的政治理論機関誌が必要である。

二、四つの活動の有機的結合―全国政治新聞

自然発生的Mに方向を与え、それを味方の誤謬からも敵のワナからも守る能力を育て、知識ある労働者や革命的インテリゲンチヤですらもが迷い込み拜跪する巨大な深さと広さの自然発生性、そしてつまるどころの経済主義を克服し、全体の政治生活の全ての側面、種々の階級が種々な動機で行う抗議や闘争の全ての試みを、系統的に日常的に評価することとしての全人民的政治宣伝、煽動によって、諸同志が全国的いや全世界的状況を知り、激動や積極的闘争のありあらゆるひらめきを総括し、普遍化せしめ、四つの闘争をたゆみなく、有機的に結合し、深め拡大するその導きの糸は全国政治新聞である。

これは全人民的政治煽動、暴露、全国的政治状況の統合、爆発と鎮静の交代に於ける柔軟性、政治活動全体を形成する深部の有機的綱領の、当面の環からそれをたぐり出し、諸闘争の自然発生性を克服し全人民的政治闘争に合流し、戦略の下に、全ての革命勢力を統合する媒介は明白に全国政治新聞である。これによって戦略の下に四つの闘争は結びあわれ、各部署、各級機関の様々な活動は生き生きと豊富に展開され、全体的政治的視点を常に獲得する。

我々は自然発生性への拜跪を克服し、戦略に向け、全階級闘争を飛躍成熟せし

め、党形成し、党自身を純化し、ますます労働者人民と深く、広く結合していく事―意識性の植村こそ全国政治新聞を基礎にして出来上ることを理解しなければならぬ。

かかる世界革命戦略を基準にしての全国政治新聞を媒介に全世界的政治動向の整理併合と全人民的政治宣伝も煽動に結びついでる権力の対極に権力闘争、理論闘争はより大衆的戦闘組織をプロレタリア国家権力へと発展し、かつその過程での先進的集団の意識の転入と党への結果を経て再び戦闘的大衆組織への以前とは別の質を持つての介入、そして党のますますの純化とそれを通じた権力闘争、政治闘争、党組織闘争の循環が階級形成―党形成を一体に発展せしめるのである。

三、八各支部・各級機関

党は世界革命の日本支部として、その世界革命戦略の一環として、日本革命を遂行する。

かかる世界革命戦略による世界階級闘争の自然発生性の克服を原基にして四つの闘争は実際上、各支部、各級機関によって行なわれる。

PPを最高指導機関として、そのスタッフII部局は根本的機能として、

- (1) 理論―教育の全国的・全世界的全人民的政治、パトロ、宣伝煽動の機能
- (2) 八全国政治新聞、編集、情報資料整理等
- (3) プロ国際主義の実現（国際統一行動、情報交換交流、統一戦線形成、世界党建設等の為）の機能
- (4) 全人民を武装せしめ、ブルジョア国家の暴力装置に対決し、粉碎し、将来の赤軍の指導を荷う軍事指導委員会機能
- (5) 統一戦線、渉外機能
- (6) 財政的機能
- (7) 党自身の教育機能
- (8) 学対、労対、国会議員、反戦等々の全国的統一のフラク機能等であり、かかる機能に応じて各支部は定められる。

各級機関は、四つの闘争を直接に遂行する機関であり、PB、各支部と結合し、その基礎を細胞におき、地区党―各都道府県委として、都道府県↓地区党↓経営細胞の順に決定は確認され、各級はそれに応じ、区別され、その諸段階諸条件に応じた活動の独自性と上、下、横の関連を保持する。

なるほど実験室の帝国主義の一国での労働者国家は、それを高い共産主義者へ政治的対立を含みながらも、緩慢に到達させる。我々はこの純経済的な法則を否定はしない。

しかも、かかる実験室の中でさえも政治的過渡期は存在する。即ちプロレタリア独裁である。

ところで現存する労働者国家は帝国主義に包圍され、その反革命攻勢（軍事的、政治的、イデオロギー的経済的にも）のさ中にさらされている。だからこそ、かかる社会主義生産の低い段階、諸制約からの国内の階級対立は、国内的国際的要因が結合され、激化し、純然たるブルジョア対プロレタリアートの階級対立、ブルイデオロギーとM.Lの世界観の非和解的対立を呼び起す。

であるが故に労働者国家の労働者は国内の低所得層を結束し、プロ独裁を基礎に帝国主義世界打倒の世界革命の根拠地をして自己を位置付けることによって始めて、政治的過渡期を内在的に止揚する方向で乗り切れるし、乗り切らねばならない。

② ところで、中論争を労働者国家の社会主義的発展の不均等から解くことは必要である。

だがそれにとどまらず、何んの解決も与えない。確かに不均等発展はある。だがいずれにしても階級対立は激化する。

正に中論争、これは如何に止揚するのかわか「左」右の論争と闘争を形成しているのだ。だが他方で、労働者国家群の世界史的登場は、帝国主義世界に規定されると同時に帝国主義を規制する。

それは帝国主義の世界市場が狭くなった事柄に主因をおくものではなく、主に政治的側面である。

現代修正主義を内部に胎みながら（それも、歴史的過渡期に於いては、極く当然である。資本主義に於いてプロレタリアートも改良主義に毒される一時期が不可避に登場する如く）も労働者国家は極く当然である。その土台は資本主義とは異なり、労働者階級が権力を掌握し、政治的に、軍事的にも武装し、各国毎に閉じ込められ、分断されたプロレタリアートをその内部と外から統合し世界的不閉結へと客観的には飛躍せしめたことである。

即ち彼等の世界観―共産主義の実現を経済的につけ知らせたのであった。彼等

PBはかかる各支部、各級機関の直接の活動から離れ、戦略の下での理論政策、諸計画、人事等一切の階級形成―党形成の最高基本問題を解決し、理論的、経験的に卓越した少数の常任職革によって構成されねばならない。

書記局はPB直轄の執行、行勢機能を有し、各級各支部の任務を執行せしめ、行政する。

第四節 現代革命と組織論

一、現代革命と組織論の諸前提

五〇年代―六〇年代前半を経て現在階級闘争の転換が進行し指導の転換↓指導部自身の転換が叫ばれている。だが進行している事態の本質について、叫んでいる主の本人は深く把みとっているか。少くとも、アレコレの経験的事実（世界的にも、国内的にも）はそのことを明白に物語っている。だが何が根本的に進行し、何が破綻し、何が近づき、何と我々は、全人格、全存在をかけて闘わねばならないのか。

「何をなすべきか」正にこの事が提出されねばならぬ。大胆に破局は近づきつつある。準備しなければならぬ。一切の準備を断乎として提出しなければならぬ。

I、II、IIIを通じて我々はIV章を完成させるに至った。だからそのことを再度まとめ整理し、本題に答えよう。

現代の労働者国家の下部構造、そして、現代帝国主義の下部構造―上部構造、その上に立っての過渡期世界総体の階級闘争の定立が必要である。

これを基礎に現代革命の型と世界革命戦略―世界党、及び組織論が定立される。そしてここから現代修正主義・現代無政府主義の自然発生性と社会排外主義への転落は論証されねばならぬ。かつ、自然発生性への拝跪としての上からの職革型組織の否定、世界党の否定が惹き起されることも論証される―即ち解党主義が。

労働者国家では、

① 社会主義的生産の原蓄の強さは、地理的、人口の増大、反革命に対する軍事的要因も加わって、その限界をパクロし、労働者人民に経済的負担と制約を起し、ブルジョア社会の母斑は、階級対立を顕在化させずにはおかない。

の帝国主義の延命、生産の集積からの超巨大金融独占を基礎にしての超巨大な多数の労働者のブルジョアジーへの反抗に歴史的即自的であれ、新たな高次な目的意識性の萌芽を与えた。

新たな過渡期世界特有の自然発生性―目的意識性の萌芽とは何か。それは、労働者人民が、即自的に「国家」と「国民」を越えたことである。

即ち分業社会そのものの廃止こそが彼等が人間に、人間と人間の自由な結合、自由に生産力を統御出来る共産主義への道であるという、自然発生的、経験的意識を与えたのである。

この労働者階級の新たな自然発生性、このことは全世界の労働者に共通であり、後進国でもそうであり、かつ労働者もそうである。（何故なら、権力を握っているとは言え帝国主義の鎖から完全には解放されていず、ブルジョアイデオロギーを闘わねばならぬ存在であり、帝国主義を打倒することを通じてのみ、精神、肉体労働の分裂等から解放されるからだ。）

人間の意識に於ける浮遊、換言すれば、帝国主義が世界の半分以上を占め彼等を規制している以上、又彼等が低い生産力の発展段階を抜け切れないが故に、諸分業がまだ残存している所にこそ、自然発生性は存在するからだ。生産関係に於ける諸分業、即ち帝国主義世界に於ける、資本主義的分業、労働者国家に於ける諸分業と残存する資本主義的分業との癒着及び過渡期の国家、その社会の幻想共同性、これ等は世界の階級闘争の自然発生性の質と目的意識性の質をより現代的なものとして高次元に引き上げる。

資本主義的分業、及び労働者国家の諸分業と残存する諸ブルジョア的分業に土台において、特異な自然発生性への拝跪したブルジョアイデオロギーが形成される。これこそが現代修正主義―現代社会排外主義の物質的土台であり、イデオロギーの質である。

帝国主義から、帝国主義内部の現代修正主義が生まれ、独立の基盤から生まれながらも、世界階級闘争を通じて結合され等質な（ブルジョアイデオロギーが社会主義イデオロギーか、その中間の世界観はない。）ブルジョアイデオロギーとなる。

共産主義者は、現代世界とプロレタリア世界革命戦略を放棄し、帝国主義と自国の反動的層（階級）に武装解除すればブルジョア・イデオロギーに拝跪する。もし

て、その教条からのアンチは、別の幾つかの道路、それは主に教条主義そのものの、及び無政府主義を経て、ブルジョアイデオロギーに拝跪する。反帝反スタ派は後者の道を行く。

③ 高次の自然発生性、これは他方でそれに結びつく、高次の目的意識性の萌芽であり、高次の意識性がプロ世界革命によって与えられ、結合されるなら、巨大な力を形成する。まさに、かかる高次の自然発生性目的意識性の萌芽は、労働者国家そのものと、その自然発生的諸活動、及びこれらと結びついた、労働者人民の広汎な戦闘的大衆組織及び解放区となつて現われ、かかる諸陣地―根拠地を基礎に、全世界の広さと深さをもつた攻撃的階級闘争が高次の目的意識性で武装されたプロ世界党に於いて攻撃的プロ世界革命へ準備されつつあるし、準備しなければならぬ。

④ ところで、帝国主義と帝國主義者の方はどうか。帝國主義はますますその法則を貫徹し巨大な超金融独占体を形成し、全世界の市場を分割し、今又再分割戦を展開しようとしている。だが帝國主義の経済法則の発現は変容され、屈折し、引き延ばされ、極限的にそれを純化し発現する。何故か。帝國主義者は市民社会の内外の労働者人民の、彼ら自らの経済法則が生み出したことと結合し、諸根拠地―陣地を敵にまわし、支配しなければならぬ。

彼らは巨大な勢力の登場に後退し（ブル民の枠内での政治活動の保証、若干の賃上げを許容する）支配しなければならぬ。労働者国家の根拠地と結びついた、労働者人民の諸陣地と新たな高次の自然発生性、攻撃的階級闘争を抑圧し、支配するためには、経済的利益が許す限り、その極限までの國際的にも協調せざるを得なくなる地点に追い込まれた、彼らは互に政治的には自己抑制し、彼ら帝國主義の共通の防衛にめざめねばならぬ。

かつてロシア革命以前は、それは前提であり、彼等はそのことに自由であった。ただ国内の労働者人民を支配すればそれよかつたのだ。だが今日は全く違ふ。その前提は崩れ去つたのだ。

彼等が自覚めると同時に彼等は自己矛盾に陥いざるを得ない。強い帝國主義は弱い帝國主義の政治的弱さを補強してやり、植民地階級闘争に反革命は（直接経済的利益に比例しない時もある。だが後進國總体に占める経済的利益からみれば、それは小さな負担である）しなければならぬ。

これは米國の階級闘争に於いてもそうである。しかし、米國の労働者人民の自然発生性こそ、或る意味で最も巨大で深く、高次の目的意識性が結合されるなら、攻撃的革命は充分実現し得るし、その意識性が与えられないならば、戦前のナチスをヨリ越えた狂乱の反革命帝國主義國家へと姿ほうするだろう。

丁度、彼ら与えられた位置は戦前の賃労働者・人民の位置と同じである。米帝に相対的な劣位な日本、独、仏等の帝國主義の現代帝國主義の現代修正主義の社会排外主義への転化こそ、最も巧妙に形成される。

即ち、米帝の反革命反対を環にして、反米民主主義國家の建設である。彼らは、現代世界と現代帝國主義の總体の諸連関を把えないが故に、又、そのことは、彼ら自身の下部の民族主義、改良主義、排外主義、合法主義への拝跪した理論的表現でもあるが、自國帝國主義のMと帝國主義のなし崩し市場再分割―帝國主義戦争の準備を見落し、免罪し、帝國主義に屈服し、和解する。

現代の社会排外主義の特質こそ、カウツキー・ベルンシュタイン等と同様に、超帝國主義を基礎にしながらも、労働者國家の現代修正主義者と癒着しているが故に、そのことを通じ、「反革命反対」をマルクス主義的に粉飾し、排外主義へ至るところに、まさに現代の社会排外主義たるユエーンがある。

前者は、他帝國主義との直接の関連で、後者は労働者國家と革命闘争とを背景に間接的媒介を経て、共通に民族主義―排外主義に至る。反帝反スタ主義とはなにか不可避の「人間」世界の運命的なものとして把握、それを現代のマルクス主義だと勝手に観念し、マルクス主義を否定する。だから、過渡期世界が生み出した、現代的寄生である。

現代革命は、徹底的に攻撃的に完成された戦略と分離―結合する党の型をもつて、世界党の指導の下、諸陣地を基礎に闘いとらねばならぬ。

以上の、諸前提をふまえた上で、現代革命との関連で組織論を論じよう。

二、八現代帝國主義市民社会とわれわれの組織論

(1) 合法的な前衛政党和その影

他方弱い帝國主義は政治的にはそれに協調を余儀なくされる、それはあたかも一見、政治的従属の如き現象も呈する。だがこれ等の事柄は彼等双方において本来の経済政治を歪めている。

全くの自己矛盾である。しかも経済的にも、双方の負担と協調は彼等の利益が犯されない限り、（未来、広さ利益の質まで含んでのそれであるから、特殊に利益の範囲を越えたかの如き現象も起る）この等の帝國主義の法則が特殊な現代帝國主義政治に媒介された変容し、発現した形態こそが、E E C「國際独占体」I M F体制・國連、同盟、反革命「援助」等である。

ベルリン、朝鮮動乱、ヴェトナム等の各國帝國主義の自己矛盾した対応である。あるいはなし崩しの反革命の機能を保存させた市場再分割戦等である。

変容し抑え込まれ引き延ばされ、屈折しても、帝國主義の法則は不変であり、特定の時間と諸環境を経て、矛盾を全面的に発現させざるを得ない。他方帝國主義は各自のプロレタリア人民を反革命抑圧すると同時に、現代修正主義者を帝國主義政治に引きつり込み、ブルジョア政治に転落せしめた。

そして現代修正主義者は国内の反動的層と妥協し、和解した。帝國主義の不均等発展の拡大深化、なし崩し的であれ、市場再分割戦の全面的進行はかかる帝國主義政治の現象的、擬制的、超帝國主義政治の時代を終末に至らしめ、崩壊の局面に突入させつつある。

⑤ これらの時代こそ正に共産主義の高次の目的意識性が世界党の建設をもつて高次の自然発生性に結合しなければならぬ。

正に高次の目的意識性の中心は我々の世界革命戦略―プロ國際主義―戦術の下での現代世界革命を同時に擬制的帝國主義政治の崩壊の時点に向い、徹頭徹尾攻撃的階級闘争として闘い抜き実現することである。その過程の環は明らかになし崩しの市場再分割戦の激化に対し各國帝國主義の軍事外交政策との非和解的闘いを基準に全ゆる階級闘争を共産主義に向け組織することである。

ところで現代の高次の自然発生性に拝跪した、小ブル改良主義は現代修正主義、社会排外主義は如何に登場するの。

その中心的共通点は、反革命、民主主義防衛、民主主義的民族國家の建設―民族主義・國民主義、これである。

彼らのかかる戦術に於ける全くの合法主義、共産主義を民主主義と合法主義に押し下げる、裏側には、労働者國家内部の矛盾を看過し、労働者國家内部の現代修正主義者と手を結び、これらの無限の共産主義への発展と階級闘争の消滅という史観の上での、帝國主義の法則の自動消滅の願望とが潜んでいる。これは小ブルの労働者の高次の自然発生性に拝跪した姿である。

これは米國の階級闘争に於いてもそうである。しかし、米國の労働者人民の自然発生性こそ、或る意味で最も巨大で深く、高次の目的意識性が結合されるなら、攻撃的革命は充分実現し得るし、その意識性が与えられないならば、戦前のナチスをヨリ越えた狂乱の反革命帝國主義國家へと姿ほうするだろう。

丁度、彼ら与えられた位置は戦前の賃労働者・人民の位置と同じである。米帝に相対的な劣位な日本、独、仏等の帝國主義の現代帝國主義の現代修正主義の社会排外主義への転化こそ、最も巧妙に形成される。

即ち、米帝の反革命反対を環にして、反米民主主義國家の建設である。彼らは、現代世界と現代帝國主義の總体の諸連関を把えないが故に、又、そのことは、彼ら自身の下部の民族主義、改良主義、排外主義、合法主義への拝跪した理論的表現でもあるが、自國帝國主義のMと帝國主義のなし崩し市場再分割―帝國主義戦争の準備を見落し、免罪し、帝國主義に屈服し、和解する。

現代の社会排外主義の特質こそ、カウツキー・ベルンシュタイン等と同様に、超帝國主義を基礎にしながらも、労働者國家の現代修正主義者と癒着しているが故に、そのことを通じ、「反革命反対」をマルクス主義的に粉飾し、排外主義へ至るところに、まさに現代の社会排外主義たるユエーンがある。

前者は、他帝國主義との直接の関連で、後者は労働者國家と革命闘争とを背景に間接的媒介を経て、共通に民族主義―排外主義に至る。反帝反スタ主義とはなにか不可避の「人間」世界の運命的なものとして把握、それを現代のマルクス主義だと勝手に観念し、マルクス主義を否定する。だから、過渡期世界が生み出した、現代的寄生である。

現代革命は、徹底的に攻撃的に完成された戦略と分離―結合する党の型をもつて、世界党の指導の下、諸陣地を基礎に闘いとらねばならぬ。

以上の、諸前提をふまえた上で、現代革命との関連で組織論を論じよう。

同解放派の破産は組織論の破産以前の彼等の全く曖昧模糊とした、レーニン主義の反撥からの、非科学非戦術的戦術的陳外論にその根拠がある。かかる革命論は組織の型など一向かまわぬし、適当に調子のいい所をうるつければいいようになっている。そのような陳外論では、現実の組合主義・改良主義・排外主義が来るべき革命に何故犯罪なのかを説明することもできない。

彼等の反撥しているのは反スターリン主義であり、現代修正主義であり、モローとした反スタ陳外論を唱えるのではなく、現代修正主義の物質的基礎と土台そのものの変革の革命戦術を考察すべきなのだ。その現代無政府主義者、革マル、中核は、一応下からの党の型をとっていいかないかの如くである。だが、その組織の型は、社青同解放派の陳外論の論理的必然性と同じく、徐々に、内部から下からの党の型へ変質するのだ。彼らも又、スターリン主義に党派性は示し得ても、帝国主義と改良主義、組合主義、排外主義には、陳外論では根本的地点でこれらに武装解除している。

ソ連共産党も又、全く同じ合法主義である。階級対立に対して、一切を国家機関にゆだねることはできない。政党による党派闘争こそ思想を純化するのだ。国家活動と党活動の二重化は、ここでも同じく真理である。又、ボルシェヴィキが党内闘争を禁止し、他党の活動を非合法化したことから、組織論上では危機は始まった。戦略に於ける誤り、そして上からの党は、その矛盾を下を押ししながらも、結局登りつめさせ、国家活動に一切が解消され、矛盾は国家を通して、まさに上から官僚的に抑圧された。このことは、党自身としては、下に拝跪したことである。だが、我々は解放派の如く、組織論のみをとりあげ、レーニン主義にスターリン主義の根源を求めようとしているのでは全くない。まさに具体的な階級闘争過程での過渡期観——戦略論こそが問題なのであり、組織論そのものは全く独自ではあり得ない。それが、戦略論が誤謬していることによって組織論は結局下から合法主義へと転落することを指摘しているのだ。

世界革命の第三の道・派は、今、実践の中から世界党と決定的な上からの党の型を確立しつつある。劉少奇は、帝国主義と自国の富農ブルジョア、上層プロのブルジョア意識に拝跪した。毛沢東派が真に世界革命の根拠地に中国革命を導かんとするなら、第一に世界革命戦略を修正し、第二に最も規律ある国家機関活動とは相対的に独自の、かつ赤軍とも独自に、自らをこれらと分離し、中国共産

かかる攻撃型闘争の質はいくらでもなく攻撃性、暴力性である。このことは機動戦を黒人、暴動、日本全学連反戦の砂川……佐藤訪ベトナム阻止闘争の過程でも明確にした。かつヴェトナム、南米などの解放ゲリラ戦方式である。又中国文化革命に於ける人民の武装闘争（プロ独運動への自然発生性の萌芽）も同質である。

そして、陣地戦は三池以降、東交、早大、明大闘争として明らかになりつつあるし、官公労への第三次合理化攻勢はそれより巨大化するであろう。かかる目的意識性への萌芽はいたるところで顕在化しつつある。現代修正主義と小ブル改良主義の戦略と合法党の型はこれを指導できないばかりか、これと対立し、自然発生性にますます拝跪し、彼らをバリエードの向かい側に追いやる。

前衛党はかかる、世界的に国際性暴力をもった戦い、機動戦の自然発生性に拝跪しブルジョアイデオロギーにその意識を染めあげてしまおうのではなく明確にその萌芽を現代革命の攻撃的型の問題として自覚しなければならぬ。

勿論——帝国主義世界の中で日本資本主義の構造段階に規定された諸階級の動向として、これらのことは位置づけられるが、これは根本的に世界的な新たな革命の型の問題として扱えられねばならぬ。

以上の諸結論を明確に規定するためにはやはり最初に述べたごとく、現代帝国主義市民社会に於ける階級闘争に於ける自然発生性の萌芽と、目的意識性について、現代帝国主義国家との関連で述べねば全くあまいまいになってしまう。その問題には二つの前提をおく。

一つは市民社会と国家との関連における自然発生性と目的意識性との関連及びブルジョアイデオロギーについては前述したので、それは前提にする。二つは攻撃的階級闘争とブルジョアジーの、後退の歴史的高次性についても述べたのでこれも前提にする。この問題に於ける非常に大雑把にしか述べていないが、何よりも我々の歴史的諸経験が雄弁に物語っている。このことも市民社会と国家の関連が理解されていけば、はつきりと理解できるはずである。

① 資本主義的分業の社会化（生産の集積）過程における産業資本主義、古典的帝国主義（ロシア革命まで）、現代帝国主義の諸段階に対応する、国家——民主主義（形態）と民族の関連をその性質相異を確認する必要がある。産業資本主義は諸産業資本の競争の時期である。だから、国家への政治の集中

党に組織し直し、これらに結合しなければならぬ。

我々は、ここで共通な中心が世界革命戦略に於ける誤謬・現代的修正が合法的大衆下からの党の型と深く結びついていることを確認すればよい。そして、まさに現代の労働者人民の高次の自然発生性に拝跪していることの事実を見ればよいのだ。

② 現代帝国主義市民社会と階級闘争の型・自然発生性の質

現代の労働者人民への自然発生性の拝跪した姿と、その組織の型は今概観した。それでは、かかる自然発生性の萌芽——攻撃型階級闘争等の萌芽の根拠はどこからくるのか、何に根拠をおくのかこれも又、攻撃型階級闘争も現実には現代帝国主義市民社会と、その国家に媒介されて、その自然発生性は確定される。我々は、Ⅲ節、2章の項で詳しく、市民社会と国家との関係に於ける自然発生性及びブルジョアイデオロギーの内的連関を論じた。今も又、この基本的な諸連関は根本的に変化しない。

結論から先に述べよう。

自然発生性の質は、攻撃性・暴力性と国際性である。それへの拝跪は合法主義・民族主義である。かつ、その型は、武装闘争を主軸とする攻撃型であり、これは街頭的機動戦や職場・学園・農村に於ける陣地戦に於いても同様である。

現代革命の型は、このように、後進国民解放社会主義闘争の場合は、もはや機動戦・陣地戦は結合され、根拠地戦——正規の革命戦争に発展していることから、国際的機動戦を軸に、各国の個別陣地戦が結合されるのだ。世界党と各国の上からの型をもった少数精鋭の前衛党が、それこそ巨大な諸階級の組織を媒介に結合し、かかる諸階級組織の武装を実現させ、同時に世界革命と内乱——蜂起を経るのソビエト国家創出の方向である。

そして、これらに対して実態としての、国家権力、政治形態と、国家——普遍としての諸階級の生活の表象を区別し、かつ、国家——普遍と、国民・民族のブルジョアイデオロギーとを区別し、普遍に対して、共産主義の実現——最大限綱領を、かつ権力と諸社会主義制度がブルジョアジーの支配の道具であり、かつ、国民・民族に対して、労働者の革命的独裁（多数者の民主主義政体、コミニューン）と世界プロレタリアートの団結——プロ国際主義のスローガンとを提出し続け、それを普遍に実現し権力を打倒する。

階級闘争は労働者階級の社会的形成は脆弱で、又その意識的前衛の理論の未完成故に、突発的一揆主義的であった。被抑圧無産者運動の国際主義、あるいは、新たな国家も無意識的で、コミニューンも崩壊せざるをえなかった。勿論マルクスはそれを総括し、分析していったが。

古典帝国主義段階に到達することによって生産の社会化と市民社会は明確に二大階級に分裂し、支配階級としてのブルジョアジーは国家権力を掌握し（だが、現代帝国主義国家権力の彼等の掌握力より弱い）権力を階級支配の道具として暴力的なものに再編成した。かつ、市民社会の諸支配ヘゲモニーはかかる権力に統合され中央集権制を確立した。これは生産の競争の形成から社会的独占的形成（——金融独占資本の確立）に物質的根拠をおく。市民社会の国家の二面的あり方と国家との関連は、ここで完全に民族、国民となる。

かかる民族は帝国主義の市場再分割戦を通じ、民族主義、排外主義となり、他方国民は君主制から代議制民主制（民主共和制など）となる。中央集権制を通じて階級は帝国主義権力に統制、統合されてしまう。

広汎な即時的団結を確立しながらも、労働者階級は帝国主義の市場再分割戦を経て、始めて市民社会を越え、世界的プロレタリアートになる条件を与える。

ボルシェヴィキ党はこれに対して、この過程に於ける労働者の団結と党自身を耐え抜き、国家——民主主義に對し、権力のバクローと真の民主主義（普遍）、最大限綱領、とプロレタリア国際主義——世界革命を提出し、プロレタリアートの即自性を対象化させ成功させた。だが帝国主義の政治的崩壊を経るときに於いてのみ、その過程におけるブルジョアジーの積極的攻撃に受動的に耐えぬいて、革命が実現されたのだ。過渡期世界ではどうか。帝国主義は、超巨大金融独占資本に発展し、自由市場は極度に狭められ、生産の社会性は最高度に発達した。金融独占ブルジョアジーは完全に国家権力を独占したのであった。金融独占ブルジョアジーの下により強い中央集権的支配は、全ゆる市民の社会ヘゲモニー装置を統合——統制した。市民社会は重じょう的なブルジョアジーの支配によって統合され

た。

これが、構革・日共自主独立派・トリアッチなどの「現代民主主義」の根拠である。重じょう的、濃密な中央集権的の議會主義政治形態は民主主義をして完全にブルジョア民主主義に転化せしめた。だがこの時、他方での国際的、国内的に新たな矛盾が激化していた。

即ち、労働者国家の成立を以って、国際的には強大な帝国主義への、弱い帝国主義の政治的経済的依存の協調を通しての、労働者国家への対抗であり、強い帝国主義の弱く、濃密な中央集権的の議會主義政治形態は民主主義をして完全にブルジョア民主主義に転化せしめた。だがこの時、他方での国際的、国内的に新たな矛盾が激化していた。

古典帝国主義段階からみて、特異な国際的諸関連を通じ、市民社会の民族への外化は、強い帝国主義への、即ち、反米民族主義と労働者国家に対する反共主義へと外化した。又、市民社会は反労働者国家、アメリカカ大国主義を外化した。

④ このことは、現代過渡期世界特有の市民社会の市民社会の精神的な外化の形態であり、古典帝国主義の膨脹期のそれでもない。

⑤ かつ、このことは、労働者階級の意識に於ける自然発生性への拝跪を、米帝内部では、労働者国家の現代修正主義と、結合して、「反革命・民主主義国家」・民主的國家形成、米大國主義へと拝跪する。他方、弱い帝国主義の自然発生性は、反米・「反革命・民主主義國家」の形成に外化する。

⑥ 現代修正主義の革命の型について、権力のベクトル、現代中央集権民主主義政体を通じて、かつ、陣地に於ける生産の規制からブルジョア・ヘゲモニーの規制を通じての、その両者を結合させ平和革命の実現となる。これらこそが、攻撃的陣地戦闘争の自然発生性への拝跪である。この現実に拝跪する。理論は觀念に過ぎない。何故なら、資本制分業生産様式の上層構造、及び精神的表象を

そこから、権力に対する非武装、無バクトロ、肯定、そして権力・政治形態を通しての掌握、諸社会制度の規制による、民主権力の基礎獲得になるのである。我々は攻撃的武装闘争形態、陣地の獲得、あるいは権力としてある一定の政治活動の獲得した環境・条件としての自然発生性目的意識性の萌芽を、権力と國家との区別を越し、従って共産主義M、としての意識性に結合転化しなければならぬ。

このことは、国際的連帯活動を背景に、権力と革命的改北主義の立場で非和解に闘いつつ、普遍に於いて最大限綱領、プロ國際主義（全人民の利益）を提起し結果、同時に、他方で権力政治形態の階級性を全人民的政治ベクトルし、かつ自然発生性への拝跪「反革命」民主主義國家への拝跪を弾劾していかねばならぬ。

これらの把握を通してのみ、最も攻撃的に、国際的、後進國革命人民戦争、労働者國家のプロ独と結合し、機動戦による正面攻撃戦と政治形態を通じて、陣地からの側面的下からの陣地戦が武装闘争として結合され、その過程を通じてコンミュニシンの大衆組織の広汎な単一に統合された大衆の戦闘的権力の萌芽が、内乱に打ち準備、形成される。反戦闘争や反合闘争、賃闘、授業料闘争等は、かかる攻撃的革命的陣地戦、権動戦の一環に位置するのである。

三、八目的意識的攻撃階級闘争の推移と我々の組織の型

現代帝國主義市民社会と國家、及び権力政治形態における自然発生性、それへの拝跪、及び目的意識性、そして革命の型が位置づけられた。このことからみた場合、小ブル改良主義や現代修正主義の下からの合法党の型の型は、全く突うべき存在であることは明らかだ。

我々は以上の世界革命戦略、國際主義のストーリーガン、同盟軍及び戦術形態、かつ権動戦、陣地戦とその結合を通してプロ独形成の現代革命の型を意識的に実現していくためには、徹頭徹尾、労働者人民から分離した、上からの中央集権的型の組織を實現しなければならぬことも又、明らかだ。

しかも、それは絶対的に世界党に従うものとして獲得されねばならない。我々は、以上のI、II、III、IV、V章の内容を以って、世界革命の第三の段階を構築し、毛沢東派と「行動の統一」と政治活動の自由の原則の下に彼らとの共同闘争

土台と切り離し、現象の現代性から理象的の革命を掃蕩させているからだ。まさに実態は合法議會主義、改良主義、組合主義の現代的変容でしかなく、全く新しさだけの、全くのブル理論のマルクス主義的粉飾である。逆に現代革命の基本問題が土台と如何にとり結ばれ、土台そのもののおきかえとの関係での、権力打倒の實現にむけ現代市民社会と國家の現代的特質は、それが媒介点となって、前者の事柄が實現されるものとしてあるかを定めることによってプロ政治革命の型として定立される。

従って現代革命の基本問題は、このようになる。即ち、現代帝國主義市民社会内部の攻撃階級闘争の諸団結形態諸大衆的戦闘組織を如何なる諸階級闘争の発展段階に応じて、闘争形態、団結形態を付与するかを、國家権力自身とそれと結ばれて、それに民主主義政体を媒介に中央集権的に統合されている市民社会内部に網の目の如くはりめぐらされた諸制度諸ブルジョアヘゲモニー装置に対して、かかる市民社会内部から表象される「普遍」共同利害、の外化「國民」「民族」に対して如何に把え、定立するかである。

かかる問題に対して、土台・権力・イデオロギー形態の諸関連を土台から切り離して考える自然発生性の諸条件とそれへの拝跪が現代に如何に登場するかは明らかになった。

この問題は、以下二つの問題として提出される。

① 実態としてある諸戦闘的大衆的知識が、権力とその市民社会にまで下りたものまで含めての諸政治形態との関連で、どのように認識され、如何なる意識・闘争形態が与えられねばならぬか。

② その際、それは闘争形態・団結形態に限られず、それにとどまらず、それを担う労働者人民の自然発生性意識、即ち「國家」「民族」に表象されていくものとして、どのように定立されねばならないか、である。

現代修正主義者の根本的現代革命論の合法主義的の型、及び世界党の否定の誤ちとは、現代的な自然発生性の質と形態とを、土台と切り離し、それ故に権力政治形態に於ける階級性と表象としての國家の普遍性全人民の類性を混同し、それ故に権力政治形態における階級性を無階級性にとり違えたことである。これらの混同・誤ちは、全ゆる「左翼」をつき当らせる性質のものであるが。

の過程で革命的に変質せしめ、ソ連現代修正指導部とその亜流共をコッパミジンに打倒し、輝かしい現代プロレタリア世界革命の真紅の旗を第五インターに高く掲げねばならぬ。

本稿(1)のまとめ、絶対に確認しなければならぬこと。

A 基本的視点を確立したこと

I 我々の世界革命戦略—プロ國際主義—党の型実践論を、
(1) 我々の現代過渡期世界の階級闘争が帝國主義世界と労働者國家群によって成り立ち、世界は帝國主義の運動を軸にブル・プロの非和解的階級闘争を展開し、しかも、労働者國家の存在を通して、その階級闘争は攻撃階級闘争を自然発生的に内包している。他方でのブルの後退。

(2) 帝國主義世界の破綻・革命の条件の基本ポイントの設定を通して世界同時革命戦略、攻撃階級闘争に対する自意識性—現代革命の型は根拠地型、攻撃型、國際同時等質単一型の革命の型である。市民社会とプロ國際主義の必然性

(3) 党は戦略—戦術で結集しその大衆との有り方は分離—結合、中央集権、職革型、全國新聞がその形態、上からの組織と党内闘争を杆槓とした四つの闘争

を、右記三つの観点で貫いたこと。

II 労働者國家の評価の観点

(1) 資本主義から共産主義への政治的過渡期

① 経済発展の段階、発展のスピード、その限界—階級対立の必然性、プロの革命的独裁を基礎に帝國主義打倒、世界社会主義の樹立の政治的解決以外に道はないこと、その他の実践的、現実的解決は全くないこと。

② だから労働者國家の共産党は世界革命戦略で武装し、コンミュニシンの四原則を貫徹し、プロ独を形成すること。

(4) を抜かした場合は、階級対立と政治的解決に対して、実践的主体的解決を抜きにした（自らの世界革命戦略の不在）アレコレの、その美化・合理化やその反対の絶望論に陥る。國際権威主義の表裏

(4) 規定論争の戦略論と切り離された場合の不毛性

III 現代帝國主義の評価の観点

- ① 帝國主義そのもの、その運動法則の—労働者国家の不足と世界攻撃階級闘争に—発現が屈折、歪め、引き延ばされたと現われる。そして、破局に於ける巨大な爆発とその純化
- ② 種々の現代修正主義経済学

過渡期世界から起る特殊な現代的政治経済現象を過渡期観を抜きにするところからの、マルクス主義経済学の修正によって説明しようとするところにある。

- ③ 経済学に於けるレーニン、帝國主義論の党性性が貫徹されねばならぬ。

IV 攻撃型世界階級闘争の評價の視点

- ① 帝國主義の運動を機軸に有機的全党性統一性をもっている。その演進の—型としての独自性、及び先進階級闘争の機軸性
- ② 帝國主義—自国根拠地に結びついた陣地戦機軸戦の結合から内乱後進—自国根拠地—人民戦争
- ③ 労働者国家—プロレタリア運動と党のその世界革命に向けての指導
- ④ 各国バラバラ論及び機械的他の一者への従属論のマヤカン性、修正主義、教条主義

V 現代革命の型とその意識性の評価の観点

- ① 根拠地攻撃—世界同時型
- ② 根拠地に基づく機軸戦陣地戦の結合とその武装「政治」闘争から内乱
- ③ この場合の意識性と自然発生性への拝服の現代革命論の分岐点である。
- ④ 土台—市民社会と国家との関連に於ける原理的把握と現在の適用がカギである。

VI 世界党・党の型、実践論

- ① 現代市民社会と闘争の陣地、攻撃性への拝服が下からの合法的大衆的党へとなる。
- ② 崩芽は、戦略—戦術—大衆からの分離—結合の党の性格と職掌、中央集権全副新聞を形態として、上から党闘争を保証しつつ、四つの闘争を展開することによって意識性に転化される。

B 不明確・弱点、残された領域

- I 労働者国家の歴史—論理の実態分析
- (a) ソ連、東欧、中国
- (b) 明確な規定性

II 現代帝國主義の歴史的—論理の実態分析

- III マルクス、レーニンその経済学への方法と修正主義経済学者との相異
 - IV 市民社会と国家との関連及びイデオロギーについてのより精密な確定
- これが組織論の前提になる。かつ疎外革命論のマヤカン性のバクロともなる。

V 毛沢東主義、我々の実践的立場は鮮明。後は彼等の分析と規定である。

- VI 核—威力が共倒れを内包しても、武器は武器、誰れがどのように使用するかが問題。

VII 戦略の規定性

- (a) 最大限綱領と革命に於ける過渡期—宣伝とバクロ
- (b) 我々は最小限「改良」闘争をこのように規定していいのかわい
- (c) (a)、(b)をまとめて、党と最大綱領
- (d) プロレタリア獲得としての統一戦線とその内部での党派闘争、党と戦術の総体としての論理的関連とその一環としての位置を明らかにする必要あり。展開が弱い。

VIII VIIの(二)について現代革命と組織論(三節四)に現代的性格を通じて付加されねばならぬ。

プロレタリア世界—日本革命の道と我々の緊急な任務

革命的昂揚から革命情勢の

過度期の幾つかの問題

—自然発生性と目的意識性—

I 危機の時代の革命家の党に対する価値観

一昨秋以来の世界—日本階級闘争は明確に革命的昂揚から革命情勢の過渡期に突入しつつある。換言すれば革命的左翼が現代革命に於いていかなる立場と実践的能力を博し得るかが根本的に問われる時期である。正に権力—党—大衆の關係が10・8—11・12以来一昨秋に到る量的拡大としてあった次元から、決定的な新たな政治領域に飛躍しつつある時点にあるが故に、党派にとって過去の経験や政治的リアリズムのみによっては飛躍をなし切れず、真に革命的な政治組織理論と「勝利か死か」を賭けた真に目的意識的な創造的実践能力が欠落した場合、大衆の巨大な自然発生的分解の大波は乗り切れず、大衆の自然発生性を反映して分解の危機を形成する一時代である。

だが権力—党—大衆をめぐる過程が、党派の組織にとって分解の危機を惹起すること如何に憂いてみても、そして又党の一枚岩的団結を無内容に時んでみても、問題は一步も進展しないし、そればかりか組織の無気力と宮廷政治をバクロせしめるばかりである。それ故この一時代の革命家にとって最も革命的な目的意識性とは理論と組織との結合を、党としての闘争の次元に留まらず党の為の闘争の次元にまでも容赦なく貫徹することではなければならない。

即ち党内闘争の容赦ない闘いを通してのみ、党は純化され、強じんな一枚岩的団結を獲得することができるのである。

「平和時は党内闘争や分派闘争をいくらやってもいいが革命時においては一切のことを水に流して党に結集しなければならぬ」なる、自然発生性の結集点—組織日和見主義的傾向こそを根底的に一掃する必要があるのだ。

「党内闘争の非要協性」と「党の一枚岩的団結」この一見矛盾する革命家の遭遇する集中的時代としての「飛躍の時期」にあつて、我々はマルクス—レーニンの立場「……党内闘争こそが党に力と生命を与える。党があいまいではつきり区別のある相違をほかすことは、その党の弱さを示す最大の証明である。党は自身を純化することによって強まる。」を再び把え返していかなばならぬ。

II 権力—党—大衆に関する大衆の自然発生性

それでは権力—党—大衆の連関に於いて諸党派—同盟内の自然発生性に対する現代革命に於ける、しかも「革命的昂揚から革命情勢への飛躍の—過渡期での—諸形態」をみてみよう。

現代過渡期世界の帝國主義國家がその現代性として、侵略と反革命の不統一性を強制され、排外主義的結集力の弱さを内包し、かつ、帝國主義の不均等發展性を企め引き延ばさざるを得ないところからの経済危機の内攻と「平和時からの大衆の社会生活の破壊が累積していること」は既に指摘した通りである。更に、かかる現代帝國主義國家の弱点は平和時からの諸階級階層の分解と利害の対立を深化せしめ國家の統治能力の後退に対して大衆自身が國家の枠でありながらも自然発生的に自衛武装するという。一見高度に発達した帝國主義市民社会に逆説的に巨大な武装集団を登場せしめるのである。かかる帝國主義國家の弱い環と大衆の自然発生的形態は、今、巨大な動向をもって登場しつつある。その集中的動向こそが、①沖繩奪還—安保粉砕の反「反革命」の昂まりであり、②全共闘—工場野戦会M等であり、③全ゆる集団のゲバ棒武装集団化と利害対立によるゲバ棒戦

による解決である。

そして、かかる大衆の高次の自然発生性の集約点は、ベトナム反戦、安保個別案の解体や個別闘争を通じて末端統治機構解体から、佐藤帝国主義政府打倒—中央権力機構攻撃へと集約されつつある。

だが最も決定的に危険なことは、中核派に象徴され、構改—代々木に到るまでが、かかる大衆の自然発生性に排絶し大衆の自然発生性の要素を過大評価していることである。

口を開けば革命的政治経済的弱点をいい革命の現実性をそこに確信しようとする。即ち、彼等はここで、

③ 沖繩暴動—反「反革命」性が権力打倒—世界同時革命に転化し、日帝ナチソナリズム—社会排外主義との闘争と自國帝國主義の打倒を抜きにし、

④ 軍卒の空共闘M、工場内の反戦派の工評運動や、これらの地域的結合を、永続的な中央権力闘争—武装蜂起Mに向けての武装や、党的結集を抜きに、即ソヴエト運動だと思ひ込んだり、同様に中央権力闘争の質とそれを闘う部隊に於ての、逆に個別闘争のなかでの中央権力攻撃の攻撃的陣地が礎かれるのに対し、個別闘争の徹底化が即中央権力闘争を支える陣地になると考えたりする。(個別闘争の革命的指導が中央権力闘争の攻撃的陣地の基盤を創出していても、即攻撃的陣地ではない)

⑤ 又かかる政治的闘争、経済闘争での自然発生的武装が、権力闘争に於ける攻撃的武装になると考えたりする。かかる自衛武装が機動隊の攻撃を打ち破った例は全くない。打ち破ったのは党派に組織された独自の権力闘争を意志一致した部隊のみである。かかる党によって組織された、大衆の自衛武装とは全く分離した部隊の武装した闘いと結合してのみ、自衛武装は攻撃的陣地の一環に位置し、しかも自衛的性格を転換せしめる。

⑥ 大衆の高次の自然発生性が、佐藤なし崩しフランズム政府と対立するが故に、「佐藤帝國主義打倒」のスローガンを与え、大衆を中央反政府闘争に動員すれば、いつのまにか政府危機—政治危機—権力闘争に発展すると考え、大衆を権力闘争に離脱せしめる政治的武装(暴力装置の暴力解体—二重権力の創出に向けての、臨時革命政府の綱領とその世界革命戦争、内戦、蜂起を領導する任務、及

び革命党によるこれ等を確認した突撃隊の形成等々)を全く欠落せしめること、等々の自然発生性の過大評価と、それへ拜跪するのである。

現代のラボーチェ・チェーロは、自己の目的意識性、反「反革命性」、個別闘争の全共闘—工評運動、自衛武装を、そしてそれ等の集約点としての反政府性を徹底的に押し進めれば権力に到達すると思ひ込んでいる。

現代過渡期世界での現代帝國主義國家の独特な弱点をあげつらい、革命の確信を種々な理論で粉飾している(全般的危機、未成帝國主義、安保体制、人民戦線政府、工場の党—陣地戦論)が、肝じんな党の意識性—役割り、党と大衆をつなぐ中間的政治組織等の問題に関しては、日共—構改—中核に到るまで「合法的な大衆政党」か、「上からの中央集権的職革型の党」や「工場の党」等の全く現代革命の型に対応し得ないものであり、その中間政治組織も、同様に合法的な「宣伝と組織」の機能しか持ち得ないのである。

革命を現実的に考えない、革マル—空想社会主義—現代の無政府主義者は、「政治の最高の質」としての軍事が常に問われる時代に於て、「軍事力学主義」に反対するが、彼らは機動隊の壁を「宣伝と組織」のみで打ち破れると思っているのだろうか。

III 戦闘的突進的集団の自然発生性

我々は、かかる他の諸政治組織を、その階級形成—党形成に於いて、現代の大衆の高次の自然発生性(攻撃性)に拜跪している潮流として規定しよう。かつ、我々と彼等の指導被指導の關係に於て、戦闘的突進的集団と規定しよう。彼等は現在の自然発生性や、自立Mの担いで—ノンセクトラジカル、反戦派や、全共闘指の先進的大衆の水準にまでなりさがり党の指導の論理ではなく、大衆の論理を論導部理しようとしている。

彼等の共通する根本的欠陥は、現代帝國主義の過渡期世界に現実された変容的側面や、現代帝國主義國家の弱点のみを見、帝國主義と國家の本質的運動(不均等性、排外主義、分断—暴力支配と秩序)が、過渡期世界に媒介されて、新たに高次の次元で発現していることの論理を見落し、それ故に、弱環をつくる戦闘を戦闘にまで高め祭りあげていることにある。このことによって、実は帝國主義論を修正し、國家論まで修正してきているのである。

「現代帝國主義—現代帝國主義國家と世界革命」に関する諸領域は、今や我々にとって現代過渡期世界の把握の方法をめぐる領域を一昨年第7回—8—3論文—一昨秋の現代帝國主義論を経てほぼ決着付けた。(八旭論文をみよ、仏論文の客観主義を批判せよ)そして我々は、8—3以来、その我々のプロ独—世界革命の実践的基準を、前段階決戦—世界党—世界赤軍—世界プロ統一戦線—世界革命戦争(政變型世界革命論)として確定し、40—21を前後し、その世界革命戦争の現在の基本型態が中央権力闘争—Mastとしてあることを確定した。

だが我々は攻撃型世界革命の基本軸を定めたものの、いまだそれを実践的階級闘争の諸戦術と党建設の体系化にまでは到らず、その限りでは現代革命の過去—最近の、この領域については、各人まちまちであった。

或る者は、未だロシア革命とレーニン主義を(二つの戦術—四月テーゼを、國家と革命、左翼小児病、コミンテルン第3回大会)そのままイメージして現実に適用したり、又或る者は、イタリヤ革命とグラムシを土台にしたり、或いはスパインをイメージして、独・仏の30年前後の敗北を総括しようとしていたり、いづれにしても、仏5月革命、黒人反乱、或いは我々の、中央権力闘争の推進過程は、これ等を総括し、現代の経験を決定的に飛躍せしめる段階に到達している。

我々は「現代革命と党建設」を「現代帝國主義國家と世界革命」の指定の上に、「革命的昂揚」「革命情勢」を指し、これを連続する「戦術と党の役割り」として確定せんとしている。

諸政党も又、無自覚なまま、かかる解答を要請され、自己が、どの現代革命—権力闘争—党建設の立場を継承しているかを模索し始めた。

日共は、仏人民戦線政府と仏共産党を踏襲し、構改—共労党は、トリアチの修正主義を批判しつつ、初期グラムシの再検討に入り、ML等中共派は何とか、毛沢東—ゲバラ等から解答を得んとし、革マルは問題の提起自身がわからず、思想主義から現代無政府主義(実践的に右翼社民)に転落し、解放派は破産し、中核派は、レーニン主義の教条を粉飾し、問題の提出されている意味を、革マルと同様理解せず、ただ高次の自然発生性に典型的に拝跪するのみである。

彼等はようやくとして現代過渡期世界の独特の運動の在り方に気付き、その現代性に氣をとられ、その独特の自然発生性を合理化する余り、現代の高次の自然発生性と目的意識性の連関を捨てず、結局、帝國主義論の修正の上に、國家

論を現代的に修正し、自らの新たな党的指導の欠落と大衆追隨の不安を「大衆はほうはいと闘っている、敵は弱点だらけで味方は強い。進め進め」式の「バラ色の未来のイメージ」と「革命的楽天主義」でごまかさうとしている。

IV 現代帝國主義國家

ではかかる大衆の高次の自然発生性は、如何なる目的意識的な指導と組織型態を通して労働者階級を組織された支配階級に昇めることが出来るのか。

その前にかかかる高次の自然発生性が中核—日共に到る経済主義—日和見主義では指導出来ず、分解するかを現代帝國主義國家と現在の階級關係からみてみよう。確かに現代帝國主義國家の弱点を通して高次の自然発生性が噴出する。

我々はこの党派にもさきかけ、この高次の自然発生性の在り方をしきた。だがそれは現代帝國主義國家の側面であって、その弱点をも止揚する形でもって國家は國家本来の内的原理を、現代過渡期世界の実態に対応すべくブルジョア独裁國家の最高形態—フランズム國家に(その過程は種類はともあれ)自らを組織発展せしめつつあるのだ。

その第一は、労働者國家の存在、しかもそれが何んらかの質と形態をもって、國際階級闘争に結合していること、しかもスターリン主義に媒介され一國体制間戦争として展開されているかの如くみえることを利用し、「共産主義からの直接—間接侵略」の名目の下に、大衆の素朴な恐怖感—祖國防衛意識をかき立て、帝國主義の強盜的侵略反革命戦争に高度な組織力をもって動員してゆくところに、現代社会排外主義形成の秘密がある。そして侵略反革命同盟の存在を通して、大衆のナンヨナリズムによる結集力の弱さを現实的防衛力の必要性を基礎に、自國の防衛力の力量の問題に解消し、ナンヨナリズム—自主防衛力強化に帰着せしめるのである。

かかる現代ナンヨナリズム—祖國防衛主義の動きは労働者國家と直接、間接に隣接している諸國に於いて顕著である。(西独、南ベトナム、南朝鮮、台湾など)日本帝國主義國家の内的危機が成熟し、國際的危機と結合し市場問題が全面化した時点で、過去に於いて一見アンバランスで解離していた彼らの排外主義政策が現実になり、その内在的潜在的原理を顕現せしめるのである。

我々は自主防衛力が強化され、対内危機が深化した場合、大衆の素朴な祖國防

衛主義は侵略反革命をも容認する潜在性を持つていることを確認しなければならぬ。

すでにそのような戦争—ファシズムの潮流が新生右翼、自衛隊右派—民間公明右派に誕生しつつある。自衛隊はかつてワイマル体制化で国防軍が大眾を分離しながらも20万の将校団を中核にクルッパブルジョアジーの大量軍需生産体制と結合し、一挙に帝國主義國民軍隊に成長し、その力で大眾を一挙に結合した如く、国内外の侵略、抑圧、反革命戦争に向けての國民軍隊形成の基礎、將校団と大量軍需生産体制は整備されてきていることを指摘しなければならぬ。

第二に、現代の國家が機軸的ナショナリズムの存在と、危機の平和時からの構造的累積を基礎に自然発生的な統合力を失ったとは言え、経済政治政策全般に渡って官僚—常備軍—警察の肥大化をてこに市民社会全域に支配網を金と分断政策と暴力によって計画的組織的におろし切っていることである。そして平和時からの深刻な諸階級、プロの分裂と抗争はそれが主要にプロ対ブルにあるが故に小ブル、農民がこの闘争に反撥することを判しプロと小ブル、農民との間に楔を打ち込み、プロを集中攻撃し、小ブル、農民を國家のもとに上からと下からのファシズムの動向をもって結合せんとするのである。現代帝國主義國家の危機に於ける支配的決定的特質がプロと小ブル、農民との分断政策にあることを我々は理解しなければならぬ。だから我々にとって機軸的の専横は全く階級性を打ちだしにするものとして寄りながらも、小ブル、農民は警察に不信をもちつつも小ブル、農民には依然として「公僕」として等るのである。

かかる独特な分断構造を媒介して正に「公然」と「いつのまにか」機軸的の主張と反革命突撃軍団が誕生し警察—自衛隊が大眾に対して「悪役」「日陰者」の如く登場しつつも支配的的論理の関連で理解しにくい限り、機軸的のゲバルト的要素のみや、或いは自衛隊の國民軍隊化の不可能性がサラリーマン軍人の存在等をもって自衛隊の反革命性を否定したりすることは出来ず、権力の弱点は戦術的に最大限利用しなければならぬにしてもそれなりの現状勢の大衆分断に内的基礎をおいていることを理解しなければならぬ。

今や警察は市民社会のプロ独派、秩序派、ファシズム派への分断の中で後二者のプロ独派への反撥を媒介にブルジョアジーの軍隊よりも軍隊的な最も階級的な反革命突撃軍団として機軸的をてこに再編されつつある。

ぼらせ、帝國主義の沖縄の帝國主義的返還—ASPAC—朝鮮侵略戦略を外部から容認させ、他方で、帝國主義が「朝鮮市場を媒介としてアジア市場が死活の生存圏である」ことが、企業—村ブル—農民にまで、帝國主義が危機になるにつれて浸透し始めていることである。

大眾にとって、日米関係の改変以上にアジアに対する対外政策が焦眉の課題になりつつあるのである。

それ故、日本階級闘争は、戦後始めて大衆的に祖国防衛運動を登場させ、祖国防衛主義を粉砕する真のプロ國際主義の貫徹が革命的左翼に問われてきているのである。

だが、このプロレタリア國際主義の性格も又、日帝自身がアジアの侵略、反革命の米帝につぐ第二の國際憲兵として登場し、それが、アジアの革命か反革命かの深さの危機に立ちほだかり、アジア人民にとっての革命闘争は、日・米人民の本國心臓部での、日米帝國主義同時打倒の、更に、侵略反革命を阻止する権力闘争の展開如何にかかり、かつ日本階級闘争の危機も「プロ独—世界革命」か「ファシズム—戦争」かに全人民の社会政治生活の、運命が問われる段階に煮つまっているが故に、現実に日米の侵略反革命秩序が阻止されない限り、ソ連の反革命政策や、中共の周辺革命に結合し、革命を流産させる以外にないまでに煮つまっているが故に、世界同時革命—世界革命戦争は、当の日本から開始しなければならぬ主体的な位置に立たされているのである。

即ち従来の日帝の経済的アジア侵入—軍事的には米軍事戦略加担（背後での自主防衛力強化）に対して、大衆の民族性と反・反革命性と、真の國際性が未分化のまま存在し、他方真正右翼が潜在的であったものが、アジアの朝鮮に煮つまる連続的危機と日帝の國內政治経済危機が一体化し、日帝自身の自主的な朝鮮侵略「反革命行動が急速に日程にのぼることによって、アメリカに「くっつくか、くっつかないか」の内容をめぐって、階級性が争われていた段階から、日帝の「侵略反革命を支持するか否か」も「戦争か革命か」に一挙に飛躍することによって、民族性、反・反革命性が分解し、他方で、潜在的な祖国防衛主義を公然と登場させたのである。沖縄闘争も又矢張り「憲章—解放闘争」内部の軍事問題と切りはなされた施設権返還論者を右翼ナショナリズムに引き寄せ、他方左派を「朝鮮侵略反革命阻止、米軍政打倒、前線基地阻止、日米帝國主義打倒—世界革命戦争

そしてかかる現代帝國主義國家の「民族と國家」に於ける、そして「暴力」に於ける問題は、帝國主義的膨張力の累積と、國際—國內政治危機が頂点に達したとき帝國主義的侵略反革命戦争を実現せんとするファシズム國家へと転換せしめるのである。（それが一挙的かなし崩し的に、上から下からかはすぐれてブルジョアジーとプロの攻防関係にかかると）

我々はファシズム國家の特徴を侵略と反革命を内的に統一せんとする（日本の場合反共反米）、祖国防衛主義とプロと小ブル、農民との政治経済的分断の上に集中したブルジョア独裁國家であることを確認しなければならぬし、正にプロレタリアートとその党の現代革命に於ける戦略—戦時—権力闘争の諸戦術と党建設がない限り現代過渡期世界に媒介され、侵略反革命の不統一、危機の引き延ばしからの社会経済危機の慢性化から平時から諸階級の分断と高次な自然発生的性がプロ独世界革命派と結合する内的基礎をもちながらかかる國家に対抗しえないのである。

V 大衆の分解と党

高次の自然発生的性とそれに排絶した現代のラボーム・ジェーロの敗北の道は最近の國際—國內反革命の決定な変化の中で増々鮮明になりつつある。

その第一は、急進民族主義、民主主義、平和主義、コスモポリタニズムの反革命主義が分解し祖国防衛主義とのプロレタリア國際主義の党的指導が決定的になりつつあることである。メキシコス・ペインートルコロベトナム—パキスタン—マレーシア—朝鮮等の永続的危機の拡大、他方での中共、自主独立路線等の一國主義的限界、ソ連の反革命化と「労働者國家」群内の階級対立の深化の中で、永続的な朝鮮危機を媒介に、朝鮮侵略反革命に自らの危機の引き延ばしを飛躍せんとしており、危機の引き延ばしからの大衆の反撃を一体的に粉砕すべく、ファシズムへのなし崩しの権力再編を破防法—警察力増強—自衛隊の帝國主義軍隊化をもって強力に押し進めんとしている。

朝鮮危機（EC121、第71機動部隊の配備、フォーカス・レティナ作戦）他方での中共、北鮮の「好戦」的態度、ウスリーの中ソ武力衝突等は、人民にとって、朝鮮危機からの—自主防衛運動を、日米関係をさておいて緊急の課題にの

争」に分解—結果させつつあるのだ。急進的民族主義、反・反革命運動がそれ自体、自然成長的に革命闘争に発展しないばかりか、反対に、反共ナショナリズム—自主防衛運動に再編されてしまうことを示したのである。

第二に、大衆の高次の自然発生的性の広がり、学生層、中小企業プロ等にとどまらず、官公労から民間の大手を除いた部分へと急速に進展しており、4/28に於て、社共共闘への結果はわずか2〜4万にとどまり、社会党—総評に命数は幾ばくもないことは明らかである。だが多くの戦闘的労働者が同盟の地区活動と共奮活動の保証されないところ、或いは地区党の活動が弱く、産別フラクスの連携のみしかも切れないところでは、労働者は平連に流されるか、銀座—新橋の野次馬としてのみ登場していることである。同盟の「社共の議会議主義統一戦線か、武装労働者の中央権力闘争か」のスローガンは貫徹しなかった。かかる自然発生的性の拡大と、その頂点に於ける祖国防衛主義対プロレタリア國際主義の対立は、党的指導が欠落した場合、「上」「下」から拾頭する祖国防衛運動に屈服される事態を生み出すにはおかない。すでに学生戦線の幾つかの事件は、かかる事態を予言しているのである。第二は、全共闘運動や自衛武装の動向や、工場、個別闘争に於ける工運運動に集約される諸動向（スト実行委、拠点スト、地域共闘、地域階級的労働M）我々はこれ等の先進的大衆の自然発生的運動の意味を否定しはしない。だが革命的左翼の第一義的任務をここに置くことは決定的に誤ちである。このような運動が権力と資本によって、ロクアアウト、レッド、パージを食っても、右翼から襲撃されても、権力闘争の戦列を永続的に荷える指導を行わねばならぬ。このような運動の組織化を第一義的におくことの背後には、「全共闘運動—ソヴィエト運動」や、「全共闘的団結がコンミュニクの団結だ」とか「自衛武装—権力奪取の武装力」と考える思考が存在する。確かにこれは色んな段階の独裁への萌芽であるにしても、我々はソヴィエトを、その指導部に於ける政党間統一戦線の問題と考へ、帝國主義政府を武装蜂起によって打倒し、内戦と世界革命戦争を完遂する新たなプロ独國家だと考へるが故にソヴィエト運動は、革命政党内に媒介された武装蜂起と内戦—世界革命戦争をめざす、革命的に武装され軍隊をテコにして、存在しないが故にそのようなものへと、中央権力闘争、政治、経済闘争を通じて、党派闘争を媒介に飛躍させなければならぬ。

実際、革命派の組織された部隊と結合しない限り安田攻防は闘えなかった、塩

水港の闘いもそうであり、4/28闘争のなかで、中央権力闘争を闘う過程で、ノセクト派が分解し、政党内指導されていることも事実である。

ロシア革命の6月に於て、ソヴェイトが反動化、形骸化し、ボルシェヴィキが党としてコロニー・ロシア革命粉砕、武装蜂起を独自に準備する過程で、ソヴェイトを蜂起の機関に変えていったことや、或いは独のレーテが社民のヘゲモニーが貫徹し、オプロイテヤスバルタタスが、レーテの名に於て反革命的に粉砕されたことを銘記しなければならぬ。

かかる党と大衆の關係が理解出来ず、全共闘ソヴェイト論や下からの自然発生的團結が強調される事態は、何よりも党自身が大衆に転落し、党としての任務を理解出来ないところにある。

現に党の、種々の大衆の戰闘的團結機關を統合し、蜂起と内戦―世界革命戦争を切り開くプロレタリア革命政府へとそれが臨時的なものであれ再編し、自衛武装を党の源流された部隊の活動を通し、正規軍へ組織する任務が怠たられれば、権力とファシズムの反革命突撃隊の前に解体か孤立かを強いられるだろう。

第三に、中央権力闘争に対する自然発生性とその拝跪である。中核であれ、共党であれ「中央反政府闘争」とか「沖繩憲法保安隊中央闘争」とか銘打って、我々の中央権力闘争に4/28におおずおおずついてきた。

現在の階級闘争が、佐藤帝國主義政府と反政府闘争になることは当然である。だが又、その展望や位置付けたるや全く経済主義、自然発生性ではない。

彼等ばかりか「中央闘争が、世界革命戦線に占める位置や、プロ独への道に於て、現政権と如何なる対抗關係を組み、水準をもち、如何なる位置を占めるかは全くなく、せいぜい中央闘争を幾度も積みあげれば、権力規定抜きで状況主義的な「政府危機や政治危機が形成される」とか、「権力闘争」の質をもつて闘うなどという、全く曖昧な規定でごまかしてしまっている。

かかる「大衆が中央に行き始めるから行く」と式の拝跪による非計画的中央騒乱主義が、権力の密集した政治的軍事的弾圧の下に、ひとたまりもなく粉砕され、その騒乱を通し、小ブル、右翼、公明、右派、自衛隊右派のファシズム―戦争派を対極に生み出し、権力とファシズム運動に二重包囲され、しかもそれに計画的に対応出来ないという意味で、かつ最も闘った先進的人民が瓦解するという意味で、中央権力闘争への自然発生性の拝跪は決定的な、現在の「革命派」の犯罪的

立ち遅れとなつて居る。

我々は、佐藤帝國主義政府打倒―中央権力闘争を以下の諸点に於いて把えねばならない。

① 佐藤帝國主義打倒―中央権力闘争の受けとめ方は、ともあれ大衆が掲げ、中央に結集すること自体、市民社会の根底的危機に根ざし、その根本的解決をめざし、本能的に現政権を打倒することと既存権力を打倒することが一体であり、労働者人民の新たな権力を望んでいるこの表明に他ならない。

② 4/28は敵権力に於て、既存体制の危機から「プロ独―世界革命派」「民主主義―秩序派」「ファシズム―戦争派」への分解に於いて、しかも放置すればプロ独派が抬頭し、そのプロ独派が太平洋圏の階級闘争を、前衛的に結合し、内部の「ファシズム―戦争派」を孤立させてしまふのに対して、同時に「ファシズム―戦争派」が未分化であれ、自己の政権を支持しつつも、自己の政権に不信を抱き、独自のファシズム運動を開始する危機に於いて、そして、かかる危機が一昨年以來、潜在的に開始され、益々顕在化し、その階級關係の推移が、集中的に中央権力闘争に於いて決められるような、階級關係の構造化に於いて、(かかる特異な大變動を内包した階級關係は、極めて類似するものとして、一九三〇年前後の独、三〇年代の人民戦線政府が成立する以前、一九二〇年初期の伊―我々はこれ等を過渡期世界での独特な崩壊的ファシズム化の階級關係の典型とみななければならぬし、この階級關係の到来こそを、革命的昂揚期から革命情動の決定的一基準としなければならぬ)プロレタリアート、人民の最も自覚された部隊で、これを政治的軍事的に打ち破り、他方でその成果の上にファシズム派と秩序派を、朝鮮危機↓国防力強化↓国内非常事態の全体主義的体制(その突破口を朝鮮侵略―破防法―大学立法レバにおく)に、専制し、かつ國際的人民の日本帝國主義打倒―権力闘争による結合を分断し、なし崩しのファシズム体制を破すべく、覆け関を死力を尽して防衛し、我々を打ち砕くべく、外張り警備にまで攻勢をかけたのである。

③ かかる攻防の深さと広さ、階級關係と敵権力の対応に於いて、中央権力闘争が、世界同時革命―世界革命戦争、世界党形成に占める位置や、プロ独―内戦に到る過程に於いて如何なる位置を占め、又その重さ、水準がどの程度のものかをしっかりと確定せず、「権力闘争の質」とか、「権力闘争の萌芽」とかで

曖昧にし、そこから、暴力装置の武装解除の質を抜きに、「中央闘争の永続化」ではっきりとした党的意志一致抜きに、「中央権力闘争」を提起した場合、逆に、それが全人民の國際的背景の下での分解が今までとは別の新たな質の政治領域「権力の正否」の根本問題に突き進むが故に、全階級が大流動し、権力のファシズム化とファシズム派の登場を促し、連続的な反革命化に処し得ず、味方の戦線が瓦解―孤立することである。

突際、4/28以降の事態はかかる敗北的事態を本質的に進行させている。

勿論 同盟 共青を中核とした、武装労働者の中央権力闘争に於ける第一戦の登場という、新たな階級情勢に切り込む、決定的拠点を獲得しつつも。

④ それ故、我々は、帝國主義政府打倒―中央権力闘争を、①世界同時革命―世界革命戦争、世界党形成に占める位置が、帝國主義心臓部に於ける権力闘争の開始を突破口とした、世界同時革命戦争の開始、として主体的に把え、②その革命に於て連続的性格を、既存の政府の打倒が、その体制の支柱―暴力装置の武装解除にあり、これを実現する過程こそが、ファシズム派の支柱―暴力装置の武装解除の粉砕―内戦と一体であることをあらかじめ措置し、その連続的過程を現在から二重に準備する射程に於いて、内戦の突破口として迎え、③その水準が武装蜂起に匹敵するものとして、④そして、その突破を通じて、既存の市民社会の、社会革命を内包した分裂の質が一挙に政治革命と結合する質へと昂められることに対して、種々な味方の戦線の分散地と価値観の水準を、決定的に飛躍させた価値観「プロ独かプロ独か」を連続的蜂起―内戦と世界革命戦争を荷う機關の承認か否かに、そして、それが反革命との非和解戦争に対して闘うことを通じて、市民社会の種々な團結をプロ独國家の原型へとまとめあげ、大衆を統率し、独裁していく決定的媒体赤軍に自衛武装集團を参画するか、否かを問うところのプロレタリア革命政府の樹立を貫徹しなければならぬ。正に、ここから始めて、ソヴェイト運動は開始されるのである。

我々はこの政府の最小限の最大限綱領と具體的任務を明らかにするだろう。かかる決定的な階級關係の再編を経過する以前の、種々な戰闘的大衆の運動と團結は、中央権力闘争と組織武装、党活動を荷う部隊とそのヘゲモニーに於てのみ、ソヴェイトへのなし崩しファシズムの専制に對抗しつつ、永続発展するのである。

かかる根本的政治武装の上に、中央権力の暴力装置を粉砕解体すべき、大衆とは離れた、党に直轄された特殊な部隊(赤軍の中核)―共産主義突撃隊の前もつての準備と前衛的突破口の役割りと、武装行動隊―老人大衆の武装の中央権力攻撃―占拠の、陣型、攻撃的体系が必要であること。

かかる革命的昂揚から革命情勢への過渡期が、主体的に展開される条件は、國際的革命的戦線の、世界党的團結をもつた世界革命派の世界革命戦争の同時的展開と、唯一プロレタリア革命政府活動の非合法的持統と、それを牽引する、ブルジョアジーの中央集権支配体米と、その頭脳としてのブルジョア政治委員会との対極に位置する、全国―地区―経営―中央の有機的連繫をもつた革命党(プロレタリアートの心臓であり共産主義と革命戦争の頭脳であり指令部である)とその共産主義的ヘゲモニーであり、そのヘゲモニーの媒介形態であり、それに結合された、正規軍戦、ゲリラ戦、地下戦等が組み合わされた赤軍である。これは、前述した、党中央に直轄された突撃隊、地方軍、地区ゲリラ軍の構成をもつて最初は中国紅軍の如く、敵軍隊のほりよや、分解した部隊を願望するのではなく、準備されねばならぬ。

その際我々は、固定的な基地(工場や、地域、都市等々、勿論かかる場所が赤軍移動、潜伏に必要不可欠であるが)を、固定するのではなく、自由に移動でき、大衆のなかに融けこみ、権力の中枢突撃軍との正面戦や、地方軍との闘い、或いは地域でのゲリラ軍戦や幾度となき中央権力闘争等、公然、非公然の有機的連繫をもつて、内戦体系を準備する必要がある。

⑤ かかる革命的昂揚から革命情勢への過渡から革命情勢が現代革命に於いて、警察―保安軍(自衛隊―米軍)と、ファシズム突撃軍団等との中央権力闘争とその持続を通じた内戦―世界革命戦争形態をとる、故に党にその政治危機において宣伝組織とともに大きく軍事的機能を獲得し國際的戦争も國際的に指導し得、世界党へ自らを飛躍する活動を決定的に必須とするのである。

VI (一)のまとめ

さて様々な角度や領域から現代階級闘争における現代的な高次な自然発生性と高次な目的意識性の関連を述べ、その克服の方向を確認してきたが、再度これらを総体として内的連関を明らかにしつつまとめよう。

〈第一講〉 現代帝國主義國家と前衛黨

① 現在、「マルクス主義の國家學說」に対する歪曲、或いは修正がはららぬし、それ等は、帝國主義論の修正、過渡期世界觀の誤った製定と一体に、「國家の自動崩壊論」に統括されるといえるような、内実に集中し、そして、その帰結はかかる修正主義者が如何に口先では「暴力革命—武装蜂起」を主張しようとも、實際は「暴力革命」の否定にゆきつこうとしている。

曰く「ヤルタ体制」「安保—NATO体制」「OAS体制」等々、「日米連合共同體」或いは「ナショナルリズム—排外主義」の起り得る自然性が少ないこと、起きえないことの二重享しからのナショナルリズム—排外主義の否定、更に、國家權力の諸階級との經濟的政治的關係を捨象しての國家「ゲバルト説」等、曰く、

○ 日共（自立派）の權力の武装解体抜ききの民主連合政府の成立から、連統的社會主義政策の導入（仏人民戦線のズブズブの踏襲）

○ 構改派（共労党）の「工場評議會」工場ソヴィエト「プロレタリア独裁の國家への國家改良」その為の「知的道徳的ヘゲモニーと工場の党」（トリアッテの左翼的修正、グラムシへの先祖掃り—現代のサンディカリズム）

○ 中共派（ML派）の市民社會内部の諸階級の分裂と諸階級の武装対立を世界革命戦争ととり違へる人民戦争路線の貫徹（これは毛沢東の中日革命戦争の当てはめと、その普遍化、毛沢東の周辺革命論の誤りと同時に、解放区をソヴィエト國家と等置しているところに根源がある）

あるいは、このゲバラ—カストロ路線（とりわけ、世界同時革命、世界党の欠落、或は半措置）の無媒介的適用を主張する諸グループ、中核派の帝國主義論の修正—安保体制論からのロシア革命の教条化と左翼人民戦線路線の主張。

同盟内部のこれと同一の傾向を代表する純粹經濟主義、口先だけでは幾ばく中核より左翼的な、權力の武装解体抜ききの「中央權力」闘争主義。

戦線から急速に脱落しつつある先進的大衆「青解」サンディカリズム。革マル派の現代無政府主義（過渡期世界觀に於ける反スター裏切り史觀と資本に対する疎外、自立論）実践的にはテロリズムと社民化政策等々、彼等は総じて現代過渡期世界に於ける現代帝國主義國家の特徵的な弱点、侵略と反革命の不統一性、國家

って立つ基礎を打ち破るべく、現代の階級闘争の前進によって、そして以上の反動的結論を粉碎すべく、我々は現代帝國主義國家と、攻撃型世界革命を意志一致しなければならぬ。

④ 我々は、現代修正主義者、非暴力世界革命主義者の國家論をマルクス、レーニンの実践から継承し、發展させ現代帝國主義國家と、敵權力の正体と実態を總体として把握しなければならぬ。

その為には、少なくとも以下の領域である「フランス三部作」「革命と反革命」レーニンの「國家と革命」を基礎にして、資本主義と國家の関連を確認することである。

⑤ 次に過渡期世界に媒介されての、現代帝國主義と現代帝國主義國家の連関（侵略、抑圧、反革命戦争の前段での危機に對峙する現代帝國主義國家の基本性格と動向、その最も純化されたものとしてのファシズムの分析。

⑥ 日本帝國主義國家權力。

⑦ 修正主義國家論とその革命論の反革命的役割。

レーニンは、一九一五年帝國主義戦争の渦中で、その体系をマルクス主義經濟學を通じて、帝國主義戦争の法則を、帝國主義論で解明した。これを武器とすることによって、ツァーリヤケレンスキー等敵階級の性格を明らかにした。即ちこれこそが、戦争とケレンスキー政權の階級的役割の解明であった。同時にこれを基礎にしつつ資本主義そのものを止揚せんとする、社會主義革命を要求する、労働者階級の不可避な登場と、この階級が敵權力を打ち破る戦術を「社會主義暴力革命」と「四月テーゼ」と「マルクス主義と武装蜂起」として提起し幾つかの試練を乗り越え史上初の、社會主義革命を実現したのであった。

ところで、「國家と革命」とは如何なる性格なのか。レーニンは、國家が「階級対立の非和解性の産物」であることを説き、國家權力がブルジョア階級の利益（最終的には帝國主義戦争を通してそれ）を守る為の「階級支配の道具」であり、その權力の実態の中心は「武装した特殊部隊—常備軍、官僚、警察」等であることを指摘し、労働者人民の力を「ことごとく」暴力革命に集中する必要性を主張した。

この根本的戦略の下に、敵權力を破壊する革命的戦術「四月テーゼ」と「マル

のゲバルト、軍事的側面の前面化、反革命同盟の強化、經濟危機の平和期からの累積、社會危機の構造化等をあげつらい、國家權力の統合力の弱体化—國家崩壊論を展開し、全世界の侵略抑圧反革命戦争ファシズム國家の不可避性を否定し、戦争とファシズムの前段に於ける前衛黨とプロレタリアートの武装蜂起と内戦—世界革命戦争を否定し、大衆の自然発生的昂揚に押され破防法を講じていれば、大衆がはね返すと主張する中核の革命的棄天主義のように労働者人民大衆に對して、權力のなしくずしファシズム化の甚大な反動的掃戻しと、前段に於ける世界革命戦争、内戦—武装蜂起の警戒と準備を解除しているのである。

これは彼等が國家の暴力装置機隊の反革命突撃軍、自衛隊の侵略抑圧反革命軍、兩者の結合を通してプロレタリア人民への反革命的専制に無自覚であるばかりか、全く分析せず、權力の武装解体の戦術を創造しないばかりか、何かひとりて人民の革命的昂揚が、國家を粉碎してくれと夢想することへと連らなっている。現実の世界でかかる暴力装置の弾圧に完全に打ちのめされ、主体的総括を力量強化の問題としては総括せず、プロレタリア國際主義を反革命同盟粉砕にワイ少化し、恐慌や戦争の危機を待望し、待期主義におち込みそれを「議會權」「工場での内実抜ききのヘゲモニー形成」或いは、中央權力へのカンパニア闘争の量的時間的拡大で反撃しようとしているからである（我が同盟戦論4/28総括シリーズがこれ。我々は、全世界の帝國主義列強の侵略抑圧反革命戦争の衝動の深化と權力再編の渦中において、とりわけ日帝が朝鮮侵略反革命を突破口とするアジア侵略抑圧、反革命戦争への衝動を、國內經濟危機と國際的人民の攻勢の一環のなかで日本人民の階級成熟が倍加され一層強化し、なし崩しのファシズム化から反動的掃戻しをこの一年以内に（これと人民の激突の攻防關係、階級成熟によって）佐藤訪米以前に、佐藤内閣の崩壊期に前面化し、かつ人民が革命的昂揚の項点となりつつも、次に何を準備するかを察知しえない局面にあって、我が同盟内部の經濟主義者（解黨主義）は、中央權力闘争（主体的には武装蜂起）を、中央權力政治闘争に骨抜きにし「革命」が意識的な党による蜂起抜きに、いつの間にか自然発生的に起ることを願望し、革命の任務を啓蒙と大衆への宣伝に代え、そのことによって、党自身の本質と建設に誤った規定を行い）党の革命情勢を切り開く、党の党たることによる本来の任務の体制に無自覚か忘れ去るか、混迷し、恐怖し、一切の活動と任務を放棄する犯罪的動向を、正にそのよ

クス主義と武装蜂起」は設定され、メンシエスキ、エス・エル等の「祖国防衛戦」—「國家の和解性」—「戦争の継続と民主的改良の道を粉碎し、10月蜂起を實現した。

ところで、全ゆる戦争に共通し我々は戦闘を開始する際に、敵の根本的動向が何んであり、そこから出てくる諸戦術が、味方を如何に規制しているかを考える。そして、こんどはひるがえって、味方がこの根本的動向を打ち破らなければならぬことの意味を明らかにし戦術的に組織し、敵の影響を断ち切り、逆に敵に影響を与え、敵を我々の戦術の下に包囲し、制約し、孤立させ、少数にすべく、敵の諸戦術を打ち破るべく闘うのである。かかる普遍的な敵、味方の攻防の在り方は簡単に以下の真理を示している。第一に敵に對して、味方の司令部があること。第二に主客が相互に制約し合ひ、第三に双方は自己の陣營に、その制約關係を統一しようとする戦術—戦術を立てるといふことである。しかも、敵が圧倒的に強大で味方が圧倒的劣勢である場合、敵との決戦を避け、持久戦で包囲し、力を蓄え、戦術的決戦も、味方に最も有利な、敵に最も不利で弱い位置、質をもつて闘う。敵、味方が均衡的關係に立つ場合、敵を一挙に規制する關係に立たんとする、大胆な決戦的戦術を貫徹する。味方が現実的に優勢な位置を確保した場合、敵の戦術的粉砕にとどまらず、敵の戦略的基盤そのもの、即ち制約關係を形成している根源そのものを除却する闘いを主軸に、敵をせん滅する。

即ち戦術—戦術に従う、個々の戦闘の勝利は、即ち敵、味方の味方による統一の方向は、①まず戦闘が発生する根源そのものの解明から出発し、敵味方の主張を全ゆる制約關係を通じて、味方と中間部分に理解させ、力量を全領域に渡って蓄えつつ、②敵に、不利で味方に最も有利な攻防關係の環に戦術を集中する。③そして、これへの味方のかかわり合ひは、主客の、主体に於ける統一性をかえるべく徹頭徹尾準備されねばならぬ。即ち「勝つ」為のみであるのである。これ等の戦闘の原則は勿論階級闘争に当てはまるばかりか、最もその典型である。

我々は、帝國主義論、國家論に於て、(a)資、勞の制約關係を解明し、敵、味方の根本的位置を確定する。(b)敵階級の基本動向とその味方階級への基本制約關係を確定する。

この意味に於いて、帝國主義論と國家論は、二重の性格をすでに当初からもつのである。即ち、(a)敵、味方の客観的な分析、(b)敵の分析を通じての敵を打倒す

る味方の位置をより総体として把え、主客を主体の側に統一する主体的な(或いは階級的な)勝利の方向性をより対目的に把えらるるのである。換言すれば、帝國主義論、國家論は味方階級強化を、敵の基本的動向、その全般的味方への制約を通じて、味方の闘いの質、方向をより対目的に理解する根拠になることである。それ故、帝國主義論、國家論は、敵、味方の戦列強化(階級成熟、階級闘争等)、味方階級強化の攻防の弁証法を捨象した、敵一般の「客観」分析ではなく、帝國主義論も國家論に於て、味方階級強化のより具体的な攻防の弁証法(戦争、軍事力等)を内包しており、その出発点である。帝國主義論は、攻防の弁証法を基礎として、國家論は、これを基礎においた出発点である。帝國主義論は、それ故、國家論一般として独立してあるのではなく、党と共產主義者にとつては、レーニンが「國家と革命」として提起した如く、「國家と世界革命」として一体にあるのである。

革命階級に近づけば近づく程、味方階級強化(勝利の攻防の弁証法は、帝國主義論と國家論の階級性の鮮明化を通じて、この動向の否定体「プロ独」世界革命を現実の革命的世界革命と階級の権力闘争の基本戦術に集中、物質化してゆくことである。

この際、敵階級とその司令部権力を把える際、頭の中では、暗に味方階級の力量を、それを基礎にした弁証法的制約関係が働くことを計算して、把えようとする。これは誤りであるよりも不正確である。何故なら敵階級も又、帝國主義と國家の防衛の方向の方も、味方階級の力量、攻防関係を統合しようとする、主体的な弁証法的動向としてあるからだ。だから我々が味方階級強化の戦略(戦術的闘争)を行うとした場合、靜力学的、非弁証法的、味方階級の確定的な力量が敵を規制していること立ててはならないのであって、逆に、味方階級の力量、制約関係を考慮し、帝國主義と國家の法則の下に、内的に敵階級が統合しようとする方向に階級闘争弁証法的總体を解明し、これを前提としてこそ始めてこんどは逆に、この敵の動向を逆転させるべく積極的に、帝國主義と國家の法則を媒介に味方階級を統合する方向に「戦術」を確定することが可能であるのだ。

だから、敵階級は、味方階級の成熟や力量、条件をも敵階級が内的に統合するものとして、確定することを媒介としてのみ、味方階級強化の攻勢の戦略(戦術)は設定されるのであって、味方階級の陣型が敵を不利に規制することを固定的に把

え、敵の弱体化と味方の強大化を前提にした戦略(戦術)は決定的に誤りである。これこそ、受動型であり、敗北の弁証法なのだ。

再びロシア革命とレーニンにかえれば、帝國主義論、國家と革命、四月テーゼの関係は、以下の如くなるのである。即ち、レーニンは敵階級と権力の基本動向と味方階級の動きかけをも、敵階級が彼等の内に統合するものとして、敵階級尾、祖國防衛戦争ではなく帝國主義戦争であり、ケレンスキーが反革命であること、敵対的な弁証法的總体(階級的立場)として把え、逆にこの敵階級の根本的動向の否定と打倒の方向で、暴力革命と四月テーゼを確定したのである。

④ 現代の帝國主義國家がたかも崩壊したかの如き諸現象を呈するのは、その第一に、現代帝國主義の独特の形態を通じた帝國主義の運動の貫徹と過剰資本の対外市場投下(不均等発展の貫徹)にあると同時に、第二に、これに内的基礎をおいた、平時からの世界プロレタリアートの高次の自然発生性と階級成熟の独特の歴史的形成に存在する。

修正主義者は、「左」「右」の色合いはあれ、現代資本主義の運動法則とこれに規制された世界プロレタリアートの運動の連関の弁証法性が理解し得ず、超帝國主義論と修正主義國家論でもって説明し、受動的、敗北の革命論を主張する。我々は、現代帝國主義國家が究極に於いて(人民戦線や、ニューディール形態を過去にしつつも)ブルジョアジーの主体的努力が現代帝國主義とこれに規制された世界プロレタリアートの在り方に媒介され全世界的侵略抑圧反革命戦争の前提に於いて、局地的それと一体化し、その前提に於いてファシズムへの権力再編に集中されることを結論する。

我々はファシズムを第一に、侵略抑圧反革命戦争を政治同盟として支配要素に組み込んだ同時一体に國際國內一体に貫徹する最も完全なブルジョア独裁の体制であること、第二に、それが統制経済を基礎に、プロレタリアートの完全な武装解除(労働組合の解体、ケイガイ化、政治活動の禁止等)と、小ブル、農民等との完全な分断、そして後者のブルジョアジーによる直接の制圧として、権力に直接に統制された支配型態、それ故、執行・行政立法の暴力的一体化を形態とする。

第三に、そのイデオロギー結果を、過去の「反帝民族主義」ではなく、「反帝反共ナショナリズム」であることと規定する。

そして、かかる世界プロレタリアートの動向に対して、帝國主義の現代帝國主義の経済政策(資金統制、公共投資、軍需産業、國際通貨維持、流動性保証、etc.等々、なほ崩壊的に統制経済の移行に集中する質と体系)でもって、プロレタリアートを政治的に、先述した権力を樹立せんと主体に努力するのである。

かかる現代帝國主義國家の一側面の弱点として、

① 反革命同盟の存在を通して、反他帝國主義ナショナリズムが形成しにくいこと。
② 平時から経済的危機(社会的危機の深化からの諸階級の「プロ独」世界革命派、民族主義秩序派、ファシズム)戦争派に分裂と抗争が武装闘争戦として展開され(私兵、自衛武装、突撃隊等)、國家権力は、末端までの暴力支配を(警察、常備軍の反革命軍団化、官僚の反革命機能の強化と肥大化)貫徹せざるを得ないこと。

③ 不均等発展(市場再分割)帝國主義強盜戦争(これは世界プロレタリアートの存在を通して侵略抑圧反革命戦争になるが)を貫徹するには、プロレタリアートの完全な粉砕が必須の条件であること、これ故全世界的侵略抑圧反革命戦争の前提に於てファシズムへの権力再編が至上命令であること。

ほぼ以上である。これが國家崩壊論の現象的事実である。だが正に、かかる弱点をも止揚する型で現代帝國主義國家と権力は、より高次に対応する内的論理をもつのである。

④ 疎外されたプロレタリアートの根拠地とスターリン主義によって、危機に於て反帝反共ナショナリズムが形成されること。反革命同盟のヘゲモニーの改変を通しての承認。

⑤ 平時からのブルジョアジーとプロレタリアートの武装闘争戦から、小ブル農民等が疎外され、権力がプロレタリアートと他階級を分断することが可能であること。権力への小ブル、農民の組み込みとプロのせんめつ。

⑥ かかる権力の動向を、見抜けない社民は、ともあれ、スターリン主義勢力が國際的、国内的に存在すること。ほぼ以上である。かかる内的条件の下に、帝國主義の運動法則と國家の支配の

代議制民主制態を通じた帝國主義の市場再分割(帝國主義間or反共、その一)の戦争ではなく、全世界の侵略抑圧反革命戦争の前提に於いて、戦争の後ではなく、反革命ファシズムが前面化し、或いは世界恐慌をメルクマールとし、反革命が登壇し、或いは過去の、國際政治と國內政治が一応分離し、反革命が展開されるのに対し、國際一國內一体であったりする。戦前の独に代表される現象が階級化しつつある。ファシズムとその登場の核心的諸現象の内在的基礎と、明らかに、①現代帝國主義の独特の運動に媒介された、不均等発展の貫徹と、②それに規制され生れ出し同時に自らの発生根拠そのものを止揚せんとする世界プロレタリアートの独特の運動とそれをスターリン主義にか、革命的にか抱えた、その「前衛」党にある。③第三に、正に④を内的基礎に、これに媒介されての、⑤の反共せんとするブルジョアジーの階級意識と主体的活動にある。

これ等①②③の連関はほぼ以下である。即ち、重化学工業化、技術革新や、株式市場の形成(先進國産業構造の平準化、同質化等を媒介に、過剰資本が固定資本の増大を通して留保される帝國主義の資本の最も普遍化した蓄積形態を通して対外市場に投下され、不均等発展(市場再分割)を展開すること。

資本の最も高度に発達した諸環境と諸機構の整備を通して固定資本の増大に媒介された蓄積形態と、過剰資本の対外的投下の内的メカニズムは、資本の矛盾の爆發を極限まで引き延ばし、対外膨張を組織された形態で(即ち政治的一体性に於て)貫徹する諸環境と諸機構を産出させる。(株式IMF機構諸國融資政策、貿易差益獲得、國家資本輸出(民間資本輸出etc.))

状況主義的に述べれば、「危機が引き延ばされ矛盾が累積されつつ、市場再分割が展開されるのである。

だがこのことは、労働者階級をして平時から革命的危機に追いやり(IMF機構の崩壊を通じて)資本の組織された型での世界市場分割戦の展開を通して、逆に即時的自然発生的に單一の世界プロレタリアートに統合する(それが革命的にか、スターリン主義的にかはともあれ)のである。即ち現代資本主義の独特な過剰資本と市場再分割戦の貫徹が逆にそれを規制し、その独特な運動の物質的根拠そのものを止揚せんとする帝國主義世界のプロレタリアートを機械的に三プロットの階級闘争を結合せんとする世界プロレタリアートの動向を「平時」から注み出すのである。

論理をもって、侵略抑圧反革命戦争の前段に、それがなし崩しか、一挙的にかはともあれ、ファシズムへの権力再編即ち反革命を貫徹するのである。

だからこそ、我々は、暴力革命、世界革命、プロ独の原則を現代革命として、前段階攻撃型世界革命の戦略を忘れてはならない、もしこのことが無自覚であるならば、国家権力に武装解除したのも同然なのである。正にここから攻撃的な権力闘争の諸戦術と党建設は出発しなければならぬのである。

〔第二項〕 現代に於ける「革命的昂揚」から「革命情勢」への過渡とは何か。「二月」革命の意識性について

① ロシア2月革命は、労働者人民の自然発生的武装蜂起であった。ボリシェヴィキは、その大衆の成長とともに進むだけで、武装蜂起の計画的準備をもって、この自然発生的蜂起を組織的なものとしたわけではない。ピートルの労働者は、戦争と飢饉と地主からの圧政のなかで、街頭武装闘争、警察の襲撃、監獄の解放、兵士への反乱の呼びかけ、タウリゼ宮と国家を暴力的に占拠したのである。革命的昂揚から革命情勢への展開が自然発生的であれ、意識的なものであれ、権力の武装解除と、それにとつて替わる武装権力の一時的存在を不可欠としていることは誰でも認めるだろう。(ロシアの二重権力)

ところで、現代革命に於て、ロシアの2月の如く自然発生的武装蜂起によって革命情勢が開けるか。我々は決して、かかる事態が生れるとは考えない。何故なら第一項で述べた如く、第一に現代帝国主義国家の危機に於けるファシズムへの権力の質的強化と権力形態への再編の現代的性格からしてそうであり、第二に、大衆の高次な自然発生的(反革命同盟粉砕、全共闘労評運動、自衛的武装運動、帝国主義政府打倒即ち中央闘争、仏の5月、米の黒人闘争、反戦闘争等)が、第三に「デモ」よりは著しく大きく、革命よりは小さい「半蜂起」の質、規模にまで押し上げながらも、権力のファシズム化と下からの小ブル・農民を軸とするファシズム運動の対極的深化のなかで分解し、権力の武装解体運動に移行することなく逆に権力に解体させられてファシズムか、反動的人民戦線運動におしこめられてしまうことである。(仏の5月にその典型例)

何故なら、大衆は国家権力のファシズムの性格を知らず、正に自らが、闘っている段階の質と規模が「半蜂起」であり、中途半端性が許されないことを知らな

いからである。ロシアの2月ですら、一九〇五年を経験した組織されたプロレタリアートの中核とその経験があったのである。かつ半蜂起を媒介にして起り得る新たな事態への対処にも無自覚なのである。

第三に諸仏5月革命派や、ブラックパンサーの如く、革命的昂揚から革命情勢を切り開き、連続的に世界革命戦争、内戦を切り開く、革命的戦術とそれに向けて準備する党建設等「現代帝国主義国家と世界革命」に於ける、ロシア革命とレーニン主義、独革命、仏革命の総括、或いは、毛沢東、ゲバラ路線等の国際共産主義運動の総括をなし切れず、また、この次元に於ける敗北の総括を問題にする所まで階級成熟に見合う経験がつかれていないこと、即ち先進的大衆であるから

だ。彼らは、下の全く若い未経験な巨大な戦闘性と他方での権力のファシズム化に對して、自己矛盾し分裂せざるを得ないのである。

必要なことは、労働者人民の帝国主義政府打倒の鋭い自然発生的戦闘性、他方での大規模な先進的大衆の自己矛盾し倒錯としてある自然発生的全領域を危機に於けるなし崩しのファシズム化に對してその自然発生的性が「半蜂起」であり、「デモ」よりは著るしく大きく、革命よりは小さい「中途半端性」に對して、中途半端な党の指導はなく、世界革命戦争と内戦の突破口として、意識的な完全な武装蜂起でもって、(ロシア10月蜂起の如く革命情勢の決着としての武装蜂起ではない)闘争指導性とその準備を、全ゆる自然発生的性、経済主義組合主義との闘いと一体に貫徹することを、まず党自身が意志一致し、再武装し、党自身が準備し、大衆を上から組織化してゆかねばならぬことである。

この時の党の、先進的大衆(組織されたプロレタリア)大衆の、結合のあり方は、最も意識的な党と最も即目的な戦闘的大衆とが直接結合し、党自身のヘゲモニーとしてある先進的集団が、前衛と大衆へと分裂する関係に立つのである。

だが党と大衆との直接的結合を通して先進的集団は、組織されたプロレタリア本来の姿に還るのである。党はこれを、前もって予見しなければならぬ。

さて問題を結論から述べたので、読者への混乱を招いたかも知れない。整理してゆこう。

③ 革命的昂揚から革命情勢への過渡の特質と意識性革命的戦術と党の再武装・改組について

我々は、革命的昂揚から革命情勢への過渡を主体的に以下の基準で設定する。第一に、現代帝国主義の運動の独特な在り方を大雑把に第一項で扱ってきたが、恐慌と戦争の不可避性が増々鮮明に予見されるが故に、かつ他方で、これまで、進行し、累積された矛盾の爆発が同時に予見されるが故に、敵階級と権力は、恐慌と戦争以前に恐慌を回避し、戦争をより有利に計画的に行うべく、その爆発が意識的組織的なものと発展する前段に於て、分解し解体すべく、これらの諸条件がすくられて、国際的権力再編の一環として行なわれぬが故に、国際的権力の同時的権力再編と軌を一にして、矛盾の先行的なし崩しの解決即ち先行的なし崩しのファシズムが回避されること。だが同時にブルジョア陣営内部に不決断が満ちし、これを不満とする、次の時代を代表するファシズム派がすでに抬頭している一時期。

我々はその前に、革命的昂揚から革命情勢の過渡自身の掌握の方法について若干の立場を表明しておく。

我々は経済決定論でもないし、革命主義でもない。第一項で述べた如く現代帝国主義のなし崩し統制経済化―市場再分割から矛盾が累積していること、しかも、それ等が攻防の弁証法に媒介されているが故に、革命的昂揚から革命情勢への過渡は、経済矛盾を基礎とした権力とプロレタリアートの成熟、攻防関係等、そして主客を主体において統一する党自身の成熟度等の攻防の弁証法を踏えてのみ設定されるのであって、「恐慌はいつ頃からか」「戦争はいつ頃からか」等危機待望―待期主義とは全く無縁である。それ故、我が同盟内の帝国主義のタイプ分析を軸にして、没落帝国主義からの恐慌↓日本は強い↓仏恐慌から世界恐慌を媒介しての日本恐慌の開始と革命―それまで準備等の右翼日和見主義の経済主義者や、旧マル戦、中核等の左翼危機論主義とも全く相異なるのである。かかる危機論派は、帝国主義の何と一貫して闘うかがわからず、危機が来て来なくとも、いずれにしても、完全な日和見主義的体質を露呈するのだ。

④ 労働者、人民の種々な個別政策に対する闘いや、経済―政治闘争が一体化し、その体制打倒の本能的動きを帝国主義政府打倒として表現する時期、だが彼等は「如何に打倒するか、何を準備するか」「打倒して何をやるか」を学んでいず、自然発生的であること。

そして彼等の帝国主義政府打倒の動向は中央権力に対する事実上の「半蜂起」

この時点での大衆の高次な自然発生的性と結合し、それを完全な計画的な武装蜂起として準備し、権力の武装解体の上に世界革命戦争と内戦の闘いと、蜂起を最後まで貫徹し、権力を解体する武装力即ち世界革命を保持する機関即ち臨時革命政府を樹立しなければならぬ。政府問題に於ける、現代革命の別れ目はここにある。そしてこの臨時革命政府の性格は、徹頭徹尾世界革命戦争の闘争司令部でなければならぬ。即ち米、西独の同時蜂起とソ連・ワルシャワ軍解体を機軸とし中国その他後進国革命派の解放戦線運動を世界革命戦争に発展せしめること、即ちそのものである。何故なら安保、NAT国軍の国際反革命軍団に勝利することはないからである。

他方での組織されたプロレタリア内部と統一戦線の中に巨大な自己矛盾が発生する。即ち、平和デモ、でとどめられず、半蜂起では中途半端で武装蜂起以外にないところの、だが、その武装蜂起は巨大な飛躍であることに於いて、それ故、統一戦線は半解体状況であり、過去の左翼修正主義党派との前衛党との、党派闘争が大規模に進展する一時期。

④ 党自身も、かかる攻防に於いて、権力の武装解体抜きには領導し得ず、又その武装解体の成功自身は、権力の解体、首都の制圧を基礎に世界革命戦争と内戦の突破口としての完全な計画的武装蜂起抜きには保証されないこと。党と先進的集団のこのジレンマはまず党の前衛によって党自身の不徹底性の一掃から始められねばならない、まず党自身が蜂起と世界革命の一切の準備を確保しなければならぬ。革命軍事委員の設置と軍事部による共産主義突撃隊の獲得、世界同時蜂起に向けての在外B建設を媒介として世界革命左派協議会と世界革命戦線政府の計画、地区への差別Sの再編、共青の政治組織軍団化等々、PB―都道府県―地区―経Sへの軍事系列の形成、共青の地方軍、ゲリラ軍としての訓練と再編、そして非合法体制の整備と世界革命戦争に備えての赤軍形成の準備。我々は全共闘・工評の自衛武装力、或いは個別政治闘争における個別闘争即ち突撃隊をそのまま、共産主義突撃隊に横流的に組織することはできない。かかる共産主義突撃隊は

市民社会深部の諸階級の抗争と武装から生れながらも、あくまでも自己利害的防衛力でしかない。我々は徹頭徹尾軍事部と中央人民組織委の協力の下、軍事革命委直轄の武装蜂起を実現する党中央直轄の共産主義突撃隊を大規模に募集し訓練しなければならぬ。

これは、改党の、自衛武装力とも違う、独赤色戦線や米E・Pの突撃隊や解放戦線の闘士とも違うところの世界革命戦争と内戦の突破口としての武装蜂起を貫徹する最も英雄的で最も献身的な戦士から構成されて行かねばならぬ。党が宣伝と組織の、そして合法の党から、軍事を合わせもつ党へと脱皮しなければならぬ。かかる党の方針を媒介する共青は急速に軍団へと昇められねばならぬ。我々の党と中間的政治組織の組織形態は工場ストや選挙の党でもなく、世界革命戦争、内戦、武装蜂起を全ゆる困難の中でやりとげる党である。

そして経済主義者との闘いの中心は、その核心において「蜂起が先か、ソヴィエト形成が先か」という一見奇妙な論争に煮つまざるを得ない。彼らはソヴィエトができて、二重権力の決着としての蜂起を設定するだろう。だが彼らは「ソヴィエトが如何にして形成されるのか」に思えない。そして最後に彼らは過渡期に於ける武装蜂起抜きに、ソヴィエトが形成される論拠として国家自動崩壊論を展開せざるを得ないのである。中央闘争を永続化すれば政府危機→政治危機が形成されるという全くあてないブチブルの願望を披露するのである。

かつて一九七〇年代初期、独共産党一國主義→社会ファシズム論でもって、事態を不決断に引きのばし、ナチスのクーデター革命から一挙的、共産党→社民→労組の解体が白日夢の如く展開し、強大を誇った三百万の独共産党が2週間の内に崩壊したのであった。或いは、仏・スペインに於て、大衆の自然発生性と半蜂起の不徹底性から急進ブルジョアとの連合政権権力→人民戦線政府運動に集約され、その政府の手によって労働者の武装力は解除されてしまったこと。

更に一九七二年の伊においてグラムシ派がトリノを工評運動を通し制圧し、ムソリーニ→ファシストと同量の武装力を保持しながらも、ローマ進軍→ローマ蜂起を計画することなく、ファシストによってローマ進軍が実現しトリノが陥落されてしまったことを想起しなければならぬ。レーニンの帝國主義論の欠陥→「世界党→世界赤軍→世界革命戦争」の欠陥→飛火、二段階の残滓からロシア革命の一九一四年の危機、2月の指導力の喪失、7月危機に対する無指

化を基礎に日米関係の改変を提起し、決定的弾圧を準備している。そして、今前二者と権力との攻防、他方でのファシズム派は下部から、世界革命派との対決を準備し、権力に対しても反撥を潜ませている。かかる性格を持った攻防は、朝鮮侵略→ファシズムへの権力再編を決意せずには、決定的な取捨の方向を見い出せない、という決意を覚悟せしめつつある。⑧他方反帝統一戦線をして、世界革命戦争→内戦→武装蜂起を覚悟せしめつつあるし、⑨ファシズム派をして自衛隊内部の中核として、民間→都市小ブル、農民、公明右派、極右学生等をして、権力の対応のまずさ如何によっては、いつでもクーデタをも覚悟させつつある。

今や安保紛争、維持の攻防を安保闘争の攻防を越え、朝鮮侵略反革命か、それとも世界革命か、ファシズムかプロ独かに、その頂点の攻防の質をかえ、権力の存亡の問題として提出されつつある。人民の全世界的な不満は今や安保を媒介されつつ、佐藤帝國主義政府の存否の決断にまで突き進みつつある。「安保紛争の潮流はまごうことなく、大規模な、正に、デモよりは著しく大きく、革命には小さい闘争」を今秋、10・21訪米時を活動環に準備しつつある。客観的には半蜂起とも言える今秋の決戦が権力にとって、これを粉砕し、ファシズムと侵略、侵略の道につらなる最短コースであり、人民の側にとって、この粉砕を通して、世界革命戦争と内戦の突破口となる大転換点となることは確実である。

だが、これを指導し組織する革命党の不在は、下部の運動の規模と急進性を拡大し深化させつつも、権力の暴力装置の壁を打ち破ることができず、安保闘争、全共闘M、自衛武装、内閣打倒、中央騒乱に付られ、その索引指導政党と先進的プロレタリアが、つるべ打ち的大量逮捕→長期拘留で著るしく結集力を欠いてきている。四・二八の統括として権力解体をめざす、党直轄の武装部隊の建設、労働者の武装が総括されてはいるが、これ自体正しくて、どうしても何かがたらないことは否めない。党と先進的プロレタリアがかげきれない事態は何も、革命的部分に対して何も命が惜しいわけではなく、最も本質的な飛躍に於ける、党の再武装が要求されていることを直感的に感じていることにある。全ての先進的集団が閉鎖的なシレンマとヒステリー状況におちこんでいる。このことを少し考え

てみたらいい。技術的にも、これ自身が武装しても、権力のより大規模な弾圧のエスカレートに粉砕されるであろうことも事実である。正に「半蜂起」に発展しつつある闘争

導、内戦の一國性と革命の退潮に対する左翼小児病による、大衆追従とネップ政策等のレーニンの欠陥は、今こそ発展的止揚され、レーニンの右翼的教条化とその創造と称しての、人民戦線や工評運動を持ち出しても事態の解決にならない。或いは毛沢東→ゲバラ主義に於ても、世界革命戦争を展望しての解放区→ゲリラ運動が都市蜂起を媒介に、一挙的世界同時革命の地区拠点化への展望の喪失は、それが極めて創造的でありながらも、多くの限界性を持ち、その路線を先進国に於てはめた場合、右翼経済主義が労働運動を獲得する能力がないという経済主義的批判と反対に、武装蜂起抜きに都市騒乱主義のサンディカリズム運動に転落するのである。我々は決してソヴィエトが自然発生的にできるものでもなく、権力の解体と人民の武装蜂起の過程で養われた武装力を基礎にしてしか、そしてその武装力が次の内戦と世界革命戦争とその決着としての武装蜂起の内実をもたないかぎりソヴィエトは形成されないものであり工場ソヴィエトも又同様である。

第二節 マルクス主義と蜂起

一 党の蜂起

▲一▼ 佐藤訪米をめぐる階級攻防の質、深さ、広さ、それは何か、①佐藤帝國主義政府は今秋沖繩の帝國主義的奪還をめざして、米ブルジョアージのトボス交に飛び立つことは、周知の事実である。そして70年安保紛争をめざした諸階級、諸階層と諸政党は羽田実力阻止を叫び、権力は、機動隊、自衛隊、右翼・軍等を総動員しようとしている。破壊法→内乱予備罪が準備されることも必ずである。

全世界の、とりわけ、アジア人民は、沖繩が日米のとりわけ、新たに日帝の朝鮮侵略反革命戦争の一大拠点化するが故に、極めて深刻に重大視しているし、勿論彼等にとつて復讐が問題ではない。かかる攻防の急テンポな進展に登場する勢力が、世界革命プロ独派と人民戦線→秩序派、ファシズム→戦争派であることは、言うまでもない。権力はファシズム派と結託し、人民戦線派を内部分裂せしめ、世界革命派を孤立→解体→せん滅させるべく、沖繩奪還→自主防衛力強化の拡大を唯一導ける展望は、計画的な武装蜂起の実現による首都の制圧と全国蜂起→同時に西独の蜂起を実現する、中後進国の武装解放闘争の永続的発展の飛躍の総体としての世界革命戦争の開始を通して、連続的内戦を展望する以外にないことである。

ひるがえってみれば、四・二六、B・Sのワシントン占拠計画、仏の再度のカルチュエタン、西独SDSの軍隊解体闘争、朝鮮の七〇年危機、北鮮武力統一、中進、後進国の政治危機、世界同時革命→世界革命戦争の開始の間隙にと、世界階級闘争は致達しつつあるのだ。問題は自らを世界党へと昇めんとする、各各の自國に於ける武装蜂起の完徹を通して、世界革命戦争の突破口とし、自らを世界党に名実ともにせんとするが各各の力量の弱さに、どの党に於ても実現し切れていないところにある。どの世界革命左派をもが、狼を恐れて森に入らない、ディレンマに立たされているのだ。

我々は現代革命の理論、革命党建設で武装し、決定的な準備を今から直ちに開始しなければならぬ。我々にはかかる大転換点を離れて、党一般の強化や、その武装蜂起のオン・チャペリを行なうひまはないのである。

▲二▼ 十月蜂起とレーニン

右翼経済主義や中間的右翼経済主義Mの我々の態度は前節でのべた。左翼中間主義者の世迷いごとの論拠を検討してみよう。彼等の論拠はロシア7月攻防に対するレーニンとボルシェヴィキの完全な模倣である。その第二は、党の階級攻防の転換点に対する在り方である。

△党とは何かということである▽△これは実は一つのことである(本質的には)▽勿論左翼中間主義者らしく、今秋の訪米をめぐる、大転換の性格についてはそれなりに認めるのである。その前にレーニンの蜂起の成功を修める為の条件について、彼の考えを検討してみよう。「蜂起が成功を修めるには陰謀や政党内に依拠するのではなく先進的階級に依拠しなければならぬ。これが第一である。蜂起には、人民の革命的昂揚に依拠しなければならぬ。これが第二である。蜂起は成長しつつある革命の歴史のうちで、人民の前衛の隊列の活動性が高まったとき、敵の隊列が弱く、中途半端で、他方味方の隊列のうちで巨大な動揺が生まるような転換点に依拠しなければならぬ。いったん、これ等の条件が備わった

ら、蜂起を技術として、取り扱うことを拒むものは、マルクス主義を裏切り又た革命を裏切ることである。

〈マルクス主義と蜂起〉

これは、十月武装蜂起を敢行する一ヶ月前のレーニンの考えである。佐藤訪米時の大転換時の質が殆んどこの三つの条件を有しているのである。成程、ロシア10月の規模と質から見れば、その特質は同じでも違った質であることはそうである。

だが、我々が問題にしているのは、その特質の共通性である。

第一は、反戦、学生、高校生等の層であり、4/28闘争のなかで、より急進化することを望んでいる層である。この層と質の拡大は秋を指してより一層大規模に拡大して行くに違いない。第二は、昂揚は安保闘争の頂点に迫りつくである。第三はこれこそが、重要であるが、同盟の再武装、敵の隊列は確かに4/28では、ゲバ棒闘争に強かったが、共産主義突撃隊とその武装によって闘われた時、彼らは混乱し、弱く中途半端であろう。ブルジョアジーのファシズム化に対して我々の方が先制的であるからだ。味方の隊列の動揺が強まる時、これは安保から世界革命一プロ独一武装蜂起に踏み切る地点の不可避の大規模の動揺である。これに加えて、我々は現代の2月が、自然発生的には不可能であり、かつ大衆の権力に対する死を持つての憎しみが、未だ形成され切れないこと等の自然発生的性に対して、決定的に大規模な動揺過程に何を準備するかを持ち込み、革命的前衛と、若くは最も職間的な心士との結合を意識的に推し進められねばならない。我々はレーニンが、ボリシェヴィキ中核と対立しても、或いは彼らの不決断に対して、「動揺者は、そこに残しておく方が、断乎たる献身的戦士の陣営におくよりも、革命の大業にとって有利である」と決断し、彼らが、赤軍兵士の所へ直接オルグに行ったのである。これは弁証法なのだ。「下」が動けば「上」は確信を持つのだ。レーニンは別の機会にこのようにのべている。「生命の中核」「革命の救いの源泉」と、その工場や経営にボリシェヴィキの誰れもがゆくべきだ」とものべている。

だからレーニン自身、10月を展望したものでなければ、意識的なものではなかったのである。ボリシェヴィキの生き残り組みは、コルネーロフ反革命に死を決意し、立ち向い再び、労働者の信頼を獲得したのである。

我々は七月デモの際、決定的な武装蜂起を見通し、次の反革命との対決を、世界革命戦争の連続性の展望の下に、断乎たる決断が必要であったのだ。その意味に於いて、過去の二段階論＝飛火革命論は、この地点で決定的な危機を創り出したのであった。決定的な転換点に対して党は対決を回避してはならず、先頭に立ち、次の反革命に対決する階級の成熟を主体的に自らを鍛え上げねばならない。

〈三〉 政治過呈、蜂起の時起、その準備

我々は、蜂起の時期が佐藤訪米以前、訪米が延期されたなら、佐藤帝國主義政府の存続時にハブツ倒れる以前にVと考えている。

これは、政治過程の焦点に蜂起を合せることを何ら意味しない。従って大衆闘争の延長線上に、蜂起を設定する思考とは全く無縁である。我々が、かかる基準を設定した意味は、今プロ独か、ファシズムかの対決の開始点としての大転換が、訪米を媒介に、形成されていることに他ならないのであって、訪米が何らかの原因で引きのばされた場合、佐藤内閣が解散するという場合、正に又、そこで、転換が問われるが故に、訪米と佐藤の解散は本質的に同じだからである。今秋、何らかの契機に於て一挙に大転換は構成される場合も十分考えられるのである。それ故、我々は、かかる階級攻防の質に於いて、統一し、いついかなる時でも蜂起にとりかかるべく準備を行わねばならぬ。これは、正に党に於いてのみ可能な任務なのだ。

蜂起の時期については、レーニンは「労働者や兵士、大衆と接触している人々の一致した発言だけが決めるもの」と述べている。

〈四〉 プロレタリア革命政府樹立のスローガン

蜂起を現実の日程にのぼす段階に到達したが故に、我々は、これまでのスローガンのなかに、「プロレタリア革命政府樹立」のスローガンを公然と打ち出さねばならない。そしてプロレタリア革命政府の最大限綱領と最小限綱領を用意しな

〈三〉 〈七月危機とトレーニンの誤り〉 左翼中間主義者

中間主義者は、転換点であることも認めながらも、④党が対決を回避させようとするれば、転換は小規模なゆるい性格のものになる、⑤大衆的ゲバ棒闘争、⑥その間に次の転換点に向い、武装蜂起を準備し、党建設をはかるべく、非合法を強化する。

何と、理路整然としていることか、何と死んだ形而不学だろうか、非弁証法の全くの俗物の論理、

その根底には、党の無内容な統一と防衛の願望があてられている。
① 大衆が否応なく死を賭して闘わんとしに待てといひ、武装蜂起をケイモウし、党要人は地下へ、これで、大規模な先進的大衆と結合することができようか。

② 敗北した大衆はもう信用しないだろう。よし、弾圧を幾人かが避け得たとしても、党が信用され得ないことはよし、いいにしても、4/28で経験した権力の反動化と下からのファシズムの二重包囲のなかで、党は消え、中核なき水ぶくりの大衆のその後の拡大は、権力に圧殺され、ファシズムが登場するという革命の裏切りにも通ずる行為なのだ。

解体した大衆と潜った党が再び結合することはないし、結合したとしてもファシズムに対して対抗し得るわけではない。だが、彼らはだが、「レーニンはそのようにして革命を行った」

ところでレーニンは7/4の「デモ」に対して「デモよりは著るしく大きく革命よりは小さい何か」と位置付けたこの「デモ」は決定的な転換点であった。ケレンスキーは改権へのメンシェヴィキ・エスエルの加盟を通じた6月攻勢の挫折と連立政権の崩壊と他方でのコルネーロフ反革命の進展、ソヴィエトの右翼的解体と下部戦闘的労働者、兵士の武装蜂起の要求、この意味では、二重権力は崩壊し革命と反革命の出発点であったのだ。ボリシェヴィキは「平和デモ」の方針を貫徹しはしたものの、大衆から裏切りものとのしられ、その後、大衆から完全に離反し、ケレンスキーからの大弾圧が進行し、トロツキー等ボリシェヴィキ大多数は逮捕されたのであった。

しかも、レーニンは、権力の平和移行を信じ次の反革命を予見してはいなかった。

ければならない。我々は自己の終局目標を人民と公然と語ることができ、それが労働者の共感を呼ぶことを確認しなければならぬ。

ただ党に於いて、より現実的な蜂起を通してのプロレタリア政権樹立までの過程が臨時革命政権によって荷われることも確認されねばならぬ。

〈五〉 蜂起は技術であること

① 決して蜂起を持って遊んではならない。

Ⅰ 何から整理しなければならぬか。

4/28闘争の攻防、そしてアスバック闘争に於ける一見混乱したかの如くみえる(実は、我々にとってはなんの混乱もないのだが、混乱した頭脳には混乱にみえる)、事態は、同盟と心ある先進的プロレタリアにとって、「今までの様な型では闘えないこと」や、同時に、より深刻に安保決戦の集中環に佐藤訪米に煮つさり胎現される、決戦と階級闘争の大転換の不可避性が増々自覚され、かつこのままの型では、大敗北をきつすることが火をみるより明らかであることが自覚され始めた。我々はそれらについて前もって指摘しておいたし、混乱を最小限にとどめる活動に全力をあげた。

我々はかく主張した。我々の主張の基本実践ポイントの環はほぼ、以下の点であった。

- ① 「プロ独か、フアンズムか」の前段階決戦としての、安保攻防とその佐藤訪米時に煮つさり、それ故の、革命情勢の決着点ではなく、それから出発点である。世界革命戦争と内戦の突破口としての武装蜂起の実現。
- ② 工場、学園、地域における労働者階級の革命的ヘゲモニー形成とその戦術としてのヘゲモニー一般や、全共、工評連動、地域階級の労働連動等M、etcは、これら一般として物化されて、自己目的的に形成されるのではなくて、武装蜂起と、それを貫徹する党の運動、存在と独自の武装蜂起への準備運動(これは初期は反戦、最近共青、そして今後は共産主義突撃隊の、中央―地域に於ける運動の保証と、それを基礎としてのみ形成されること。革命論の次元では、武装蜂起を媒介してのみ、ソヴィエトが形成されること。又ソヴィエトの持続も、党と武装蜂起世界革命戦争を闘う世界赤軍の存在の上に可能であること。その逆ではないこと。即ち、全共、工評運動の自己目的創造の上に、武装蜂起

のである。それ故、これ等と不可分にある「工場、学園、地域」に於ける戦術、党と軍事、そして、世界党、世界的共産主義突撃隊建設の総政治組織路線が内在的ではなく、機能的にしか理解されてない。

又、これ等と一体に、「蜂起の準備や、その技術がどれまで進んでいるのか。」「党の再武装―分裂か否か」の臆測と結びついているのである。又、ここから「大転換点と蜂起」に対する蜂起を導く党の問題が、党一般の政策論争として終えんし、抽象論争に終る傾向を有していることである。

我々は、攻防の弁証法からの「強制的判断」を追いつつも、それらまで含めて、内在的に説得すること。即ち、現代革命に於ける意識性の問題に、再び立ち返らねばならぬ。何故なら、我々にとって前提でありながらも、実は、この「現代帝国主義と過渡期世界」↓「現代帝国主義国家と攻撃型前段階蜂起と党の任務」が、明確に理解されきていないか、混乱しているのである。そして、「経済主義―日和見主義―解党主義」は、最終的にこの否定に移るのである。又、このことに確信をもたない以上、我々すらも動揺するのであり、決定的な意識的決断は、単なる大衆の動向や、攻防の段階等の攻防の弁証法のみからでは決して生れはしないのである。

- ① 「前段階革命」↓「党による計画的武装蜂起による、大衆の安保闘争の権力闘争への領導」
- ② 「武装蜂起を媒介してのみ、ソヴィエトの形成」かかる観点からの共産主義突撃隊建設を、目標とする、工評、全共Mの指導。
- ③ 党と軍事、武装蜂起を目指す、共産主義突撃隊の大規模な建設等の、現代革命の核心を、現在の攻防の弁証法と合せつつ、そして、種々の反論とを合せつつ、把えなおし、確立しなおそう。

これら三点の、現代革命の核心も、実は、その根源を「現代帝国主義論」を踏まえた「現代帝国主義国家と市民社会」の総体を踏まえた「国家と世界革命党」の問題にあり、そこから、①↓②↓③という順序で整理される性格のものである。

我々は「現代帝国主義国家と、攻撃型世界革命」の論文を発表したが、この点を踏えて、当時はまだ論争が煮つまらず、あるいは、我々自身が核心点を設定しきれず、主張が若干ばやけていたと思うので、より分り易く整理して述べよう。

(中央権力闘争)が成立するものでもなく、中央権力闘争と、マッセンスト、二つの荷い手による、両者併行の組織でもないこと。前者は〇〇派であり、後者は××派である。後者の主張は一見あたりさわりなく、正しくみえるが、これは結果現象を結果現象として把えただけにすぎず、主体的にこたを生産し、再生産する荷い手自身の形成とその質において全く欠落し、その意味に於いて実は前者と同質なのだ。反戦闘争―中央権力闘争―武装蜂起を生産するものが、自らを生産しマッセンストを生産し、全体を生産するのだ。それ以外の荷い手が再生産するのではないのだ。

③ レーニンの如き、全国政治新聞を軸にした宣伝と組織の党と、宣伝と組織の先進的プロレタリアの政治的質を軍事にこれらが結実される党と、その党による武装蜂起を貫徹する党直轄の共産主義突撃隊―革命の軍隊の形成、先進的組織の軍事組織的收拾の拡大、に向け大胆な党の改組を計る事である。ところで、現段階の混乱状況の中心点は、佐藤訪米時の大転換に対処する武装蜂起の主張が、「抜きさしならぬ攻防」という攻防の弁証法の次元からのみ、武装蜂起の必要性が論じられる傾向、それ故に、問題を真剣に考える同志にとって「半ば強制的決断」を強いてる様な現状がある。

だから、この反論として、攻防の質成熟段階に対する技術的、状況論的には「国家が弱いから安心してゆこう。党を作って成熟まで待とう。」「国家が強いから粉砕されるから、党を作って意識的に次の機会まで準備しよう。」の五〇歩百歩の反論がなされる。又、大衆の状況、正確に言えば「巨大な自然発生が昂まりつつの、権力に対して武装してない任務」「闘争の時期、現場と市民生活とのアンバランス、後者の倒錯的な状況」に対して「自然発生性がある」と言ったり、「ない」と言ったり、或いは「諸階級、諸階層毎」の問題から論じたり、闘争と市民社会との一部の関係だけを強調したりして、より混乱したりする

Ⅱ 佐藤訪米時に煮つまる大転換点に対する二つの経済主義―日和見主義的対応

前段階的決戦を、一般的に認めながらも、実はそれを待期主義的経済主義なものに修正したり、不確心であったり、或いは完全に古典的レーニン主義の戦略―戦術(受動型)を持ち込んで否定する傾向は、今や、我々の指輪を軸に、今や佐藤訪米時をめぐる、大転換点と決戦が確認され今までのように闘い得ないことが確認されつつも、それ故、①訪米時の転換点に対する前段階武装蜂起と、②党に於ける軍事指導の強化と、③武装蜂起と世界革命の軍隊を作る、総路線に否定的で、何の方針をも、もたない部分による下劣な活動が、先進的活動家の種々の危惧と折合わされ、たいしたものでもない性格であれ―形成されつつある。この二つの経済主義―日和見主義の対応をみてみよう。

- ① 危機論型帝国主義論を基底に、恐慌を前提的にしつつの国家自動崩壊論と大衆の自然発生性を過大評価する部分であり、
- ② 現在の自然発生性の昂揚の延長線上に―恐慌を媒介に―革命情勢が到来することを錯覚している部分であり、
- ③ それ故、戦後体制が、計画的な前段階蜂起抜きに、自然発生的に(正にロシアの2月のように)崩壊すると願望し、
- ④ 恐慌時に向けて、将来の革命を宣伝し組織し、実践的に職場、学園で、「権力の社会的再編と闘い階級の労働運動、階級的学生運動」を開こうとする部分であり、党と軍事に無自覚かつ、革命の軍隊建設に一切の政治組織活動を集中する路線に、労働運動主義、学生運動主義を対置し、党建設に於て、主界革命戦争、内戦の実践的指導ではなく、低い大衆Mの指導と「深化した認識」の啓蒙を大衆に強要することだと思ひ込んでいる連中である。実際は大規模な訪米時に煮つまる大転換と攻防に武装解除し、即ち前段階決戦―前段階武装蜂起を、事実上否定し、待期主義的恐慌前段階決戦に修正したグループである。

これ等のグループは、〇〇派と、××派である。これ等は、前者に於ける吉本国家論と組織論(大衆―自立―組織論)と、後者

の危機論帝國主義論からの戦略の相互補完である。前者は戦略論をもたないが、全く不備である(直観的には、××派と同じである)。後者は完成された國家論や組織論をもたず、我々のそれをひょう切するか、生の彼等の経験から生れた困り込み労働運動主義であるが故に、前者の自然成長的組織論と全く等質である。彼らは一見、全く別種にみえつつも、実は相互の持ち分でもって補ない合っているのである。

そしてその第二は、革命的な関西地方委のかつてのほんの一部の古典的レーニン主義(受動革命派)派とも言えるグループである。彼等は問題の立て方は、根本的に最初のグループと違いながらも、実践的結論に於て同じ経済主義—自然成長論—解党主義であることには変りはない。

① 古典的帝國主義論を基底に、排外主義國家論と大衆の自然発生性の過小評価。彼等にとつては、ロシア2—10月の革命情勢は遅かに遠い将来である。

② 彼等の革命論の核心は、戦争革命論(それが戦争中か後かは別に)であり、それ故、彼等の願望する所のかすかな革命情勢のさざしは「朝鮮侵略反革命戦争を革命に」である。

③ 彼等の組織路線は、我々の旧来の革命的昂揚期の一時期の一戦術であった、排外主義粉砕、階級的労働運動である。(実は極めて労働M主義的なそれ)そして安保闘争を中核系等とは違つて、単なる権力闘争と切り離された排外主義粉砕闘争である。

④ そして彼等は、党と軍事よりは、宣伝と組織だけの党と、革命の軍隊作りではなく、ストライキ(マッセンストでも、ゼネストでもいい)の準備としての「労対」活動の強化である。彼等こそ、前段階階級戦を完全に否定するか、「朝鮮戦争の国内危機への転化」を、かすかにとどめているグループである。

これら二つのグループは佐藤訪米時に煮つまる攻防に何んの準備もなく、従来通りの大衆的ゲバ権闘争で対応し、完全に打ちのめされ、解体されるかそれ以前に、戦線逃亡、「平和デモ」に転落するだろう。

Ⅲ 前段階蜂起—革命の軍隊—共産主義突撃隊—攻撃型世界革命—軍事を備えた党—

マイル体制、シヨータン・グラティエ、米—フーバー、日本—政党政治。この場合革命情勢は、列強ブルジョア相互権力とその制度の未確立故、過剰資本の恣意的処理は不手際であり、それ以上に彼等は本能的なむき出しの自国の直接の利害を追求するが故に、恐慌と戦争体制の急速な準備から、革命情勢が生れている。かかる経済危機と既存戦後体制の動搖のほかに、危機の根本的解決をめぐって、プロ独—世界革命派—民主主義—秩序派—ファシズム—戦争派の三つの潮流に大きく市民社会は分裂した。市民社会の分裂と諸階級層の独自の利害追求は、國家権力の弱体化をも伴ない彼等に独自の武装集団を与えた。かかる三つの潮流と武装運動は、まず既存体制を破ることであり、同時にそれと一体に、他の潮流の粉砕であった。29—36年、謂ゆる前段階階級戦「半蜂起」の事態を作り出している。ここにおける世界プロレタリアートの敗北は、独ナチス、仏人民戦線、米ニューディール体制、日本農本ファシズムの成立へと事実上決着付けられていっている。かかる過程に於て、中国は、日、米、英の強盗分割戦にさらされ、かつ民族解放—土地解放運動が、反動的ブルジョア民主主義運動(汪精衛から蔣介石)と共産運動に分裂されるなかで、毛沢東と中国共産党は、広東—上海蜂起の挫折を総括しつつ、井冈山を根拠地に、反包圍討伐—紅軍建設—解放運動—長征—抗日—統一戦線運動を進展させた。中国共産党の即自的なものではあるが、現代的意識性の萌芽は、④政治的なるものを軍事的なものにまで昇めた政治的展開、⑤党と軍事、革命の軍隊に込めたことである。

独、仏共産党は、自國帝國主義打倒、ベルサイユ体制打倒を、世界同時革命—世界党建設に於て統一することなく、前段階革命を自覚せず、それ故、党に於ける軍事の強化と、前段階蜂起に向けての突撃隊の建設と全人民の武装を貫徹することなく、社会ファシズム論(ファシズムの容認)と選挙に於ける権力の獲得の路線によって敗北を歩んだのであった。独共産党の突撃隊は赤色戦線も、権力奪取の突撃隊ではなく、議會闘争と組合運動に於ける、権力とナチスからの防衛運動にその任務があった。仏の人民戦線運動は、ファシズムの弱体化故、議會主義路線を頂点にまで登りつめたが、レオンブルムとトレーズは労働者階級の武装を解除し、獨帝國主義との闘いを強要したのであった。

スペインの人民戦線は、仏と相違し、労働者の武装を基礎にして形成されているが、この闘争は、獨共産党が世界政治の焦点に立つことに

現代革命の核心

現代革命の核心は何も深エンなものでもなければ、まわりくどいものでもない。その核心は上記した三点にある。ここではこの三点に絞られる、中心点を導く「國家と世界革命」の問題を切り確認し、三つの内的諸連関を明らかにしよう。

(一) 第二の世界革命の波と前段階世界革命—

我々は第三の主界革命の波と前段階世界革命への無自覚からの独仏プロレタリアートの最大の敗北を機軸にした世界革命の流産と國際共産主義運動のみじめな破産を経験している。

コミンテルンの指導を離れた毛沢東と中国共産党のみが、唯一地方的共其主義として、經驗主義と適切なプラグマチズムによって、中国革命が成功の途についてたのみであった。それでは、一九二〇年代末から三〇年代を襲った、第二の世界革命の波の政治、経済的根拠と國際共産主義の総括を概括してみよう。この時代、現代帝國主義の独特の運動は、レーニンの分析した「帝國主義論」の運動から、現代帝國主義の独特の運動の過渡期であり、現代への萌芽を現現していた。

そして労働者國家もまたスターリニストレジームとテルミドールの反動は、過渡期であり(その成立をトロツキーの追放とブーリン、ジューヴィエフ等の粉砕とみるべきであろう。過渡期世界は半ば疎外され、それへの変質の過程であった。それ故、当時の國家と市民社会は、その段階の帝國主義と過渡期世界に対応していたといえる。だからこそ、一九二〇年代末から—恐慌—戦争も、帝國主義の不均等発展—市場切分制を直接の基底においていた。獨帝國主義の特殊な性格(重化学工業発達—自己金融—株式—巨大金融独占)とその地理的、政治的、歴史的な最も現代帝國主義國家と市民社会の總体を現代に近似せしめていた。過剰な資本は、不均等発展から、これまでの金を替秩序を容易に打破り、市場再分割戦が米、独、日を軸に展開され、ついに29年世界恐慌—世界統一市場の崩壊—市場再分割戦の激化とブロック化の進展のなかで世界革命情勢が到来した。第一次大戦後体制は動搖から崩壊の極にさらされた。(独ベルサイユワイ

よって世界党—世界革命—世界戦争の路線を、トロツキスト、ボーム、サンディカリストがもつことなく、國際ファシズムと、レ連スターリニストの両面から粉砕されたのであった。これ等一切を指導し、一切を敗北せしめたコミンテルンの路線の基底には、「労働者國家」の成立を根拠とした帝國主義の不均等発展の限界—全般的危機—一國社会主義建設の國際階級闘争の動員の路線があったことは言うまでもない。かくして、ファシズムの成立と人類の巨大な最災厄—第二次大戦が開始されたのである。

(二) 現代の前段階革命—前段階蜂起の階級的意義とその、戦術時期

ファシズムと、侵略抑圧反革命戦争への巨大な反動的揺り戻しに、無自覚でかつ「半蜂起」性格を持った巨大な激突に、党が前段階武装蜂起と革命の軍隊の中心核—共産建設抜きに、武装解除したままのぞむ所の、経済主義—解党主義者の國家の弱強論、大衆の自然発生性の「大小論」をまず検討してみよう。

彼等、左翼經濟主義者は我々の指摘の様に、先行的ファシズム等を指摘しつつも、それに何を準備し、何に闘うかがない故に結局、先行的ファシズム論は口先だけのものになり、自己満足的に現在の自然発生的昂揚の上に、恐慌情勢を接木し、革命の自然成長的發展を願望する。又、在關西の一部の經濟主義者は「帝國主義の専制の強化」を持ち出し、國家を必要以上に過大に描き、大衆の自然発生性を全く過小に評価し、党一般の強化と排外主義と闘う労働運動を基礎にして、朝鮮戦争の開始に革命情勢を設定する。彼らの根本的欠陥は、第一に、現代帝國主義論とそれを基礎にした國家論と、國家と市民社会(自然発生性)の一連の内的連関性に決定的に日和見主義的組織があり、第二に、それと一体に攻防の弁証法を主客関係の指導性を、客体に統一される方向でしか設定しきれないこと。主体に於ける客—主、主客関係として設定しきれないこと。即ち、現実の階級闘争の壁を打ち破る、党と軍事の—共産建設等がないのに表わされるし、かつ敵の分析—敵の強大さだけが、味方階級をこの中で主体的に強化し、遂に敵を弱体化せしめる指導性がないのだ。実は攻防の主体になる統一の党がなく、攻防を敵に統一させるところの、即ち、主体なき統一戦線があるのみなのだ。

在京派の帝國主義論は、その結論が緊密化する危機—仏恐慌—世界恐慌と日本

への土壌(その「自然発生性」は強い)↓これに向けて社会的再編を闘う労働者M、学生Mの集結は急務である如く、宇野浩二の金融流通面での労作を撰取した流れの一派であり、不均等発展と危機状況形成の内的連関性は確立されていない。かかる帝國主義論状況は分つても、何と如何に闘うかはわからず、結局は、現代帝國主義論者となし崩しファンズムII反動的揺り戻し再編の特質が、前段階級戦の「自然発生性」をどう理解しないのである。

又、正論の「自然発生性」論者「排外主義國家—國家の専制」論者が、その見識に於いて「自然発生性」を予見し、それまで権力の平板な反動化として扱っていたのが、現代帝國主義論者となし崩しファンズムII反動的揺り戻し再編の特質が、前段階級戦の「自然発生性」をどう理解しないのである。

我々は、國家の弱い面も、又、強い面も認めるし、又、自然発生性の大小、質の強弱も認める。我々が問題にしているのは、このチグハグな、アンバランスな倒錯した二面性から求めているのかを、どのような関連があるのかを、現代帝國主義論—國家論の総体として捉え、階級攻防の弁証法を媒介とした流れに転換点との関連で定めることにある。単純帝國主義論と危機論型帝國主義論は、既成帝國主義の市場再分割戦、それが貫徹される独特な形態から来る、諸状況の関連のどちらかを、一方を表現しているものにはすぎない。一方が膨張を、他方が國際通貨体制—國際政策等のメカニズムの解明に集れんし、両者の接点を持ち得ないのに対して、我々は、①帝國主義の重化学工業—先進國分業を背景に過剰資本の増大が、固定資本の巨大化とその巨大化の過程が株式市場の成立を媒介に形成され、それが競争の無政府性がこれを通して、一定程度制御され、②かつ、株式市場を基礎に巨大独占、金融資本のより巨大化と、國家の掌握に到り、無政府性の制衡の内在性が全國的規模で揺り、③これらが、帝國主義列強に於いて、同時に、同質性を持って行われることからの國際管理通貨制度の成立に至ったこと、以上、三つの過渡期世界の政治的要素に対するブルジョアジーの主體的要素が加わり、資本は過剰資本を累積し、回転させつつ、対外市場投下を行い得るメカニズムを獲得したこと。過剰資本の累積と回転の結果こそが危機の状況形成するのであり、かつ、市場再分割戦が、なし崩し性が、以上のメカニズム故に形成されるのである。以上の資本と過剰資本の運動は戦争と恐慌を同時一体に、その過程を國際、国内一体の緊密化した危機として形成するのである。

革命的立脚点なのだ。
現に、帝國主義列強と日本帝國主義は自らでもって前段階級戦の墓穴を掘りつつある。

① 自國帝國主義打倒、安保、NATOの解体、ワルシャワ軍解体、ベトナム革命勝利の世界プロレタリア統一戦線は、米ブラックパンサーの武装蜂起計画、仏の再度のカルチエラタン、独の軍隊解体闘争、チェコのワルシャワ軍解体闘争の持続、スターリン主義の分解と反動化、等をもって、世界同時蜂起統一戦線への再編を準備し。

② 日本帝國主義のなし崩しの統制經濟、アジアなし崩し分割は、國際—国内の經濟(自由化)、日米対立、國際通貨制度の動搖、アジア市場の流動、国内産業再編、軍事産業、農業政策、貨金政策、政治(アジア危機、官公労—民間の国内プロレタリアートの安保の連繫、沖縄、階級的労働M、全共闘M、etc)両面に渡って、限界に達し、決定的なし崩しファンズムへの再編(統制經濟、反革命同盟再編、派兵、暴力装置強化etc)を、安保攻防のなかではからんとしている。他方次の一時代をブルジョア的反動を荷うファンズム勢力を登場させつつある。

③ かつ、プロレタリア人民の、巨大な自然発生的揚揚は佐藤訪米阻止をめぐって、「半蜂起」「デモよりは著しく大きく、革命よりは小さい」質と規模に成長し、不可避の大転換を準備しつつあるのである。

佐藤訪米以前の大転換に前段階級戦蜂起をもって、大胆に進撃せよノ世界革命戦争と内戦の、かつての共産主義者も到達し得なかつた地点に人民を導けノ

(三) 武装蜂起と臨時革命政府の樹立

我々は、革命情勢の決着点としての武装蜂起ではなく、ロシアの2月を、これを相違し、現代の3月として、著るしく、意識的計画的なものとして押し進めねばならぬ。

我々はこの蜂起を、「半蜂起」や「デモよりは著しく大きく、革命よりは小さい」ものとして、みてる必要はあるが、究は向もその性格に合わせて開えたいことを決して意味しない。我々は、蜂起を「半蜂起」として、必ず、政治軍事計画を立てねばならぬ。蜂起は、蜂起の蜂起として、我々は蜂起同時蜂起

統一戦線の下に、権力中核機關の解体占拠↓首都、全國の大衆の置ケ因での結合↓臨時革命政府の樹立と全人民の武装、赤軍の建設↓政府要人の逮捕、都市主要分割戦を根源から掘り崩すものとして登場する。

かかる客—主の現代的特性こそが高次の自然発生性—攻撃型階級闘争(平時からの反革命同盟を媒介にしてのプロレタリアートの國際的結合、全共闘武装集團の押出、三つの潮流への分裂の根拠である。だからこそ、現代の意識性の核心こそ、正に平時から主—客の主体に於いて統一する戦略—戦術、党建設論を實踐でき得るし、しなげればならぬのだ。

前段階級戦の可能的根拠とは、なし崩し市場再分割と危機の引き延しに過剰資本の累積をもって本格的な蜂起を展開しない限り、恐慌が蔓延し、プロレタリア人民の國際的連帯とMの深化が、世界革命に発展してこそが鮮明に子見されるのに対し、既存民主主義体制では、これを乗り切れず、かつ、恐慌の回避と戦争の貫徹が危ぶまれるが故に、前もって、なし崩し的、先行的にファンズムへの権力再編とプロレタリアートのセン滅を決定させる時点であり、他方、プロレタリアートは、既存体制には巨大な不満と自然発生性を持ちながらも、それが戦後既存体制の打破であって、来たるべきファンズムや、自己が連続的、一体的に、既存体制とファンズム戦争を打ち破ることに無自覚のまま、いわゆる反乱を開始する局面である。「デモよりは著しく大きく、革命よりは小さい」とは正にかかる内実である。そして、正にこの攻防こそ八プロ独か、ファンズムかVの前段階的決着点としての階級制意義を持つのである。それ故「國家強い、弱い論」は、その前者の側面をなし崩し的、先行的ファンズムへの再編の側面としてあり、弱い面は戦後の意味に於いてであり、かつ「自然発生性の大小」とは、実は戦後体制において反撥するという意味で大であり、次の時代に対処し得るという意味で小なのである。我々にとって、かかる「強弱論」や、「大小論」が問題なのではなく、問題なのは、かかる前段階決戦の可能的根拠を、主體的、攻撃的なものとして、前段階武装蜂起として貫徹し、これを突破口に世界同時蜂起統一戦線—世界革命戦争とスターの解体の主體的突破口を形成することであり、それに向けて、党における軍事指導の強化、世界赤軍の中核—前段階武装蜂起を貫徹する共産主義撃隊建設の實現こそが問題であるのだ。

以上のことこそが、現代革命の核心であり、我々がよって立つ、最も創造的、機關の接収、機動隊、軍隊の解体↓人民の専政↓安保軍との世界革命戦争を、展望しなければならぬ。これに向け数千の共産主義撃隊を今から直ちに建設しなければならぬノ

臨時革命政府は、人民戦線政府の如く、現在の自然発生性に押された、武装力なき政府ではなく、権力の解体↓自らの武装力(「世界赤軍」)を保持したものであり、世界同時蜂起統一戦線の総司令部であり、内戦と世界革命戦争を指導し、大衆をプロレタリア的に統率する政府でなければならぬ。そして真の社会革命の一步を開始する機關である。我々はこれを、蜂起以前にプロ独政府の樹立として大衆に公然と呼びかけねばならぬ。

III 武装蜂起とソヴィエト

(一) —武装蜂起が先か、ソヴィエトが先か—

かつてレーニンが經濟主義者との闘争で遭遇した問題、即ち、「社会民主主義者は、ストライキ資金を集めるところに重点をおくのか、それとも、ツァーリ打倒の戦闘組織を強化するところに重点をおくのか」(何をなすべきか)の古くて新しい、經濟主義者との闘争は、今や、前段階武装蜂起の切迫のなかで、より色彩やかに登場してきた。それが現代革命の粉飾をこらしつつ登場しているが故に、いままでも中途半端で沼地的で、曖昧であったものが、その經濟主義者の正体を如何なく暴露しつつあるのだ。

今、その論争の核心は「武装蜂起が先か、ソヴィエトが先か」として、二者択一をもって提出されている。我々は「武装蜂起による敵権力の解体抜きには、ソヴィエトは決して成立し得ない」と結論する。これ等のことは、かつての、この1~2年の、政治闘争の優位性と個別闘争の革命的展開「や」「反戦闘争の持ち込み」等をめぐっての、「劣対活動」の独自性の位置付け方、地区党と産別の關係、地区反戦と産別反戦、産別左派への指導性、SSLの共青への發展解消、中央人民組織委の意義、等々総じて「中央権力闘争とMST」「党の改組」の領域でとられた、經濟主義者との闘争の集約点であり、結論ともなる性格のものである。前段階決戦の流れや過渡の問題としてある「ソヴィエト運動」とは異なって「ソヴ

闘争に革命戦争に対しては、大衆から離れ、独自に敵の正規軍と闘う能力を持つ部隊がない限り、一歩も革命戦争が前進しないことを意味している。

⑨ 又、このゲリラの正規軍との攻防と勝利の戦役が、人民を勇気付け、団結させ規律付けていったこと。党とゲリラと大衆は、後進国では目に見えない糸で固く結ばれつつ革命戦争は前進するのである。ボリビアの鉱山労働者の反乱を指導した第5インターの「セネスト」工評「自衛武装」路線が職業的反革命軍隊に、一たまりもなく粉砕されたことからの彼の教訓は、我がR・Gが正に党中央直轄で、機動性に富んだ移動軍であることをはっきり確信させる。

我々の革命の軍隊の中核はR・Gは、種々な戦闘拠点を移動し、非合法の拠点を首都の真只中に幾つも建設するのである。後進国の革命戦争が、その革命戦争の開始が明確な時代的区別を持たないのに対して、先進国の内戦と世界革命戦争は前段階蜂起をもって始まるが故に、R・Gは、より意識的、計画的に党中央直轄として派出され、前段階蜂起まで、正に実践のケイコなしに、初戦を闘い抜かねばならぬ。カストロが、タランマ号で87名のゲリラ戦士でキューバに上陸しエンラにたどりついたことに質に於て匹敵し、量と規模に於て圧倒的に凌駕する事業を前段階蜂起に於て貫徹しなければならぬのである。

これは決して、戦前の独共産党の赤色戦線や、伊の工評の戦士、或いは全共闘の戦士等の如く、市民社会内部の利害対立の防衛武装軍団ではなく、かかる武装対立を武装蜂起に於て止揚する部隊であるのだ。独の赤色戦線や、伊の工評の戦士も軍事的には、オチスマムソソリーニの突撃隊に匹敵が、如何せん、その目的が権力奪取と武装蜂起ではなく、選挙と工評防衛であったために、結局、フアンストのクーデターによって粉砕されてしまったことを銘記する必要がある。

(二) 共産主義突撃隊を如何に作るか

前段階武装蜂起の一切の準備とその準備の概観はR・Gの建設に、我々の党活動の一切が集中されねばならぬことは明白である。だが、これは党自身に於て、不徹底で非計画的で、党内に右翼経済主義者の影響や、二股こう棄の再生産論の如き、全くの優柔不断な中間的経済主義者のソレがはびこることを根絶することを抜きにしては始まらないのだが、にも拘らず、我々にとつても、この路線への一切の徹底性との集中組織政策に於て貫徹されない限り不成功に終ることは火を見

しかも職場の細胞や左翼的活動家層は、今、時代の転換に、単に論理的についてゆけなくなっただけではなく、(むしろ論理は主体や生活の反映としてあるが故に、論理は往々にして認めるのである、具体的生活的についてゆけなくなったことに起因し、古い老人組の世代や組合の「左翼的」幹部を動めていた層が反動化し、没落し、若い戦闘的な、肉体的にも、経済的にも決定的な制約をもたない部分が登場し、大規模な新陳代謝の過程にある。若い職場的労働者は我々の「革命」を素直に認め、直ちに戦闘部署につく。妻子をもつた中年層や老人組合は種々な例外ありつつも総じて例の「言わんとしていることはわかる。必要性もわかる。だが現実には……、そして職場から浮いてヘゲモニーがなくなると、或いは最後には「生活はどうなるのか」という反論と質問を受けるのである。このような態度以上にもっと反動的になれば「君達は職場のことはわからないのだ。革命の話しよりは、組合運動の方針を出してくれ」と純然たる組合主義者の反論が返ってくるのである。

今や全ゆる職場闘争の質が、その組織者に於て首(レッド・バード)につながり、「政治主張は生活と引き換え」になる時代である。だからこそ、職場左翼労働者層の決断は、その意味に於て「革命か反革命か」の質にまで極限化しているのである。このような深い矛盾の質に対して、党の任務は、まず第一に、「革命のもっとも大胆な主張とその鮮明性と最後まで責任をもつ方針」でなければならぬことは前提である。第二にこれ等を常に首尾一貫性をもって行うこと。地区反戦の強化、S活動の系統化、計画性etc、そして最後に、第三に「生活はどおなるか」に配慮することである。これは全く応え得ない要求の性格である。これ等に對して我々は「革命家」になることを要求したが、最低限の生活の保証の上に共産主義突撃隊に応募することを呼びかけねばならぬ。逆論すれば、革命と生活を最低限の突撃隊の共産主義労働に於て統一する革命生活を、党とR・Gは保証することである。即ち、宣伝、カンパ、救援食料、闘争場の宿泊、応急、常設兵舎、共産主義労働etc。

現段階の職場の根本的矛盾は個別闘争の革命的展開(全労設M、スト、階級的労働M、etc)が「首と生活」と一体であるが故に、この方針の正当性を認めながら、現場闘争指導者にとつては、根本的質的自己否定につながるものである。

るよりも明らかである。即ち、我々の大衆闘争(政治闘争、経済闘争)への釣りが(党中央一地区一S、機関、党建設の一切を現段階に於ては共産主義突撃隊の建設に集中しなければならぬ。

後者(党建設)の問題については、後述することにして、今はこの共産主義突撃隊の建設とこれに向けての大衆闘争への釣り合いはこうである。

① 政治闘争に於ける組織闘争過程に於ける、現代革命一前段階同時蜂起の任務を宣伝し、ASPC突撃隊や4/28突撃隊の如く、個別闘争毎の突撃隊をR・Gに組織することである。

② 困難なことは、職場闘争や学園闘争に於てどのように形成するかである。我々はこのに於て最も強大な経済主義的思考とその壁にぶちあたると。例の「職場をほったらかしにして、街頭闘争をやつては、いわんや、職場から恒常的にひっこ抜くとは、地区でも同様である。「地区活動がなくなる」といわれる「職場でのヘゲモニーがなくなる、或いは幾ばくか左翼的な突は一番卑劣であまいまいな」右翼的な態度であり、かつ、「正しいことは正しい」と繰り返していると同じような一見わかりきった主張、だが如何なる荷い手が、如何なる質に於て組織するかを慮えていない「街頭闘争を支えるには、これを再生産する社会的再編との闘いが必要だ、そして、これ等の総じての結論は、「労働者がやらないのに、蜂起が成功する筈はない」と、結局、「ソヴェエトが出来て、武装蜂起」の主張に純化されていくのである。

これへの反論は(一)「蜂起が先か、ソヴェエトが先か」で述べたので繰返さな(二)を踏えたらうで、なおかつ我々が、実践的に、この実質的な反論に実践的解答を与えねばならないのである。

③ 再生産論の誤ち「正しいものは正しい」という内容抜きのおうむ返し論法

この二三年「労働運動の転換」をめぐる、反戦闘争の持ち込み「や、職場での「党活動の確立」が主張されてきた。だが、種々な階級的労働M論なるものも、実は党主体の転換と不可分であり、極言すれば、党主体の強化の別の表現であるのだ。しかもそれも直線的に「党が強くなれば職場学園も強くなる」ということではなく、反戦・安保闘争の大規模な展開とその質的転換とSSL、共青等の政治的体質の強化が背景であり、又媒介にもなっているのである。

それ故にこそ、革命の展望と革命運動と最低限の革命生活給の内的統一の保証が不可欠なのである。又、これ等「革命と自己が共産主義突撃隊に参加することを展望しつつ、正に「思い切つて」階級的労働Mを闘う決意を固める、広くて深い認識も、又、反戦闘争・安保闘争・中央権力闘争「武装蜂起」の戦列に加つてこそ、そしてこの政治活動と一体にある党の系統的指導があつてこそ、可能なのである。

かかる「革命」政治闘争一党一地区党一経営一R・Gの活動・政治生活」に結論付けられる。職場活動家の階級闘争の転換に見合う、主体転換がない限り、「全社会的再編と闘うことや、街頭闘争を再生産する部隊を作る」なる主張は、全く空語で一般論になるばかりか、職場の組合主義的思考の党へ流入した結果の産物であり、又これでは「全社会的再編との闘いも、革命的には展開できないのである。問題は労働運動の攻防の方針がないのではなく、(部分的に)不十分な点はあるが、これを革命から位置付け一貫して貫徹する党とその組織戦術がないのである。

換言すれば、そのことに無自覚なまま、何んらの創造的意識的指導を放棄したまま、下部の不満に押従する経済主義者の経済主義的な「再生産」「MST」等々の指導こそ粉砕しなければならぬのだ。

「学生M」に於ても、問題の本質は同じなのだ。ただ、学生戦士の若さと創造力は、たちまちにして困難な壁を突破する能力をもっており、これは主に政治上の経済主義的政治指導に原因があるのである。

我々は決して、個別闘争の革命的展開や再生産の必要性を否定しているのではなく、我々こそ一番それを問題にしているが故に、これ等の核心の解決と、更なる「個別闘争の展開」と「再生産」が、最も計画的な、前段階蜂起に向けての共突建設運動と共突の活動にあることを結論するのである。

我々はR・G建設を党建設の問題として扱えた場合、それは軍事部の創設とその比重の増大、最も英雄的で有能な軍事委員の抜き、都道府県一地区への軍事委員の設置、軍事革命委、中央人民組織委への中労・中労委の改組結合、学生Sの地区への統合と地区党の強化、共青へのSSLの発展統合、そして、労対学対を中央人民組織委の産別担当として一機構化し、地区への産別の包摂etcを、党の改組と強化に際し切らねばならぬ。そして産別主義と労働運動主義を一掃しなけ

世界革命戦争を闘う部隊は、現代世界革命党確立をもって前段階蜂起に向けての準備を同盟―共青の革命的優良の部分によって作られる共産主義攻撃隊と共青から構成される都道府県、大地区軍団（地方軍）と、工場―学園―地域の工評戦士、全共闘戦士あるいは青年隊等に接触し、前二者を補給し、再生産するゲリラ軍の三者の確立でもって行なう。

反帝統一戦線は新たに止揚された党―R・G軍団を中核隊として、当面、全共闘、工評、地共を統合し、前段階蜂起に向けて闘う攻撃的な地区武装蜂起準備委員会とそれに集中される階層、産別毎の全国共闘に分解、再編されねばならぬ。

党は政治・軍事―兵站組織―の三機能を保持し、軍団の中に確立され軍団を媒介に武装蜂起準備委員会を総体として指導しなければならぬ。都市、地方、全国全区所に軍団の無数の基地が作られ、機動戦（正面戦、ゲリラ戦、奇襲戦等々）と陣地戦が有機的に組み合わせられ、現代社会の中にプロレタリア独裁の基礎を先行的に育まねばならない。

「世界赤軍の歴史的総括とその現在の創立については、第一次世界大戦とロシア革命の過程に於いて、レーニンの飛火革命論、世界革命戦争抜き政治戦論の欠陥（一国主義の残滓と受動主義）から世界革命戦争として開始されるべき17年以降が世界革命戦争抜き赤軍建設として固定され、革命の退潮期に於いて、ソ同盟防衛軍に転化し、世界赤軍の萌芽は挫折せしめられた。トロッキーは世界革命戦争、世界赤軍と労働者の世界生産軍団を主張し、一国社会主義国民軍隊化路線のスターリンと対立したが、レーニン自身をも批判し得る党内闘争を貫徹できず挫折したのである。以降約40年後の今日、我々はこの世界革命戦争と世界赤軍、世界革命戦線を主体的に日本安保闘争から復活させ、創造しようとしているのである。この点に於いては別途、詳述する。」

最近のプロ通（及び口）についてはレーニン革命論の歴史的意義とその欠陥、及びその現代的適用が現代革命論とはおよそ縁遠い反動的な性格に転化することは幾度か述べたが、ここではその政治的限界が組織問題、党内運営に適用された場合、スターリン主義に転化してしまう事を補足しておく。

① 現代過渡期世界の根本的革命は、マルクス、レーニン主義そのものではない。不可能であり、前述したような世界観、革命論、党建設論でもってしか行なわれえない。だが、党の武装は、直接的、即自的な党自身の武装で終るわけではない。階級形成―階級の武装を促進するものとして、これを媒介するものとしての党と党主体がまず武装されなければならないということである。まず党から始められなければならないということ、党自身の即自的武装を二重写しにして、階級の形成、階級の武装を抽象するということができない。この点の二重写し化が固定された場合、前衛主義と大衆M主義の二つの傾向が止揚されないまま対立は繰り返されるのである。60年安保以降の自立運動と前衛主義はこの典型であった。我々は階級形成―党形成（換言すれば、党としての闘争、党のための闘争の統一）を大衆が権力に接近し、権力を解体し、自らの権力を打ち立てる方向から（下から）とらえると同時に、それを未来（普遍）から把え直した二重の規定を行うことによって大衆を極限まで闘わせ、敗北せしめ、他方で、大衆の敗北を通じた意識の転倒過程に党派闘争を通じて普遍を持ち込み党に結集しなければならぬ。かつ、大衆の敗北と分解、党派闘争が党内に流入し党建設が自然成長性に委ねられることを、普遍からの位置付けでもっての党内闘争で克服しなければならぬものとして、その統一性を把握しなければならぬものと考えらる。大衆運動主義、党建設の自然成長論はこの下からの論理の徹底化であり、党のための闘争が欠落するし、前衛主義は党のための闘争のみで、下からの論理をくみ込み得ない閉鎖的観念的体系である。

我々には、(A)主体的、攻撃的世界観、(B)前段階蜂起―世界革命戦争論、(C)党と軍団に媒介された党のための闘争と、党としての闘争、(D)これを基礎とした党からの統一戦線への関わり合い方等を確定して来た。また、これに向けて下からの階級形成の反帝統一戦線と武装蜂起準備委員会として豊富化しようとして来た。これは下からという意味において現在ある全共闘、工評、地域共闘、産別左派運動等を、それ自体として、下から徹底化せしめ、武装蜂起準備委員会に高めるという領域である。これは(A)、(B)、(C)、(D)を前提にしつつも、独自の領域であり、これに対する路線、政策が、我々には不十分であり、現場で奮闘している諸同志との革命的交流に限界があったことを認め、緊急に武装蜂起準備委員会の下からの路線を提起しなければならぬ。

いのである。それをレーニン主義の枠内で解決しようとすれば無理が来るのは当然である。かつ、ボリシェヴィキ党の党運営と党内生活、党内生活と階級闘争の教条でもって党自身の貧困を克服することはできない。

党自身が、現代的に、再編創造されること自体「大衆―階級―人間の根本的な過渡期世界における位相、転換を通じた巨大な創造的な運動に基礎を置く以上、それは過去の経験の尺度に入れ切れないものであるが故に、中国文化革命と党内闘争の如き大衆運動路線と百花斉放でもって党自身の限界（教条、固執、官僚性等々）をもって、党自らが克服することをも自覚しなければならぬ。

現在の党内闘争は、それ故現代革命論上の対立を、その対立一般の闘争として終らせるのではなくて、かかる形式を通して、対立を止揚してゆく方向をもたねばならない。前衛自身が、自己批判と相互批判に媒介され、過去の保守性、ブルジョア性を克服するのであって自らと絶対化するとは出来ないものである。これらのことに、全く無自覚な党内闘争、党内生活のあり方を示したものがプロ通(1)、(2)である。これらのレーニン主義の政治、組織問題における教条化と、固執、生命力の無さ、委縮、保守性等々を体現する傾向こそ、党内左右中間派である。彼らは未だもってこのことに無自覚であるならば党官僚体制防衛隊としてのみ機能し、スターリニスト官僚に転落するだろう。

我々には党内闘争のあり方の基本原則において大衆くり込み路線と百花斉放を原則としなければならぬ。以上からして、P・B、各級機関は機関としての任務と個人の見解を二重写しにするのではなく、区別し機関において階級形成、党形成の原則を守りつつ、他方で党内フラクショナル分派として党内闘争を進展止揚させてゆく方向が必要である。P・B、個々の政治的見解が違い、P・Bにおいて過半数の路線が確立されない場合、P・Bは諸個人の見解も諸個人として述べ、かつ党建設において、一致した責任をもった指導を行わねばならぬ。機関紙局は同盟内の諸傾向を百花斉放的に反映させる努力をし、編集局員が記事の独占することは誤りである。各紙において百花斉放的意見が相闘わされ、大衆を巻き込むことも、基本的に正しいことである。我々は、ただちに、過去の古い党内闘争のあり方を克服し、党内闘争の新たなあり方を定着させねばならないと考える。

最近の全共闘運動と党の関係については、次のことを主張したい。

階級闘争の前進は、何よりも、党の武装から理論的、組織的に開始されねばならぬ。